納得の社会科教材

はじめに

長年、歴史実物教材を活用することについて活動を続けてきましたが、一つ心に掛かる事がありました。それは物によってはかなり費用が掛かるということです。私自身は好きでやっていることですので、多少金が掛かってもそれ程気にはしないのですが、金を掛けなければならないのかというと、必ずしもそうとは思っていません。金を掛けないでできれば、それに越したことはありません。ではどうすればよいのか。要はアイデアやセンスの問題だと思っています。博物館級の特別なものではなく、どこにでも有る物、誰もが知っている物が、視点をかえれば立派な教材になる。そんな物こそ私が追い求めてきたものです。

　勿論、私自身について言えば好きでやってきたことですから、珍しい高価な史料もいくつかは持っています。しかしそれを人に紹介したとしても、結局は嫌みになってしまう。誰もが追試できない物は、ただ見せびらかしているに過ぎないと思うのです。その気になれば、こんな物も手に入るということを広く示すという点では、無意味とは思いません。しかしそのような物を公開することには、どこか私の心の中で、すっきりしないものが残るのです。

　そこで身近な所にある教材ということに視点を据え、その網に引っかかってくる物を、思いつくままにお話しようと思ったわけです。その他に身近な教材というわけではないのですが、私の気に入ったテーマや生徒の反応の良かったことについても、気の向くままにお話するつもりです。長年勤めた教職を定年退職し、今は蓄積した物を若い先生たちに伝えることが、私の使命の一つと思っています。これから暇な時に、少しづつ書いてゆくつもりです。口語的な表現が多いのは、私の授業の録音を再生筆録したものであったり、意図して授業のような感じで書いたからです。普段の授業も、このような言葉遣いでやっていました。

とは言っても、悲しい程の機械音痴ゆえ、息子の手を借りなければ、何一つできません。途中で尻切れ蜻蛉のまま、暫く放置することもあるでしょう。また日本史が専門なので、｢社会科教材｣と題しても、日本史ばかりがめだつことになるでしょう。思いつくままに書くので、系統的に整理してあるわけではありません。おそらくおもちゃ箱をひっくり返したようなことになると思います。それでも中にはきっときらきら光るものが混じっているはず。どうぞ気長におつきあい下さい。お手紙でもいただけるととても嬉しいです。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　平成２４年　　８月　　１６日

３５５－０１５５

埼玉県　比企郡　吉見町　北吉見　１４６７－２

阿部　泉

目次

１、最初の授業　　　　　　　　 　２、原稿用紙と明朝体　　　　　　　３、調布とその重さ

４、備中鍬と千歯扱　　　　　　 　５、貝貨　　　　　　　　　　　　　６、イギリス連邦カナダの紙幣

７、時差と日の出の時間　　　　 　８、カリフォルニア米と日本移民　　９、降水量と身長

10、韓国国花　無窮花　　　　　　 11、人足寄場とキャピック　　　　　12、レストラン「とんでん」

13、開拓使とサッポロビール　　　 14、蝦夷の水産物　　　　　　　　　15、浄土信仰と春分・秋分

16、沖縄修学旅行事前学習　　　　 17、桐紋と表彰状　　　　　　　　　18、茶畑の地図記号

19、秦の始皇帝と印鑑　　　　　　 20、太陽暦の採用　　　　　　　　　21、バウムクーヘンと世界大戦

22、日本サッカー協会徽章　　　　 23、正月を迎える準備　　　　　　　24、ヒンドゥー教の神々

25、ユダヤ教と安息日　　　　　　 26、オランダ貿易と白詰草　　　　　27、熱帯雨林気候とラワン

28、来迎　　　　　　　　　　　　 29、霧を作る　　　　　　　　　　　30、紡績

31、節分　　　　　　　　　　　　 32、ジャガイモの原産地　　　　　　33、律令官制と名前

34、土師器と須恵器の色　　　　　 35、紙の発明と竹簡　　　　　　　　36、椅子に座るということ

37、黄土と黄砂　　　　　　　 　　38、西洋の暦　　　　　　　　　　　39、陶器と磁器

40、イスラム教と偶像　　　　　　 41、アラベスク模様　　　　　　　　42、焼畑農業とタピオカ

43、卑弥呼とブリキ　　　　　　　 44、穢れと清め　　　　　　　　　　45、トルコ行進曲

46、東京駅・江戸城歴史散歩　 　 47、池坊と立花　　　　　　　　　　48、万葉仮名の生徒の名前

１，最初の授業

　さあて、これから一年間日本史の授業をするにあたって、少しお話しておきたいことがあります。まずは、日本史を好きか嫌いかを聞いてみたい。いいかい、必ずどちらかに手を挙げるんだよ。それじゃあ、まずは好きな人は？

えっ、これしかいないの。びっくりしたなあ、もう。それじゃあ嫌いな人は？　むむ、こんなにいるの。参ったなあ。でもまあいいでしょう。嫌いな理由を聞いてみようか。はい、Ａ君。｢覚えることが多すぎるから｣。成る程ねえ。確かに多いよね。次にＢさんはどうかな。｢興味ないし、関係ないし････｣。確かに関係ないと言えば関係ない。その時頼朝が何をしようと、家康がどうしようと、君に直接の関係はない。みんなが興味があるのは、彼氏・彼女のこと、食べること、進路のことなど、まあ当然のことだね。でもね、歴史ってとっても大事なことなんだよ。日本史の授業が嫌いというなら、私の責任も大きいけれど、まあそれはそれでいい。でもね、｢歴史なんかどうでもいい｣と言うなら、それは絶対に認めるわけにはゆかんのだ。それはこういう訳だ。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（平成２４・８・１６）

　私たちは今、薄っぺらな｢現在｣という時間の上に立っています。こうやってお話しているうちに、一分前は｢現在｣であったものが、もう｢過去｣になってしまう。それ程に｢現在｣というものは薄っぺらなものなのです。そしてその｢現在｣の下には、｢過去｣という先祖が積み重ねてきた｢歴史｣が隠れているのです。｢現在｣という薄膜が覆って隠しているので、一寸見渡しただけでは｢過去｣の｢歴史｣は見えないけれど、もし｢歴史｣がなかったなら、｢過去｣の蓄積がなかったなら、｢現在｣というものは存在できない。薄皮一枚の｢現在｣は、｢歴史｣という｢過去｣の積み重ねの上にあって、初めて存在できるわけなのです。

　もし｢歴史｣なんてどうでもよいと突っ張るならば、私達の祖先が残してくれた物の恩恵に一切頼ることなく、｢現在｣を生きてご覧なさい。早い話が、漢字も平仮名も、みな祖先が残してくれた文化の積み重ねだ。身の回りの一切の物が、みなそうなのです。

　もう私の言わんとすることがわかったでしょう。私達は誰一人として｢歴史｣の恩恵に依らないでは生きていけないのだ。繰り返して言う。日本史の授業は嫌いでもよろしい。しかし日本人として、｢日本の歴史なんかどうでもよい｣とは、絶対に言ってはならないのです。｢現在｣という一瞬の時間に覆われているため、日常生活の中では｢歴史｣を実感することはほとんどない。しかしよくよく目を凝らして見ると、｢現在｣の薄皮に隠された｢歴史｣を見て取ることができるのです。　　　　　　　　　　　　　（平成２４・８・１７）

　例えば、私達は日常的に漢字を使っています。しかし｢漢字｣という字をよくよく見てご覧なさい。｢中国の字｣という意味だ。私達は外国の文字で日本語を書いていることになります。もちろん平仮名や片仮名も使っていますが、それとても漢字がもとになっています。日本人がいつから漢字を使うようになったかについては、大いに議論のあることですが、とにかく大和時代の初め頃、帰化人が日本に来て文字とその読み方を伝えました。しかし日本人は既に｢大和言葉｣とも言うべき言葉を持っていましたから、それぞれの漢字にその大和言葉を当てはめ、それが後の訓読みになっていく。そして同時に帰化人から伝えられた読み方も受け容れ、それが音読みになって行くのです。原則として漢字には音読みと訓読みがあるのは、そういう訳なのです。もっとも後の遣唐使の頃や、鎌倉時代に伝えられた音もあるので、全ての音読みが大和時代の大陸文化の受容に由来するとは言い切れないのですが････。

　いいかい、よくよく考えてご覧なさい。漢字・音読み・訓読みということに、普段は｢歴史｣を感じることはまずないでしょう。しかし考えてみれば、これは素晴らしい文化遺産なのです。何しろ、外国の文字と発音を受け容れ、民族独自の言葉と融合させてしまったのですから。とにかく漢字の音読みと訓読みに、一瞬でもよいから大和時代に思いを馳せてほしいのです。　　　　　　　　　　　　　　　　（24・8・18）

　もう一つ例を挙げてみましょうか。教科書の文字をよく見てご覧なさい。このような書体を何と言うか。ほら、ゴシック体とかポップ体とか言うように。｢明朝体｣。そうだね、明朝体だ。パソコンの授業で習ったはずですから、名前を知らない人はいないでしょう。ところで｢明朝体｣とはどのような意味なのでしょう。｢明るい朝かな｣。成る程ね。確かにそういう意味がありそうにも見える。でもね、｢明るい朝｣とは全く関係ないのです。そもそも｢明るい朝｣と｢書体｣には、何の脈絡もないでしょう。

　実はこれは中国の｢明朝で用いられた書体｣という意味なんだ。江戸時代の初期に、明から隠元という禅僧が渡来し、黄檗宗という新しい禅宗を伝えてくれた。そして多くのお経が版木で刷られて出版されたのだけれど、その書体が明朝体なのです。特徴は、横画が細くて、その右端が三角形に少し盛り上がっている。そして縦画がやや太いことにある。漢字は概して縦画より横画が多いため、明朝体なら画数が多い字でも、余白があって読みやすい。新聞に用いられるような小さな文字には、打って付けというわけなのです。

漢字を音読みするたびに、明朝体を見るたびに、大陸文化の受容にまで思いを馳せる人はいないでしょう。さすがの私でもそんなことはありません。しかし改めてお礼申し上げます。改めて振り返ってみると、現代生活の中に、歴史の痕跡が隠れていることに気が付くことでしょう。

このように現代の私達の生活は、全て祖先が残してくれた歴史の積み重ねの上に成り立っているのです。こういうことに心を留めながら、一年間お話をするつもりです。皆さんはきっと、歴史はどうでもよいものではなく、現代を支えている大切なものであることがわかってくれるでしょう。そしていずれ私も君達も、その歴史の一部になって行くのです。現代の生活の身近な所に歴史の痕跡が沢山あることに気がつき始めると、きっと歴史の勉強が楽しいものになってくると思います。

最初の授業はまだまだ続くのですが、とりあえずこの辺で終わりにしておきましょう。

　これまでお話してきましたように、｢歴史の痕跡｣は一見しただけではそれとわかりません。それをそうと見抜くためには、一つには弛まぬ｢研修｣と、｢幅広い知識｣と、何にでも興味を持って体験しようとする旺盛な｢意欲｣が不可欠です。その他には、それを見抜く｢センス｣と｢運｣があればなおよいのですが････。

例えば、平等院鳳凰堂は西方極楽浄土を地上に模して作られたため、東面して建てられています。基礎的なことではありますが、これは｢研修｣によって知ることができます。現地に行ってそれを確認納得するためには、金と時間をかけてでも行こうという｢意欲｣が必要です。欲を言えば現地で方角を確認したい。方向磁石が無くとも、アナログの腕時計で方角を確認することができます。短針を太陽の方角に向け、｢12｣の表示と短針の作る角度の二等分線が常に南北を指しています。一見して歴史に関係ない知識でも、｢何事も経験が大切｣と体験して身に着けていた｢幅広い知識｣が、思わぬ場面で役に立つのです。そして墓地の分譲について、東向きの墓地の方が西向きの墓地より高価であることに気が付くのは、もはや｢センス｣の問題です。彼岸の中日に、阿弥陀堂の対岸から阿弥陀堂を見て、阿弥陀如来像に重なるように夕日が沈むのを見られるとしたら、それはもう｢幸運｣としか言い様がありません。

センスの問題と言ってしまえば、センスがない人にはどうしようもないと言われるかもしれませんが、センスは磨けば光るものです。それには日常生活の中で、何か歴史の痕跡であるものがないかと、常にレーダーを回して網を張っている必要があります。そうすると、今まで見逃していたものが次々に引っ掛かり、実は歴史の痕跡であったことに気が付くことでしょう。これからお話するつもりの事柄も、多くはそのようなありふれたものでありながら、歴史の痕跡でもあるのです。さあどのようなものがあるか、楽しみにしていて下さい。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（24・8・19）

２，原稿用紙と明朝体

　さあて何から書きましょうか。昨日、明朝体のお話をしたばかりですので、まずはその明朝体に関係ある、身近な教材を取り上げましょう。題しまして｢原稿用紙と明朝体｣。一体両者にどのような関係があるのでしょうか。一見しても結び付かない物が、歴史的には結び付いてくる。そこに｢納得｣が生まれてくるのです。

　承応三年（1654）、長崎に在住する中国人の度重なる招聘に応えて、明の禅僧隠元隆琦が崇福寺の住職として来日し、黄檗宗を伝えました。隠元自身は３年で帰国するつもりだったようですが、周囲がそれを認めません。４代将軍徳川家綱は山城国の宇治に寺領を寄進し、中国にあった黄檗山万福寺と同じ名前の禅院を創開。帰国を断念せざるを得ない状況になりました。

　この隠元の弟子に、鉄眼道光という日本人僧侶がいました。彼は寛文四年（1664）、一切経（大蔵経）全巻の開版を志しました。一切経とは、簡単に言えば仏教の経典の大全集でして、一人の人間が一生掛かっても読み切れない程の量があります。彼は数々の苦難を乗り越えて、ついに延宝六年（1678）に完成させました。読むだけでも大変ですのに、それを版木に彫って印刷するという、途方もない大事業です。

　版木はそれぞれが26㎝×82㎝×1.8㎝の大きさで、総計約６万枚に及ぶそうです。版木は桜材で、節のないこの大きさの板を採れる桜の木が何本必要であったか。桜の名所の吉野に近かったことは、材料を得やすかったとはいえ、それにしても大変なことなのです。

　これらの版木は｢鉄眼版｣と呼ばれ、現在は万福寺の塔頭である宝蔵院に伝えられています。そして驚くべき事に、今なお刷り立てが行われているのです。話が一寸逸れますが、大学院生の頃、塙保己一が開版した『群書類従』の版木を保存している、渋谷の温故会館に住んでいたことがあります。私の母校である國學院大學に隣接していて、登校時間が１分という便利なところでした。それはともかく、そこでは今もその版木で刷り立てが行われ、『群書類従』が販売されているのです。高価な物でしたが、手間の掛かる作業を見ながら、それも当然と思ったことでした。現在の本が安すぎるのです。　　　　　　　　　　　（24・8・20）

　閑話休題。この版木は、刊行物やパソコンのフォントとして、日本では最も馴染みのある明朝体で彫られています。明朝体の特色は、｢はじめに｣で既にお話しましたように、縦画が太く横画が細く、また横画の右端が三角に盛り上がっていることにあります。一般に漢字は横画の方が多いので、横画が細い方がすっきりして読みやすく、理に適っています。例えば｢書｣という漢字を、横画を太く縦画を細く書いたら、線の間隔が詰まって、判読できなくなってしまう。文字の大きな新聞の見出しならともかく、新聞記事がみなゴチックで印刷されるとしたら、字の大きさはもっと大きくならざるを得ないでしょう。

　さてそれらの版木で刷られる一切経は、現在でも販売されていますが、あまりにも膨大で、個人の手に負えるような物ではありません。しかし幸いなことに、日本人に馴染みのある般若心経ならば版木一枚に収まり、それだけを買うことができるのです。万福寺の山号の｢黄檗｣は、もともとはその樹皮から黄色の染料が採れる樹木で、防腐効果もあるため、写経の料紙に塗られることもあったそうです。その般若心経も黄色の紙に刷られています。黄檗は高価ですから、もちろん現在は黄檗染めではありませんが、その色からも｢黄檗｣を印象付けられます。教材として、是非とも一枚手許に置いておきたい物です。

　さてようやく原稿用紙のお話です。その般若心経を見ると、１行に20字で、20行に割り付けされています。空白の部分があるため、そう見えないかもしれませんが、400字はなくとも、割り付けだけは20字×20行、計400字になっていて、現在の原稿用紙と同じなのです。本当は順序が逆で、現代の原稿用紙の書式は、この鉄眼版をもとにしてできたものなのです。

　宝蔵院には多くの見学者が来ますが、その大半が印刷やフォントに関わる仕事をしている人達だそうです。何をするにも、原点を見ておきたいということなのでしょう。見習うべき心掛けです。

　私の手許には般若心経その物ではありませんが、ぎっしりと400字が詰まった、鉄眼版の一枚があります。これなら現代の原稿用紙のもとになったことが一目瞭然で、しかも明朝体の原点ですから、教材としてはとても有効です。御希望の方にはコピーをお送りしますので、御連絡下さい。

　さあ、原稿用紙一枚持って、教室で熱く語って下さい。それにさらに隠元豆でもあれば、申し分有りません。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（24・8・21）

３，調布とその重さ

律令税制の学習では、必ず調や庸として布を都まで担いで運んだということに触れます。その長さと幅について、養老令には、調の布は正丁一人につき｢二丈六尺｣、庸の布は同じく｢二丈六尺｣、幅は共に｢二尺四寸｣ということになっています。｢二丈六尺｣は約7.9ｍ、｢二尺四寸｣は約71㎝ですが、調布と庸布を合計すれば、正丁一人につき、５丈２尺、約16ｍも納めることになります。

これが実際にはどれ程の量感があるのか、実物で表現してみたいと思ったところまでは良かったのですが、いろいろ調べているうちに、布の長さや幅が改訂されていることがわかりました。『令集解』に記された養老元年（717）12月2日の格によれば、正丁一人の調布は、２丈８尺、庸布は１丈４尺、合計４丈２尺。幅は共に２尺４寸ということになっています。４丈２尺は約12.4ｍですから、かなり短くなりました。そして『続日本紀』の天平８年（736）５月12日には、調布2丈８尺、庸布１丈４尺、幅は共に１尺９寸と、改訂されたという記事があります。１尺９寸は約56㎝ですから、幅が狭くなったわけです。

実際にはどうであったのか、正倉院に残された調布の実物によると、長さは４丈２尺、幅は２尺４寸。庸布は２丈８尺、幅は２尺４寸であるそうです。４丈２尺という数値は、養老元年・天平８年改訂の調布と庸布を合計すればちょうど同じになり、幅は養老令・養老元年の改訂と一致しています。調布と庸布を合成して一人分としたと考えればよいのでしょうか。このあたりになると、専門の研究者ではないので、何とも自信がありません。まあともかく実際には、養老令の調布・庸布の合計５丈２尺よりは少し短かったようです。しかし実際の授業では、そのような細かい改訂に触れる必要はなく、｢二丈六尺｣、約7.9ｍで十分でしょう。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（24・8・22）

話をもとに戻しましょう。調布・庸布の量感を、実物で表現したいということでした。結論から言えば大変軽く、私の実験では麻布２丈６尺でせいぜい１㎏程度でした。この重さなら、都まで運ばれて中央の財源になったことも納得できます。租は国衙に運ばれ地方財源となったのは、米の重さを考えれば当然のことです。収穫の約３％といわれる租米の重さがどれ程のものか、まだ計算していませんが、家族で誰か一人が代表して家族分を担ぐとしたら、数十㎏になることは明らかです。租は地方財源、調布・庸布は中央財源ということを理解させるためには、現代の物でもよいですから、２丈６尺の布を持たせてみたいのです。

そこで布を探すわけですが、綿布が日本にもたらされたのは、室町時代の日朝貿易によるとされていますから、できることなら麻布がよい。しかし100％麻の布は、現代ではかえって見付かりません。有ったとしても、１ｍあたり千数百円もしましたから、８ｍともなると１万円以上になってしまいます。それでもよくよく考えてみれば、当時は役人の給与として布が支給されていたわけですから、そもそも小遣銭程度で買おうということが間違っているのだと、妙に納得もしたものです。

いろいろ探しましたが、インドの綿布ならアジア諸国の雑貨を扱っている店で、比較的安く手に入ります。ベッドカバーなどにするための無地の布なら、裁断して縫い合わせることにはなりますが、８ｍの布に作ることができます。麻布ではありませんが、糸がやや太めで目も粗いので、いかにも手織りの感じがあり、綿布であることを断りさえすれば、十分に教材として有効です。もし100％麻の布が手に入るなら、短くてもよいですから、手許に置いておきたい。感触だけでも体験させたいですし、室町時代に綿布が朝鮮からもたらされたという話でも、綿布の優れていることを比較・納得させる教材として使えるからです。

どうしても奈良時代の布がよいというならば、方法がないわけではありません。当時の瓦には、表面に布目が残っているので、痕跡ではありますが、正真正銘当時の物なのです。私が若い頃には、各地の国分寺跡などには砂利代わりに敷かれていたものです。下野薬師寺に行った時など、畑の脇に山と積まれていて驚いたものでした。農家の人が耕すのに邪魔だったらしく、掘っては掘っては放り出していました。東大寺の塔の跡にも沢山転がっていました。現在は文化財に対する認識も変わり、そういうわけにはいきません。しかし私の住んでいる近くの鳩山町には窯跡が沢山あり、冬に水田の水がなくなると、須恵器片に混じってたまに瓦の破片を拾うことができます。この布目瓦の糸の密度を調べてみると、１㎝に８本前後でした。この密度であれば、蚊帳のようなものですが、糸が太めなので、目が粗くとも服には縫えるかと思いました。保温性は良くないでしょうが、通気性は抜群でしょう。

８ｍの麻布が無理なら、麻布の端布と、継ぎ接ぎの８ｍの綿布と、布目瓦と、３つ併せれば、合わせ技で一本と見なしてよいでしょう。奈良時代のモノ教材などあるはずがないと決めつけてはなりません。

ここまで毎日少しづつ書いてきましたが、手許に原稿があるわけでなし。気の向くまま気楽に書いていますので、脱線はご容赦下さい。さあて明日は何を書きましょうか。明日になってから考えます。（24・8・23）

４，備中鍬と千歯扱

　江戸時代の農業の発達については、耕地の拡大、農具の改良、肥料の使用、農学の発達、商品作物の栽培などについて学習するでしょう。農具の発達については、必ず触れられるのが備中鍬と千歯扱です。

まず備中鍬ですが、｢田の荒起こしで深く耕すことができる｣と説明されています。しかし体験がないので、ぴんと来ません。普通の鍬とどこが違うかな、と聞けば、フォーク状の刃の形に特徴があることは、誰でも気が付きます。単純な形ですから、改良点と言えばその特徴的な形しか思い当たりません。もちろんそれで正解なのですが、それがなぜ深耕用なのかわからないのです。実際にやってみれば、説明も理屈もなしに理解できることなのですが、教室に本物を持ってきたとしても、耕すことはできません。

　そこで私が使う小道具は、何と孔のあいた包丁です。胡瓜などを連続して薄く切ると、包丁にぴたりと吸い付いてしまい、切りにくいものです。ところが孔が並んであいている包丁を使うと、包丁に吸い付かないのでとても切りやすいのです。それは孔の部分の空気が胡瓜と包丁の間に挟まれるためなのですが、同じことが備中鍬にも当てはまるのです。

春の農耕開始に当たり、まずは田の荒起こしをします。いくら冬の間に土が乾いたといっても、田の土は粘土質で、畑の土とはわけが違います。板状の普通の鍬を深く打ち込むと、ぴたりと吸い付いてしまって、鍬がなかなか抜けません。しかし備中鍬ならば空気が挟まるので抜けやすく、労力が少なくてすむのです。このように説明してやれば、備中鍬を使った経験がなくとも、その効用を理解することができます。

孔あき包丁すら知らない生徒には、説明のしようもないのですが、そういう時、私はここぞとばかり｢生活経験の幅が、あらゆる学習の理解を助けているのです。｣と力説したものです。　　　　　（24・8・24）

次は千歯扱です。考案されたのが元禄のころですから、同時期に上梓された宮崎安貞の『農業全書』には見当たらず、扱箸による脱穀が描かれています。扱箸とは、箸状の二本の棒の間に稲穂を少しづつ挟み、扱いて籾を取る道具です。手間はかかりますが力仕事ではないので、主に女性の仕事でした。この方法では一日に20～30束しかできないというそうです。

それに対して千歯扱は面白い程籾が取れたでしょう。歯が沢山並んでいるので｢千歯扱｣と書きますが、能率が飛躍的に向上したので、｢千把扱｣と書くこともあったそうです。そうすると扱箸を使った女性の臨時労働力が不要になり、｢後家倒し｣の異名をとったとは、よく知られています。道具としては余程の優れ物で、大正期に回転ドラムにピンを植え付けた、足踏式脱穀機が考案されるまで、長期間にわたって使われ続けたのでした。

さて千歯扱の実物は博物館でもよく見かけ、珍しい物ではありません。しかし実物を教室に持ち込むのは難しいでしょう。まして実演するとなると、大掛かりになってしまいます。そこで私がよく使う小道具は櫛なのです。櫛の歯の隙間にもよりますが、必ずしも稲穂である必要はありません。他のイネ科の雑草で十分です。要するに原理を理解できればよいのであって、この方法で十分に効果的です。むしろポケットの中からミニ千歯扱を取り出して見せる面白さが、生徒には喜ばれるのです。

５，貝貨

　毎日何気なく使っている貨幣ですが、改めて考えてみますと、人類共通の偉大な発明と思うのですが。もし貨幣がなかったなら、互に交換を了解した者の間にしか物々交換が成立せず、経済活動は途端に麻痺してしまいます。その不便さを取り除き、交換の媒介物となるのが貨幣です。

貨幣となりうる物には、いくつかの条件があります。

　①価値が長く変化せず、価値の保存が可能であること。

　②誰もが共通してその物の価値を認めていること。

　③大きさや重さが手頃で、携帯や運搬が便利なこと。

　④質が均一で分割が可能であり、数量を客観的に表せること。

　⑤一般には入手が困難であるが、流通に必要な量は存在すること。

これらの条件を全て満たす物となると、そうざらにあるものではありません。歴史的には、金がそれであることは、誰もが納得することでしょう。 　　　　　　　　　　　　　　　　　　 （24・8・25）

古代中国の殷では、宝貝が貨幣として用いられていました。また世界各地でかなり後まで同様に使われていたということですが、私自身はこのあたりのことは確認していません。日本ではその形が妊婦や女性性器を連想させることから、豊饒・子孫繁栄の呪物とされたり、妊婦がこれを握っていると安産すると信じられ、｢子安貝｣とも呼ばれました。『竹取物語』には、｢燕の子安貝｣と称する謎の珍宝として記されています。

宝貝は堅牢で美しく、大きさも手頃です。孔をあければ紐を通して携帯に便利です。産出するのは熱帯から亜熱帯の海で、日本では沖縄で採れます。中国ではベトナムに近い所にしかありませんから、少なくとも殷の支配地域では採れません。このように宝貝は貨幣としての条件を満たしているため、殷から西周にかけて、貨幣として使われてきました。

よく言われることですが、経済活動に関わる漢字には、｢貝｣を含んだ文字が多いというので、漢和辞典で探してみました。貢・貨・責・貪・貴・貸・費・買・財・賄・賜・賞・賤・贅・贈・贄・質・賑・賃・資・貿・賀・貧・寶、等々。詳しい漢和辞典で調べれば、もっと沢山あることでしょう。

さてこの貝貨ですが、古銭市場では簡単に入手できます。かつては一つで千円以上しました賀、最近では百円単位で売られています。ただしそれらは墓に埋葬された物が出回っているらしく、流通経路の中で発掘された物とは限りません。しかし貝貨にかわりはありませんから、それ以上の考証・詮索は学者に委せておきましょう。

本物の貝貨はそれ自体に価値があり、それはそれでよいのです。しかし長い間に風化・劣化して、宝貝本来の美しさはありません。それならいっそのこと、現代の宝貝で作ってしまえ。所詮は偽物ですが、作りたての偽物のほうが、風化した本物より当時の本物に近いのですから。というわけで、修学旅行で沖縄に行ったついでに、きれいな宝貝を買って帰りました。そして宝貝の膨らんでいる方を目の粗い砥石で、孔が開くまで研磨すれば出来上がり。

またアジア・アフリカの雑貨を扱っている店には、孔を開けた宝貝を各種工芸品の装飾として縫い付けた物が沢山並んでいます。これを買ってきて縫い付けた糸を解けば、そのまま複製の貝貨となります。ただ私がこれまでに見てきた本物の貝貨の大きさからして、せめて２㎝くらいの大きさの物がよいと思います。

私は一つ財布に入れて一人で勝手に楽しんでいるのですが、ほしい生徒にはやるよ、と言ったところ、使えないお金じゃ要らないと言われてしまいました。全く現金な現代っ子です。　　　（24・8・26）

６，イギリス連邦カナダの紙幣

　｢カナダ国王｣と聞いて、初めは耳を疑ってしまいました。恥ずかしながら、カナダに国王がいるとは知らなかったからです。カナダ紙幣にエリザベス女王の肖像画あるのは知っていましたが、イギリス連邦の一員であるからだろう、という程度に思い込んでいました。

カナダの国家としての正式名称はCANADAですが、政治体制としては、議院内閣制による立憲君主国です。その｢君主｣はイギリス国王が兼ねていて、イギリス国王は同時にカナダ国王でもあるわけです。そういうわけで、形式上はイギリス国王たるカナダ国王が、カナダの国家元首ということになります。しかし実際的には、イギリス国王の名代であるカナダ総督がカナダの国家元首で、国軍の最高司令官でもあります。そしてカナダ総督の任命権はイギリス国王が持っていることになってはいますが、実際にはカナダ首相の指名に基づいて任命され、イギリス国王が干渉することはないとのことでした。　　　　　　　　　（24・8・28）

そもそもイギリスとカナダの歴史的関係は、1497年、イギリス国王ヘンリー７世に派遣された探検家ジョン・カボットが、ニューファウンドランドに上陸し、イギリス領を宣言したことに始まります。ところが1534年には、フランス国王フランソワ１世に派遣されたジャック・カルティエがセントローレンス湾岸一帯に達して、フランス領を宣言しました。ここに後世大きな問題となる、ケベック問題の種が播かれたわけです。

17世紀になると、フランス人がセントローレンス川流域の開拓を進め、一帯はフランスの植民地になりました。そして1682年にはミシシッピー川までがフランス領であると宣言され、1712年にはメキシコ湾に面したルイジアナまでに拡大されました。しかし北米大陸の植民地をめぐるイギリスとフランスの対立が激しくなり、1755年にはフレンチ・インディアン戦争が勃発。1763年のパリ条約の結果、イギリスはミシシ　ッピー川以東をフランスから獲得して、ケベック地域を含むカナダはイギリス領となりました。

その後幾多の変遷を経て、1931年のウェストミンスター憲章により、カナダの独立が承認されて実質的な独立国になり、1982年にカナダ憲法が制定されて、名実共に完全な独立国になりました。そしてその後もイギリス連邦に留まり、共通の王母の園戴くことになったのです。　　　　　　　　　　　（24・8・29）

カナダの歴史について学習する際、必ず触れられるのが｢ケベック州｣の問題です。ケベック州はカナダの東部にある州の一つで、1976年にオリンピックが開催されたモントリオールという都市はよく知られています。すでにお話しましたように、ケベック州にあるセントローレンス湾岸・セントローレンス川流域は、早くからフランスの植民地となり、｢新しいフランス｣を意味する｢ヌーヴェル・フランス｣と呼ばれていました。その後パリ条約によってイギリス領となりましたが、イギリスはアメリカ東海岸の１３植民地に対抗する必要上、ケベックの住民にイギリス国教会の信仰を強制せず、フランス人の信仰であるカトリック、フランス民法、フランス語の使用を認める政策を行いました。しかしこれが後々まで尾を引くことになります。

フランス系カナダ人はカナダ全体では少数派ですが、ケベック州では約７割を占める多数派で、現在に至るまでフランス的アイデンティティーを保持してきました。そしてフランス系住民が経済力では弱者であることと相俟って、カナダ国内の大きな政治問題となっているのです。

ケベック州問題が特に注目されるようになったのは、1960年代以降のことです。1969には英仏両語が対等な公用語とされ、1977年にはケベック州ではフランス語が唯一の公用語とされると、分離独立運動が一気に盛り上がりました。しかし1980年、分離独立を問うケベックの住民投票では、59.6％が独立に反対、1995年の住民投票では、50.5％が反対し、分離独立は僅差で否決され現在に至っています。（28・8・30）

以上のようなカナダとイギリスの関係や、ケベック問題の教材として、エリザベス女王の肖像の描かれたカナダ紙幣を使ってみたいものです。最近カナダ紙幣は新しいものに切り替えられつつあり、女王の肖像画描かれているのは、２０ドル紙幣だけになってしまいました。しかし２０ドルでは、教材としては高価過ぎます。そこで活用したいのが、旧１ドル、２ドル紙幣です。硬貨にはセント単位のものから２ドルコインまで、すべて女王の肖像画描かれています。これなら安価で、世界各地の貨幣を扱っている店で、簡単に手に入ります。

カナダでは英語とフランス語が公用語であるため、必ず英仏2カ国語で金額や銀行名が表記されています。１ドル紙幣なら、｢ONE　DOLLAR｣ と｢UN　DOLLAR｣、２ドル紙幣なら｢TWO DOLLARS｣と｢DEUX　DOLLARS｣、またそれぞれに｢BANK OF CANADA｣と｢BANQUE DU CANADA｣が並記されています。これ一枚でエリザベス女王がカナダ国王でありカナダの国家元首であること、またケベック問題の存在が一目でわかりますから、教材としてなかなか説得力があるのです。

世界史の実物教材というのは、なかなか入手できないのですが、その点で紙幣には教材となる物がたくさんあります。探せばまだまだ他にもあることでしょう。

７，時差と日の出の時間

地球は球体で、自転をしています。これは小学生でも知っています。しかしそれを体験的に理解しているわけではありません。体験というならば、地球を一周しなければならないかというと、そういうわけでもありません。工夫次第で、地球が｢球｣であり自転していることを体験的に理解させることができます。

それに必要な物は、何とテレビです。テレビでそれがどうしてわかるのでしょうか。それに気が付いたのは、私の修学旅行引率の体験からでした。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（28・8・31）

いつのことかは忘れてしまいましたが、埼玉県から九州までの修学旅行が解禁となった時のことです。運動部の生徒が、早朝に練習をしたいので、ボールを持って行ってよいかと言うのです。私は日の出の時間が遅いから、やめたほうがいいよと言ったのですが、結局生徒たちはボールを持って行きました。地図を見ると、千葉県船橋市付近を東経140度の経線が、佐賀県唐津市付近を東経130度の経線が通っていますから、経度の差は約10もあります。経度が15ずれると１時間ずれますから、緯度の差は無視するとして、長崎の日の出は埼玉より約40分も後れるはずです。朝の40分の差は大きいですよ。後で生徒に聞いてみると、結局暗くて何もできませんでした、ということでした。後には沖縄まで解禁となってからは、時間の差はもっと大きくなりました。ただし実際の日の出の時間差は、経度だけでなくて緯度の差や季節にも影響されます。正確には複雑な計算が必要なのでしょう。とても素人の手に負えるものではありません。

このような体験は修学旅行であるからできたのですが、実際に旅行をしなくても、テレビを利用すると、それに似た経験ができるのです。NHKの朝５時過ぎの天気予報では、札幌・東京・大阪・松山の風景画映し出されていました。経度は札幌で141度強、東京が140度弱、大阪が135度半、松山が133度弱。東西で約８度の差がありますから、日の出の時間差は約30分あります。当然のことながら、札幌や東京は明るくても、大阪は東京よりやや暗く、松山はもっと暗い。早朝のテレビなので、教室で直接見せることはできませんが、録画をしておけば可能です。ただし季節によっては６時台の予報の方がよいこともあります。真冬ですと、札幌から東京まですべて真っ暗では、差がわかりません。放送時間が違えば、場所も違うはずですから、よく確かめて下さい。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（28・9・1）

話は修学旅行に戻ってしまいますが、旅行の事前指導で、私はいつも次のように話しています。｢明日はいよいよ出発ですが、今日の夕方、何時頃に太陽が沈むかを観察しておきなさい。そして明日の夕方、同じ時刻の明るさを比べてご覧なさい。埼玉に比べてまだ明るいことがよくわかるでしょう。その明るさの差こそ、地球が自転し、日の出・日の入りの時間が、東から西へずれてゆくことの証拠なのです。浜辺で遊んでもよいけれど、一瞬立ち止まって体験的に学習してほしいのです。｣と。

西日本の生徒は、冬にはまだ暗いうちに家を出るのでしょう。埼玉では冬でも朝７時になれば暗いことはありませんが、九州ではまた薄暗いはずです。西日本では東日本より日没の時間が遅くなりますから、放課後の部活動の時間が長くなるのでしょう。夏には野球部が夜７時過ぎまで、練習をできるのでしょうか。九州の友人に聞いてみたいものです。

８，カリフォルニア米と日本移民

　野田総理がTPPの交渉に日本が参加することを表明し、賛否の議論が盛り上がっています。どちらの主張にもそれなりの理があり、私自身はどちらがよいのか正直に言って判断できません。まあそれはともかく、日本は輸入米に788％の関税を掛けています。正確には１㎏に対して何円というように重量に対して課税しているのですが、それを百分率で表現すると、そのようになってしまう。もしそれが完全に撤廃されると、国産米はとても太刀打ちができず、日本の農業は根底から崩壊してしまうのではという心配も、説得力があります。

日本への輸出が拡大されるとすれば、アメリカ米の主産地は、カリフォルニア州のサクラメント平野です。サクラメント平野の年間降水量は、600～500㎜程度。日本の全国平均が1610㎜、最も少ない長野県でも932㎜ですから、日本には類例のない程の乾燥気候なのです。そんな乾燥気候で、どうして水稲が栽培できるのか、不思議に思いました。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（28・9・2）

確かに降水量は少ないものの、気温は温暖であり、山岳地帯からの雪解け水が豊富なため、灌漑設備さえ整えば稲作に適した条件を整えているということです。成る程と、妙に感心してしまいました。

アメリカ西部のカリフォルニアで稲作が本格的に始まったのは、２０世紀初頭のことだといいます。１９世紀の中頃、カリフォルニアには数万人の中国人労働者が住んでいました。彼らは主に鉄道建設の労働力であり、アジア系の移民はその後も更に増加し続けていました。そして彼等の食料とするために、稲作が試みられました。初めはインディカ種の栽培が試みられましたが、失敗を繰り返し、結局はサクラメント平野の土壌に適した米として、1912年（大正元）、ジャポニカ種の商業的栽培が始まったそうです。

稲の栽培方法はアメリカの在来農法とは全く異なり、栽培方法の定着には日本人移民の経験と技術によるところが大きかったのは言うまでもありません。折しも1914年（大正３）に始まった第一次世界大戦により、米の需要が増大し、大規模経営による稲作は順調に拡大の一途を辿りました。しかし戦後恐慌に見舞われ、稲作の経営は大打撃を受けました。またカリフォルニア州では1913年（大正２）に外国人土地法が成立していて、市民権のない日本人は土地の所有をできず、また３年以上の借地も禁止されていましたから、その経営基盤が脆弱だったことも原因の一つでした。　　　　　　　　　　　　　　　　　（28・9・3）

その後同法はさらに規制が強化され、他の州にも拡大していきました。そして1924年（大正13）には、連邦議会で所謂｢排日移民法｣が制定されました。その内容は、｢帰化不能の外国人の移民全面禁止｣を定めたもので、日本人移民を名指しして禁止したわけではありません。しかし事実上、日本人を対象としたものでした。当時アメリカ全土には約１２万人の日系人がいました。わけてもカリフォルニア州には７万人以上も住んでいましたが、多くの日本人がこれによって帰国に追い込まれたのでした。それでも僅かに日本人移民による稲作経営は続いていました。しかしそれすらも、太平洋戦争の勃発によって完全に崩壊してしまいます。西海岸の日本人は、有無を言わさずに強制収容所に送り込まれ、農場もすべて解体されてしまったからです。

戦後、日本人の稲作経営は、いくつかの例を除いて復活することはありませんでした。現在栽培しているのは、必ずしも日系人ではありません。日本向けに栽培されているジャポニカ種としては、日本でも馴染みのコシヒカリやアキタコマチがあり、日本でカリフォルニア米として買うことができます。ただ近年は短粒のジャポニカ種と長粒のインディカ種の中間の、中粒種が多いということです。中粒種は日本米よりやや大粒ですが、食感は日本米と同じで、日本人ならそれほど抵抗なく食べらるものです。

これを袋のまま買ってきて、日本米と比べて見せ、なぜカリフォルニアで｢コシヒカリ｣や｢アキタコマチ｣が栽培されているのか考えさせてみましょう。ついでにインディカ米があればなお効果的です。カリフォルニア米の栽培は、かつての日本人移民が種を播いたものなのです。買ってきたカリフォルニア米そのものは食べてしまってもよいでしょうが、袋は教材として保存しておきたいものです。日本人移民、アメリカの排日問題、さらには貿易の自由化まで、いろいろに発展させることができます。

現在、世界の米の輸出量の多い国は、タイ・インド・ベトナム・アメリカの順だそうです。米とは何の関係もないのに、アメリカを｢米国｣と呼ぶのは、何ともおかしなものですね。もともとは幕末に｢亜米利加｣と表記したことによるのですが･････。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（28・9・4）

９，降水量と身長

カリフォルニア州サクラメントの降水量が話題になったところで、ついでに日本の降水量について一寸小話を。そもそも降水量とは、地表に降った雨や雪や氷を水に換算した堆積を面積で割り、㎜単位で表した数値です。ただし気象台では0.5㎜単位で計測するそうです。しかし数値だけで示されても、それが一体どれ程のものなのか、実感が湧きません。そこで基準となるいくつかの数値を、実際の生活体験に基づいて理解しておくとよいものです。

まず最初におさえておきたいのは年間降水量でしょう。地理の気候の学習では不可欠な要素です。ケッペンの気候区分について、表やグラフの数値をみても、相対的な多少は理解できるのですが、経験が伴わないのでぴんと来ないのです。かといって実際に経験することもできません。そこで基準になる数値を体験的に理解し、それと比較してやれば、少しは実感が伴ってくるのではと思うのです。

体験的に理解できる降水量の数値とは、自分が長年住んでいる地域の降水量に他なりません。数値として知らなくとも、誰もがこの地域の雨や雪は毎年こんなものだと、長年の経験をもとに身体でおぼえているのです。そのような経験を正確な数値で裏打ちしてやればよいのです。数値は最寄りの気象台に問い合わせれば、親切に教えてくれます。

しかし数値はすぐに忘れてしまうので、私はいつも身長と比較して理解させていました。ただし身長は年齢や男女によって個人差があります。地域によって降水量にも大きな差があります。ですから身長を基準にと言っても、その表現は個人によってみな異なるでしょう。それでもよいのです。とにかく自分の身長を基準に、自分なりの表現で数値を理解させます。例えば、東京ならば年間降水量は約1500㎜ですから、｢ちょうど私の身長と同じ｣とか、｢肩の辺りまで｣とか、｢手をのばした辺りまで｣とか、｢身長の1.5倍｣とか、いろいろな表現があってよい。

また全国平均の1610㎜と比較させ、自分の地域の降水量が、全国的にはどの程度のものか、理解させておくことも必要でしょう。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（28・9・5）

雨に関する気象情報では、よく時間単位の降水量を耳にします。気象予報用語としては、｢やや強い雨｣｢強い雨｣などと曖昧な表現がされていますが、実際には１時間当たりの降水量によって、ランク付けされています。それによれば、10～20㎜は｢やや強い雨｣、20～30㎜は｢強い雨｣、30～50㎜は｢激しい雨｣、50～80㎜は｢非常に激しい雨｣、80㎜以上は｢猛烈な雨｣と表現することになっています。

１時間に１㎜の降水量とは、１㎡に１リットルの雨が降ることですが、１リットルというとかなり多いと感じられます。しかし実際には、傘をささずに歩いても気にならない程度の雨です。１㎜を越えると傘をさしたくなり、３㎜になると路面に水溜まりができます。５㎜なら傘がないとびしょ濡れになってしまいます。この程度の数値を日常の体験に照らして理解しておくと、気象情報ももう少し実感をもって聞くことができるでしょう。

また集中豪雨などについては、よく降り始めからの合計がグラフで示されることがあります。100㎜単位の数値を見ても、それがどれ程のものかぴんと来ないのですが、前にお話したようにその地域の年間降水量と比較すれば、｢この辺りで1年に降る雨の約三分の一がこの三日間で降ったことになるのか。それは大変なことだ｣というように、実感をもって聞くことができるようになるというわけなのです。因みに私の身長は僅かに1610㎜。日本の平均降水量とぴったり一致しています。　　　　　　　　　　　　（24・9・6）

１０、韓国国花　無窮花

次は何を書こうかと思い巡らしていましたが、散歩道できれいなムクゲの花が印象的でしたので、ムクゲに関連したお話をすることにしました。

ムクゲという花があります。７月から10月頃まで、白・桃・赤紫色の花を咲かせ、観賞用として庭にもよく植えられています。漢字では｢木槿｣｢無窮花｣と表記され、｢ムクゲ｣の音はその漢字表記に因っていることがすぐわかります。一般には朝に花が開き、夕には花がこぼれてしまう｢一日花｣と説明されているようですが、よく観察すると夕には萎みますが翌朝にはまた咲いて、２～３日で花が落ちます。ただし八重咲きのものは、もう少し長く咲いているようです。一日花という理解は、白楽天の詩の一節｢槿花一日自成栄｣（槿花は一日で自ら栄を成す）が、本来は｢仏法が瞬く間に広まった｣という意味であるのに、それを｢槿花一日の栄｣と誤解したことによるということです。

このムクゲという花は、日本人にとっては愛すべき多くの花の一つに過ぎませんが、韓国では国花とされています。また現在国花になっているというだけではなく、古代以来民族の象徴として大切にされてきたそうです。日本の桜に相当する花と理解すればよいのでしょう。

新羅では唐に送る国書の中で、自らを｢木槿国｣と称したことが、『旧唐書』に記されています。李氏朝鮮の時代には、科挙の合格者に対して国王が｢御賜花｣と称して無窮花を授け、国王が臨席する宴会では、無窮花が飾られました。日本の統治下においては自主独立の象徴となり、無窮花の植樹運動が各地で行われました。日本人の官憲はそれを禁止し伐採を命じましたが、朝鮮民族の無窮花に対する誇りまで奪うことはできませんでした。1948年８月15日に制定された韓国国歌｢愛国歌｣には、｢無窮花三千里（北朝鮮の北端から韓国の南端まで）、華麗なる山河、大韓人よ、大韓を永久に保全せよ｣と歌われています。また韓国の最高の勲章である｢無窮花大勲章｣は、大統領に授与されるそうです。私は韓国人ではないのでそれ以上の例を知りませんが、ムクケ゛が民族の花として尊重される事例は、もっとあるのでしょう。　　　　　　（24・9・7）

日本人は桜の花が一斉に散ることに風情を感じていますが、椿のように花がそのままの形で落ちてしまうことを、首が落ちるように感じて忌み嫌います。病気見舞いには、椿は持って行ってはいけない花なのです。無窮花の花は、一つ一つの花の期間が短いだけでなく、花びらが閉じてはいますが、椿のようにそのまま落ちてしまいます。日本人の伝統的美意識からすれば、無窮花に対する好みが分かれるところでしょうか。しかし韓国人は全く異なった見方をしています。一つ一つの花が咲いている期間は確かに短いものです。しかし次から次に新しい花が咲き、途切れることなく長期間にわたって咲き続けます。韓国人はそこに生命力の強さと美しさを感じているのです。ここで桜と無窮花の優劣を比較することは、全く無意味なのです。日本人は桜に感動し、韓国人は無窮花をことのほか愛でる。それでいいのです。

埼玉県の地元ネタで恐縮ですが、埼玉県の日高市には高麗神社というユニークな神社があります。716年（霊亀２）、駿河・甲斐・相模・上総・下総・常陸・下野の７国に住む高句麗からの帰化人1799人を武蔵国に移して、高麗郡を新設したことが、『続日本紀』記されています。彼等の指導者であった高麗王若光の没後、人々はその遺徳を偲んで祀ったのですが、これが高麗神社の起源となりました。この高麗神社はその特殊な来歴によって韓国人の参拝者が多く、境内には無窮花の木が何本も植えられています。また私の家のすぐ側にある吉見の百穴には、戦時中地下の軍事工場を建設するため、多くの朝鮮人が徴発されたと言われています。そのため、やはり無窮花の木が記念として植えられているのですが、それらの無窮花の意味する所を知っている日本人は大変少ないのです。

平成23年８月、日本の国会議員が竹島問題に関連して、視察のために韓国に入国しようとして拒否された事件が起きました。その際、鬱陵島にある｢独島博物館｣の敷地内に、｢対馬は元わが国の領地｣と刻んだ石碑があることが広く日本でも知られ、驚いたものです。そういう動きに呼応するように、最近は対馬に多くの韓国人観光客が押し寄せています。そして中には島のあちらこちらに無窮花を植樹する人もいるそうです。実際韓国には、対馬を無窮花でいっぱいにしようという運動が起きているそうです（未確認）。韓国資本が対馬の土地を次々に買収し、無窮花を植えていくことの意味を、日本人はあまり気付いていないように思います。

戦後ですが、日本の象徴である桜が、韓国で伐採される受難がありました。日本もかつて無窮花の植樹を禁止したことがあるのですから、これについてはお互い様かもしれません。しかし最近は少し様子が違っているらしい。韓国ではあらゆる日本文化に対する韓国起源説が強烈に主張されることがよくあるのですが、｢桜は韓国起源｣｢桜は日本の花という主張は間違っている｣という主張をよく耳にするようになりました。こういう話を聞くにつけ、本当に悲しくなってきます。どちらが起源であるといって、それが一体何なのでしょう。日本人は日本人の価値観で桜を尊び、韓国人は同じように無窮花を大切にする。お互いに尊重しあって、それでよいではありませんか。私は韓国にことさらに桜をうえようとも思いませんし、無窮花の木を切り倒そうとも思いません。それぞれの風情をそれなりに楽しんでいます。

かなり脱線してしまいましたね。思いつくままに書くとこういうことになってしまいます。木槿の花は日本各地で普通に見られますから、一枝折って教室に持って行き、韓国にとって無窮花がどのような花なのかをお話して下さい。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（24・9・8）

追記

一昨日の10月６日、上尾市の市民講座の人達３０余人を引率して、埼玉県日高市の高麗山聖天院に見学に行きました。このあたりは高句麗の帰化人たちが入植し、716年に高麗郡が置かれたところです。そして聖天院はその族長であった高麗王若光の菩提寺です。そのような歴史的背景から、境内には、日韓併合から独立までの36年間に亡くなった、韓国・朝鮮人の無縁者供養塔が建てられています。それに隣接して三・一独立運動のときにソウルのパゴダ公園で独立宣言書が読み上げられた八角亭を縮小した建物が建てられています。その軒丸瓦にはっきりと無窮花の花が浮き彫りになっていました。今まで見落としていたのですが、やはり意識していないと、価値のある物を見ても見過ごしてしまうものだと、改めて思ったことです。

１１，人足寄場とキャピック

寛政の改革の基本理念の一つは、天明の飢饉の打撃から如何にして復興させるかということにありました。惨憺たる害を被った東北地方にあって、米沢藩や松平定信の白河藩では、平常の飢饉対策の効果があって、餓死者が出ませんでした。その結果、松平定信の政治手腕が注目されるところとなって、老中に抜擢され、寛政の改革を推進することになったのです。寛政の改革の諸政策では、旧里帰農令・囲米・七分積金・人足寄場などの政策は、いずれも飢饉からの復興という視点で導き出されたものです。

それらの中でも、人足寄場の発想は実にユニークなものだと思います。天明の飢饉後、農村や地方で生活できなくなった人々が、大勢江戸に流入していました。彼等は人別帳に把握されない｢無宿人｣で、犯罪予備軍になる可能性をもっています。そこで火附盗賊改方の長谷川平蔵宣以の建議により、石川島に人足寄場が創設されました。因みに長谷川平蔵は、池波正太郎の時代小説｢鬼平犯科帳｣の主人公である鬼平のモデルとなった人物です。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（24・9・9）

彼は隅田川の河口にある佃島と石川島の間の干潟を埋め立て、そこに犯罪者の社会復帰を目的とした施設を創設しました。現在の東京都中央区佃２丁目あたりで、１万６千余坪もの広さがありました。ここに収容されたのは、無宿人や、入墨や敲きなどの刑を受けた軽犯罪者、刑が終了しても引き取り手のない者たちでした。収容者数は、初めの頃は百数十人でしたが、天保の飢饉の頃には、５～６００人に及んだといいます。施設の中では、性別・年齢・能力に応じて、社会復帰のための訓練が行われていました。

その内容は、草履・藁細工・大工・左官・屋根葺・鍛冶・表具・紙漉・蝋燭・足袋・桶・炭団・竹笠・胡粉・髪結・洗濯・裁縫・機織・米搗・油絞など、実に多彩でした。また僅かながらも手当が支給されました。そのうち三分の一は天引して積み立てられ、３～５年の収容期間を終えて出所する際には、正業に就くための更生資金として支給されました。また月に３回の三の付く日を休業日として、中沢道二らの心学者を招いて、庶民道徳とも言える心学の講話を聞かせたりもしました。

江戸時代にはそもそも懲役刑というものがありませんでしたが、人足寄場が懲役のための刑務所のような役目を持っていたわけです。懲罰ではなく、更生を目的としていたことは、高く評価されてもよいと思います。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（24・9・10）

一方、現在の刑務所でも、刑務所内の保安や更生支援を目的として、受刑者の刑務作業により様々な物が作られています。その内容は、木工（家具・箱・木製玩具・木製生活雑貨など）、印刷（名刺・カレンダー・封筒など）、洋裁（作業着・子供服・縫いぐるみ・運動服・カーテンなど）、金属加工（機械部品組み立て・機械加工・板金塗装など）、革加工（靴・バッグ・ベルトなど）、農業（野菜・観葉植物・花・茶など）、その他（袋詰め・紙袋・石鹸・梱包・伝統工芸など）、職業訓練（溶接・内装・理容・塗装・建築・配管・自動車整備など）などの作業に分類されています。

これらの刑務所作業製品は、Correctional Association Prison Industry Cooperation の頭文字をとったCAPIC（キャピック）という名前で一般に販売されています。そして受刑者には僅かではありますが、作業報奨金が与えられ、釈放される際に支給されます。また趣旨を損なわない範囲で、刑務所内で使用する物品の購入や、家族への送金も認められています。　　　　　　　　　　　　　　　　　　（24・9・11）

もちろん問題もあります。報奨金はあまりにも少なく、時給に直せば６円から４２円程度にしかなりません。一人平均で、一カ月に４２００円にしかならないそうです。これでは出所後の生活保障には不十分です。また人件費の安い海外からの製品に対抗できず、刑務所と契約する企業からの注文が減少しているそうです。またただでさえ就職難の昨今、出所しても定職に就くことが難しいなど、問題は山積しています。

そのような背景もあって、全国の刑務所や支援団体により、キャピックの展示即売会がしばしば行われています。そしてその広告が、しばしば新聞に折り込まれて配られています。私はそのような広告をいつも捨てずに教材にしていました。何の教材かですって？　もちろん人足寄場です。時代が違いますから単純な比較はできませんが、発想はとても似ていると思うからです。

即売会に出かけてみると、とても素人が作った物とは思えない上等な出来で、しかも比較的安価です。個人的には重厚な和箪笥などを買いたいのですが、さすがに高価で手が出せません。それでも安価な物は、支援の意味も込めて利用しています。そして人足寄場の先見性にあらためて驚くのです。　　（24・9・12）

１２，レストラン　｢とんでん｣

だんだんネタ切れになってきましたので、教材という程の物ではありませんが、一寸小話を。先日、｢とんでん｣というファミリーレストランに入りました。鰯・秋刀魚・ほっき貝など、海産物を使った料理に特色があります。｢とんでん｣という店名が気になり、その由来を店長さんに尋ねたところ、それが一寸した歴史小話でした。

とんでんは関東地方に９４店舗、北海道に１８店舗あるそうで、本部は北海道の恵庭市にあるとのこと。｢北海道｣と聞いて、ひょっとして｢とんでん｣は｢屯田｣のことかと閃きましたが、案の定そういうことでした。関東と北海道以外の地域の皆様には、ピンと来ない話になってしまいますがお許し下さい。社章は赤地に北斗七星を白く染め残したデザインです。｢北海道と星｣と言えば、すぐ開拓史のシンボルを連想します。星は北海道の人にとって、開拓のシンボルなのです。｢とんでん｣の設立者は、同じ星のシンボルにして、開拓者魂を社是としたのでしょう。

話はただこれだけのことです。しかし｢屯田｣が姿を変えてすぐそばに隠れていたことが、妙に面白かったのです。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（24・9・13）

１３，開拓史とサッポロビール

昨日、レストラン｢とんでん｣が｢屯田｣に由来するというお話をしたので、関連する話題をもう一つ。

明治２年７月、北海道の開拓のために開拓使が置かれました。そもそも｢北海道｣という名前が付けられたのは、その翌月のことです。江戸時代には｢蝦夷島｣｢蝦夷地｣と呼ばれていましたが、それは華夷思想に基づくもので、新時代に相応しい名前を付けることになりました。そこで幕末から｢蝦夷地｣を探査してアイヌと交流のあった松浦武四郎は、日高見・北加伊・海北・東北・千島・海島など六つの候補を新政府に建白しました。

このうち｢北加伊｣の｢加伊｣は、アイヌが｢蝦夷島｣を｢カイ｣と自称していたことによるということです。もっともアイヌ語の研究者として名高い金田一京介は、そのような事実はないと言ったそうです。結局、律令的名称である東海道・南海道・西海道を参考に、松浦案とも折衷して、８月１５日の太政官布告により、｢北海道｣と名付けました。今考えても、妥当な命名だと思います。　　　　　　　　　　　　　（24・9・14）

さて開拓使のことですが、｢使｣という職名は、勘解由使・検非違使・押領使・追捕使など、令外官に多くの例があります。これらはいずれも独自に臨時的な任務を持つ律令的官職名でした。

開拓使が設置された３年後の明治５年、北海道の船舶の旗章が定められました。海外に渡航する船には、国旗の他に所属官庁の旗を掲げなければならなかったからです。そこで定められた旗は、青地に赤色の五稜星をあしらった意匠で、星は北極星を表しています。北極星は｢北辰｣とも呼ばれますので、旗は｢北辰旗｣とも呼ばれました。考案者は蛯子末次郎という人で、開拓使が所有する船の船長をしていました。

この意匠にはどのような意図があるのでしょうか。船乗りにとって、北極星は大海原における方位の手掛かりで、青色は海のことでしょう。また北の大地を開拓しようという人々にとって、北極星は究極の目標の象徴でもあったでしょう。末次郎が航海術を学んだ蘭学者武田斐三郎は、函館五稜郭の設計者としても知られていますが、末次郎の脳裏には、師の設計した五稜郭もかすめたことでしょう。　　　　（24・9・16）

制定されて以来、この赤い五稜星は開拓使の建造物に掲げ描かれました。現在も残る開拓使由来の建造物には、あちらこちらにこの五稜星が見られます。旧札幌農学校演武場である札幌市時計台は、その良い例です。

開拓推進の中心となったのは、薩摩出身の黒田清隆でした。明治３年には開拓使次官、明治７年からは長官となり、明治１５年に及びます。黒田の建議によって、明治４年に開拓使十年計画が策定されていましたが、その満期も近い明治１４年、有名な開拓使官有物払下事件が起きました。この時払下げられた物件の中に、開拓使麦酒醸造所が含まれていました。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（24・9・17）

そもそも開拓使が麦酒醸造所を設立したのは、明治９年のことでした。そして明治１９年には大蔵喜八郎の大蔵組商会に払い下げられ、翌年には浅野総一郎・渋沢栄一らがこれを買い取って、札幌麦酒会社を設立しました。その後、いく度かの合併や変遷を経て、現在のサッポロビール株式会社につながります。そして開拓使のシンボルマークであった赤い五稜星は、そのままサッポロビールのシンボルとして、今に受け継がれているのです。ただし商品によっては金色の星になっています。飲食店で提供される札幌ラガービールには、赤い五稜星が描かれ、｢赤星｣と通称されています。そういうわけで明治初年の授業では、教室に是非ともビール瓶を持って行きたいのです。それもやはり赤い星の瓶を。

なお余談ですが、昭和４２年、北海道百年を記念して、北海道の旗が制定されました。紺地に赤い七稜星が描かれ、星の周囲は白色で縁取られています。紺は北の海や空を、白は光輝や風雪を、七稜星は道民の不屈のエネルギーを表しているということです。五稜ではなく七稜にしたのは、北斗七星を表すという意図や、北海道の形には七つの岬があり、北海道そのものを表すという意図もあるそうです。　　　（24・9・18）

１４，蝦夷の水産物

北海道の話に及んだついでのことに、北海道の水産物についてお話します。個人的なことで恐縮ですが、私の修士論文は「古代の水産物」でして、水産加工品は大好物なのです。よく専門は何ですかと尋ねられるので、「専門はワカメです」と惚けた返事をして、煙に巻いています。

デパートなどでよく「北海道物産即売会」が開かれます。歴史教材という視点で見るならば、これがなかなか面白いのです。教科書に登場する蝦夷地の水産物には、干鮭・鰊・昆布などがあります。これらの物産を運んだのが北前船で、江戸時代から明治３０年代にかけて、日本海沿岸の港から関門海峡を経て、瀬戸内海を通り、大坂に至る西廻航路を往復しました。

下り船は３月下旬頃に大坂を出帆し、寄港地で商売をしながら日本海沿岸を北上します。蝦夷地に到着するのはだいたい５月下旬頃でした。積み荷は、塩・鉄・砂糖・綿・畳表・筵・紙・米・衣料品などで、特に蝦夷地の水産物を加工処理するのに不可欠の大量の塩を瀬戸内で調達しました。また蝦夷地では採れない米、水産物の梱包や輸送に欠かせない筵や縄も、重要な交易品でした。　　　　　　　　　　　　（24・9・19）

この瀬戸内の塩が不可欠だったことについては、私にとっては盲点でした。ただ「西廻航路だから瀬戸内海を通った」くらいにしか考えていませんでした。鮭の塩干しを作るのに大量の塩が必要なことは、考えればすぐわかることです。修学旅行で瀬戸内各地に行った時、北海道の水産加工品が土産物として売られているのを「発見」し、これは教材になると大喜びをした時も、「瀬戸内の製塩業」まで考えつきませんでした。このあたりになると、もはや研修ではなく、「センス」の問題なのでしょうね。

上り船は７月下旬頃に蝦夷地を出帆し、途中同様に寄港地で商売をしながら、１１月上旬頃に大坂に着きます。下りより時間がかかるのは、対馬海流に抗して航海するからでしょう。積み荷はほとんどが水産加工品で、蝦夷地の塩鮭・干鮭・身欠鰊・鰊や鰯の締粕・昆布、出羽や北陸の米・紅花・木材などでした。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（24・9・20）

魚の締粕は鰊や鰯を大釜で茹で、魚油を絞った残り粕を乾燥させた物で、綿花・菜種・藍・砂糖黍などの商品作物の肥料となりました。教科書には「干鰯」が記されていますが、製法も用途もほとんど同じ物です。明治期になると北前船が急速に衰えますが、これらの農産物が同種の輸入農産物に押されて、栽培が激減したことがその一因となっています。

また昆布は、越中の売薬商人によって薩摩に運ばれました。そしてさらに琉球を経て中国に運ばれ、かわりに漢方薬やその原材料が逆ルートで越中にもたらされます。それが越中の薬になったわけです。富山県は現在でも昆布の消費量が日本一で、富山県ではおにぎりは海苔ではなくおぼろ昆布が巻かれるのが普通です。また昆布は琉球・中国だけではなく、上方にもたくさん運ばれました。現在でも瀬戸内・大阪・京都周辺には、昆布の食文化が色濃く伝えられています。大阪では昆布の佃煮が名物で、電話帳には「昆布」の項目があるのには驚きました。京料理には昆布の出汁が欠かせません。鯖寿司にも昆布が使われています。昆布は軽いため、若狭湾の敦賀や小浜で陸揚げされ、琵琶湖の水運を利用して京都に運ばれることもありました。現在でも敦賀・小浜・京都では、昆布の加工が盛んに行われています。昆布ではありませんが、京都の鰊蕎麦も同じ視点から教材になります。昆布に鰊とくれば、すぐに鰊の昆布巻を思い浮かべます。若い世代はあまり好まないかもしれませんが、正月のお節料理の定番ですから、食べたことのある生徒はかなりいるはずです。上方で北海道の水産物加工品を買ったら、その袋や包装紙は教材として利用価値があるので、捨てずに保存しましょう。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（24・9・21）

また松前漬という北海道の郷土料理があります。細かく刻んだするめや昆布に数の子を材料にして、酒・醤油・味醂などで味を付けたものです。昭和１２年に山形屋が商品化して、全国的に知られるようになったということで、江戸時代までは遡らないでしょう。しかしここにも昆布と鰊の組み合わせがあります。また「松前」という名前も見逃せません。今では鰊が北海道の産物であることを知らない生徒は多いことでしょうから、たとえ昭和になって創作された料理であったとしても、「松前漬」は立派な教材になるのです。

その他に私が長い間の教員生活で活用した北海道の水産物には、京都の郷土料理で使われる棒鱈、高級中華料理の材料となる煎海鼠（いりこ）があります。京都の錦市場で買った棒鱈は、京都の鰊蕎麦と同じ視点で使いました。煎海鼠は田沼政権の蝦夷地開発や長崎貿易で活用しました。いずれも動物性蛋白質の塊ですから、乾燥させ虫に喰われないように保存には気を付けなければなりません。1年ぶりに引っ張り出したら、黴が生えていたり、虫に喰われていたということになるからです。

以上のように、北海道の水産物の加工品や料理には、蝦夷地の水産業・西廻航路・アイヌとの交易など、いろいろな歴史の痕跡が隠れています。身近な食べ物から歴史を説き起こせるのは、実に楽しいことですね。

今日は秋分の日。クリスチャンの私でも真西に沈む太陽を眺め、極楽浄土に思いを馳せてみたいものです。というわけで、次回は彼岸のお話をするつもりです。　　　　　　　　　　　　　　　　　　（24・9・22）

１５，浄土信仰と春分・秋分

春分・秋分の日は国民の祝日の一つで、「国民の祝日に関する法律」によって、「自然をたたえ、生物をいつくしむ日」とされています。ただし年によっては一日前後することがあるため、法律では日にちまでは決められていません。「生物をいつくしむ」とか「自然をたたえる」なんて、いちいち法律で決められなくとも普段からしているので、大きなお世話だと思うのですが。何か取って付けたような、屁理屈のような理由付けをしているのには、わけがあるのでしょう。そのことには後で触れることにします。

春分・秋分の日は、一般に昼と夜の長さが等しく、太陽が真東から昇って真西に沈むと説明されています。専門家に言わせれば、昼が約１４分程度長いそうですが、それはこの際無視することにしましょう。しかしこれだけの理由でなぜ祝日になるのか、今一つよくわかりません。生徒にとっては、学校が休みになってくれさえすれば、理屈はどうでもよいのでしょうが。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（24・9・23）

そもそもこの日が祝祭日になったのは、明治１１年に春季皇霊祭・秋季皇霊祭として定められて以来のことです。皇霊祭とは宮中祭祀の一つで、歴代の天皇・皇后・主たる皇族の命日を、春分・秋分の日に一括して祀ること、つまり皇室の祖霊を祀るものでした。個々の命日に祭祀を行うにはあまりにも回数が多いので、一括して祀るのはもっともなことです。

例えば今手許に明治６年の新しい太陽暦があるのですが、それを見ると、歴代天皇の祭祀日が全て記されています。（天皇祭と崩御の日とは必ずしも一致しない。）１月の最初の週では、元日には天智天皇、二日が清和天皇、三日が崇神天皇、四日が安寧天皇、五日が元明天皇、六日が武烈天皇といった具合で、これが1年を通して続くわけですから、やむを得ません。そして民間でも皇霊祭に倣って、祖先を供養する日として定着したわけです。

しかしこの日に仏事を行う習慣は、少なくとも平安時代まで遡ります。文献上では、『続日本紀』の延暦２５年（806）、桓武天皇が弟の早良親王の霊を慰めるために彼岸会を行ったことが記されています。『源氏物語』の「行幸」の巻には、「十六日、彼岸のはじめにていとよき日なり」という記述があり、『蜻蛉日記』の中巻には、「つれづれとあるほどに、彼岸に入りぬれば、なをあるよりは精進せんとて････」という記述があります。いずれも彼岸を特別に日として、仏事が行われていたことを暗示しています。　　　　　　　　　　　　　　（24・9・24）

この彼岸と仏事が結び付いたのは、太陽が真西に沈むことに因っています。「浄土三部経」の中の『仏説阿弥陀経』によれば、阿弥陀如来のおいでになる極楽浄土は西方十億の仏土を経た彼方にあるとされています。もちろん信仰的な概念であって、地理的な概念ではありませんから、場所がどこであるかを詮索しても意味はありません。しかし極楽往生を切望する人々が、実際の西の方角の彼方に極楽を観想することは、ごく自然なことなのです。

そこで西の方角が問題となるのですが、僅かでもずれてしまうと、遠ければ遠い程誤差が大きくなり、極楽とは離れてしまうことになりますから、正確に真西を知る必要があるわけです。しかし現代の精密な測量器械ならともかく、掌に載る方向磁石程度では、正確に西を指し示すことはできません。ましてそれさえもない時代には、不可能なことでありました。しかし春分・秋分の日だけは、沈む太陽のど真ん中のある方向が真西であることはわかっていました。そこで極楽往生を願う人々は、この日、西の山の端に沈む太陽を拝みながら、その太陽のさらに向こうにある極楽浄土に思いを馳せたのです。阿弥陀如来が山の端から上半身をのぞかせる「山越阿弥陀」という来迎図がありますが、その独特の構図は、この日に山の端に沈む太陽の光景にあるのでしょう。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（24・9・25）

その「彼岸」ですが、仏教では春分・秋分の日の前後三日間、それぞれ合計七日間を彼岸と称しています。またそれぞれの第一日目を「彼岸の入り」、真中の春分・秋分の日を「彼岸の中日」、第七日目を「彼岸の明け」と呼びます。「彼岸」とは直接的には「向こう岸」という意味で、「こちら岸」を意味する「此岸」に対応する言葉です。仏教的にはサンスクリット語「paramita」（音訳は波羅蜜多）の意訳である「到彼岸」による言葉です。「到彼岸」をわかりやすく言えば、「悟りの世界に到達する」という意味で、「極楽浄土に往生する」という意味に拡大解釈もされています。もっと簡単に言えば、一般に「彼岸」と言えば「極楽浄土」、それに対応する「此岸」はこの「現世」のことと理解されています。専門の仏教学者や僧侶にはそれなりの深い理解があるのでしょうが、庶民にはそのように理解されて来たのです。　　　　　　（24・9・27）

「岸」と言うからには、水が彼岸と此岸を隔てていることになります。そこで極楽浄土を模して建てられる阿弥陀堂の前にはしばしば蓮池が掘られ、阿弥陀如来像は西方を向いて拝む人に対面して、東を向くように安置されるわけです。このことは平等院鳳凰堂を学習する際には、必ず確認しておきたいことですね。もし現地で見学することがあるならば、道内を拝観するだけではなく、池越しに拝観することも経験しておきたいものです。

話は一寸脱線しますが、我が家のすぐ側にあるお寺の墓地を購入しました。真言宗のお寺ですが、拝む時に西を向く墓、つまり東面する墓の方が、西面する墓より値段が高く、こんな所にも浄土思想の名残があるのかと、あらためて驚いたものです。浄土信仰についての学習で、手に取る実物教材はなかなか見当たりませんが、日常生活の中で誰もが知っている事柄を教材として取り出せるということは、ある意味で実物教材より素晴らしいと思います。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（24・9・28）

１６，沖縄修学旅行事前学習

高等学校の修学旅行では、沖縄に行く学校がかなりあるようです。他地域の実情は全く知りませんが、少なくとも我が埼玉県ではそのようです。沖縄は日本国民が普通に生活している地域で、本格的な地上戦が行われた地域ですから、いわゆる「平和学習」には材料に事欠きません。それはそれで良いのですが、あまりにそのことに重点を置くと、他にも沖縄でしか学べないことがたくさんあるのに、見落としてしまう傾向があります。「平和学習」については、私は私なりに考えを持っていますが、個人の思想信条によって意見の対立もある微妙な問題ですから、敢えてここでは触れずに、見落とされがちなことについてお話しましょう。

１，地球の自転と時差

このテーマは以前に既にお話したことですが、簡単に触れておきます。

地球を大きく東西に移動すると、地球の自転や時差を実感することができます。沖縄には東経128度の経線が通っています。そして私の地元に都合の良い話で申し訳ありませんが、千葉県の船橋市の付近を東経140度の経線が通っています。おおざっぱな計算ですが、緯度の差は約12度あるのです。経度の差による影響は無視するとして、日の出・日の入りの時間差は約48分あることになります。朝夕の約50分の差は大きなもので、季節にもよりますが、明るさ暗さの差がはっきりとわかる程です。

沖縄の海辺に宿をとると、夕方浜辺で遊ぶことが許されるでしょう。海の無い埼玉県民は、海というだけでわけもなく近寄りたがる県民性があるのでしょうか。生徒は水と砂にまみれて楽しく遊んでいました。しかしこの時こそ、地球の自転を体験するよい機会なのです。事前に以上のような話をしておいて、出発前日の日没時間や夕方のある決まった時間の明るさを確認させておくのです。生徒はその明るさの差に、きっと驚くことでしょう。このような体験は沖縄以外でもできますから、それぞれの地域の実情に合わせて、是非とも体験させておきたいものです。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（24・9・29）

２，偏西風

　偏西風とは、地球の中緯度地域に常に吹いている西寄りの風のことです。南洋で発生した台風が、日本付近で東寄りに進路を変えるのは、偏西風の影響を受けるからです。このことは理屈として理解しやすく、台風の進路変化は身近な教材の一つでしょう。しかし体験としてそれを理解しているわけではありません。その点で、飛行機で東西方向に移動することは、偏西風の影響を直接に体験できるまたとない機会なのです。

　西方向に飛行すれば向かい風になりますが、東方向に飛べば追い風になります。そのため羽田から那覇までの所要時間より、那覇から羽田までの時間の方が短くなります。時刻表によれば、９月から１０月は羽田から那覇までは２時間３０分、那覇から羽田までは２時間２０～３０分となっています。冬は偏西風が最も強い季節なので、その差はもう少し大きくなります。羽田・那覇間ではたったの５分ですが、成田・ロスアンゼルス間では、渡米には９時間３０分、帰国には１１時間４５分ということでした。　　　（24・9・30）

旅行の栞には離陸・着陸の予定時間が記されているはずですから、時間差を計算させてみましょう。また実際の離陸・着陸の時間を記入させてみましょう。偏西風は時に強弱が変化し、また流れを変えることがあります。そのため飛行機の到着時刻はしばしば予定とはずれてしまうことがあり、１０分程度の前後は想定内のことだそうです。同日のデータではないので、羽田・那覇間の短い距離では、実際に東に飛行する方が時間がかかることがあるかもしれません。しかし時刻表の上では明らかに差があることによって、理解させることができるでしょう。

　面白い質問をする生徒がいました。西に飛行することは、地球の自転と反対方向だから、かえって早く到着するのではというのです。その生徒は、地球が自転するときに大気も一緒に回っていることを理解していないのです。走っている電車の中で飛び上がっても、電車の車体だけが前に進んでしまうことはありません。電車の中の空気も一緒に進んでいるからです。もし地球だけが自転していて、大気がそのまま動かなかったら、地上には猛烈な風が吹くことになります。それは低緯度程激しく、飛行機は離陸することさえできなくなってしまうのです。

　偏西風の話をしているうち、台風１８号が台湾から急に進路を東寄りに変え、本州を直撃しました。あらためて偏西風を実感しています。次は沖縄の水不足についてお話しましょう。　　　　　　　（24・10・１）

３，水不足

　「沖縄県は、日本でも有数の水不足県である」と言うと、生徒は一様に信じられないという顔つきをします。年間降水量を比べてみると、那覇では2036㎜もあるのです。尾鷲の3922㎜、高知の2627㎜には及びませんが、日本でも有数の多雨地域です。因みに、東京は1466㎜、大阪は1306㎜、豪雪地帯の金沢は2470㎜、瀬戸内で水不足の松山は1123㎜、全国平均は約1700㎜です。

　雨が多いにもかかわらず水不足になるわけは、沖縄の地形にあります。まず雨を蓄える高い山がありません。また島の幅が狭いため川が短く急勾配で、降った雨はあっという間に海まで達してしまうのです。また梅雨と台風の時期に集中して降り、降水の季節変化が大きいこともあります。つまり降る時には猛烈に降るのですが、降らない時にはあまり降らないのです。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　(24・10・2)

　そこで給水制限に備えて、家という家にはみな貯水タンクが備え付けられています。また規模は小さいのですが、貯水ダムが沢山作られています。県や国が管理するダムは、沖縄だけで１２～１３基もあるそうです。かつては日常的に給水制限が行われ、昭和５２年には１６９日、昭和５６年には２５９日にも及んだと聞きました。最近は海水を淡水化する設備も多くなり、制限もほとんどなくなったようですが、降水量が少なければ、また制限されるかもしれません。

屋上の貯水タンクはバスの中からいくらでも見ることができるので、確認させてみましょう。また沖縄本島でも、島の東側から一山越えればすぐに西側に出られます。それにかかる時間と距離を考えれば、沖縄には長い川は有り得ないことを納得できることでしょう。　　　　　　　　　　　　　　　　　(24・10・3)

４，台風に備えた家屋

　沖縄は「台風銀座」と呼ばれる程、台風がしばしば来襲します。まだ勢力が弱まっていないうちに直撃するのですから、その風力たるや、経験のない人にはとうてい理解できないのでしょう。かく言う私も、風速数十ｍという風は経験がありません。水不足の沖縄ではほどほどに降る雨は大歓迎なのですが、暴風だけは余計なもので、それに耐えるための工夫が、家の構造のあちこちに見られます。

　バスの車中からすぐに目に付くのは、屋根の平らな鉄筋コンクリート造りの建築です。屋根が平なのは、風の抵抗を少なくするためで、戦後、米軍が施設の鉄筋コンクリート化を進め、被害が少なかったことから民間でもそれに倣ったということです。商店の看板もすぐに取り外しができるようになっていたり、壁に直接描かれていたりします。ついでのことですが、ベランダに屋根があるのは、直射日光が部屋の中まで差し込まないための工夫です。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　(24・10・4)

　従来の伝統的な造りの民家では、まず目に付くのは、屋根が低く、赤い瓦が漆喰やセメントでしっかりと固定されていることです。この赤褐色と白色の対比が、沖縄の民家の風情を醸し出しているのですが、ただ見ていて美しいというだけでなく、そこまで気付かせたいものです。また敷地を囲む石垣が、軒先に達する程高く、風が家の壁に直接吹き付けることなく、屋根を越えて行くように工夫されています。

５，珊瑚

　沖縄の浜辺の砂は白っぽく、白砂青松が美しい海岸が見られます。花崗岩の多い西日本では白い砂浜は珍しくないかもしれませんが、関東の人間にとっては、海岸の砂が白っぽいのは驚きなのです。(24・10・5)

沖縄の浜辺の砂が白っぽいのは、砂と見える物が実は珊瑚の残骸だからです。生きている珊瑚を採集することは絶対にあってはなりませんが、破片ならば海辺でいくらでも拾えます。そのまますぐに歴史の教材になるわけではありませんが、理科・生物の先生のお土産にしてもよし。いつ何時に活用できるかもしれませんので、一つ二つ拾っておくとよいでしょう。

　浜辺で珊瑚の残骸を見られるのは当然として、沖縄では山の上にも珊瑚の残骸が至る所に見られます。と言うより、沖縄は珊瑚その物から成り立っているのです。つまり沖縄は珊瑚礁が隆起してできた島で、沖縄の石は全て珊瑚でできていると言っても過言ではありません。石という石が、全て珊瑚が石化した石灰岩なのです。ただ沖縄以外に見られる灰色の石灰岩ではなく、褐色がかった白色で、孔が沢山あいています。歩道の敷石も、首里城の城壁や階段も、民家の石垣も、全てが珊瑚石灰岩ですから、探す手間はいりません。道端の石を割ってみると、珊瑚特有の六角形の構造が見られる物もあります。

　石灰岩は水に溶けやすく、長い間に洞穴や鍾乳洞ができることがあります。沖縄では降水量が多いこともあり、珊瑚石灰岩には孔がたくさんあることも手伝って、至る所に洞穴があります。沖縄ではそのような洞穴を「がま」と称していることは承知のことと思います。「平和学習」としてがまの見学をすることも多いでしょうから、少しは珊瑚石灰岩の話もしてほしいと思います。　　　　　　　　　　　　　(24・10・6)

６，沖縄の墓・葬儀

バスの車中からすぐに目に付く沖縄独特の物に、沖縄の墓があります。墓地は寺院の境内や郊外の霊園や、市街地ではないところにあるものと思っていましたが、沖縄では市内・郊外を問わず、至る所にあるのです。しかもその形が独特で、とにかく大きいのです。基本的な形は二つあって、屋根のΩ字形の曲線が特徴的な亀甲墓(かめこうばか)、もう一つは祠(ほこら)の様な形した屋形墓です。

亀甲墓の方が古い形だそうですが、庶民の墓が作られるようになったのは、明治期以後のことだそうです。丘の斜面を掘り込んで墓室を造り、外からは入り口の部分しか見えません。内部は広い空間になっていて、かつては一度墓室内に安置し、数年後に洗骨して骨壺に詰め、再び安置したそうです。那覇の壷屋通に行くと、沖縄独特の骨壺を扱っている店がありました。亀甲墓の特徴的な形は、母体の形を模したものとされ、人は死後に再び元の所へ還って行くことを表していると言われています。屋形形の墓は亀甲墓よりも新しい形で、戦後に普及したそうです。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　(24・10・8)

いずれの墓も陰気臭くなく、中には明るい色に塗られている墓もありました。また墓の前方には広場があり、ここで二十四節気の一つである４月５日の清明の日、あるいは旧暦３月の吉日には、沖縄三大行事の一つとされる清明(しーみー)が行われます。親族が沢山集まって先祖を祀った後、その広場で持ち寄った御馳走を食べ、酒を酌み交わしながら半日を楽しく過ごすのです。広場には雨天に備えてシートを張るためのフレームが設けられているものさえあります。そこでは子供たちが墓の屋根に上がって遊んでも、怒られることはありません。こうして沖縄の人達は、祖先との繋がりと親族の一体感を確認し合うのです。

沖縄の清明は、本土で行われている春の彼岸の墓参りと、家族親族総出のピクニックが一緒になったようなもので、沖縄の人達の祖先を大切にする心は、それはそれは篤いものがあるのです。このような清明節に祖先を供養する風習は中国伝来のもので、琉球王国時代に明・清と交流していたことの名残でしょう。反対に彼岸に墓参をする風習は沖縄にも中国にもありません。　　　　　　　　　　　　　　　　(24・10・9)

沖縄の人達が親族の一体感を大切にする心は、その葬儀にもよく表されています。新聞には葬儀の広告が、丸々１ページを割いて毎日載せられています。しかもそれぞれが２段抜きで２０～３０行もの大きさなのです。そして喪主を筆頭に、兄弟・子・孫・曾孫、またそれらの配偶者、友人、自治会関係者、果ては県外・海外在住の関係者まで、総勢数十名の名前と、告別式の日時・場所が載せられているのです。

私が那覇で沖縄蕎麦を食べながら、そのことについて店の主人にお尋ねしたところ、毎朝、新聞を広げると、真っ先にこの葬儀広告を見るのだそうです。そして義理を欠いてはならない葬儀がないことを確認してから、おもむろに新聞を読むということでした。その奥さんがたまたま東京は新宿育ちで、結婚して沖縄に来た時にはとても驚いたそうです。

沖縄の新聞なら簡単に入手できるので、教材として保存しておくとよいと思います。ただし個人情報ですから、その取り扱いには十分な配慮が必要なことは言うまでもありません。　　　　　　　　(24・10・10)

７，食文化

　どの地域であれ、そこの食文化はその地域の歴史や風土の影響を受けています。沖縄の食文化は、亜熱帯の高温多雨気候、冊封関係にあった中国、中継貿易による周辺諸国、そして戦後のアメリカの食文化など、さまざまな影響を受けています。

　野菜は一年中豊富に採れるので、野菜の保存食としての漬け物がありません。また周囲を海で囲まれているにもかかわらず、魚料理は多くはありません。今でこそ冷蔵庫がありますが、それがなかった頃は腐りやすい物の鮮度を保つことが困難な気候です。それで食材が傷まないように、また少々鮮度が落ちた物でも安心して食べられるように、油で揚げたり炒めたりする調理法が多いのです。もちろん、沖縄で食べる刺身はとても美味しいものです。しかし魚の刺身という食べ方は、沖縄の伝統料理にはなかったのです。また揚げたり炒めたりする調理法には、中華料理の影響もあるでしょう。

　「○○チャンプルー」という炒め物がよく知られていますが、食堂で「おかず」と言えば野菜炒めか煮物を指すくらい、炒め物が多いのです。「チャンプルー」とは沖縄方言で「混ぜこぜにする」ことを意味しています。「ちゃんぽん」と語源が同じかもしれません。ゴーヤー・豆腐・麩・素麺・ナーベラー(糸瓜)・タマナー(キャベツ・玉菜)などのチャンプルーがあります。本当にいろいろあるものですね。(24・10・13)

　中国食文化の影響は、豚肉料理に色濃く残っています。琉球王国時代に、中国からの使者を饗応するために欠かせなかったのでしょう。中華料理では、四つ足は机以外何でも食べるとか、豚は鳴き声以外は全て食べると言われます。沖縄料理でも同じで、「テビチ」と呼ばれる豚足、「ミミガー」と呼ばれる耳の軟骨、「チラガー」と呼ばれる頭の皮、「ラフテー」と呼ばれるばら肉の角煮などがよく知られています。ただ豚肉と言っても、何度も煮こぼして脂をすっかり抜いてしまうため、しつこさは感じられません。

　日本本土の影響としては、昆布料理がとても興味深いものです。昆布の消費量では、富山県が抜きん出て第一位ですが、大阪や沖縄も大量に消費しています。本来昆布が採れない地域で、なぜそれほど多いのでしょうか。江戸時代、蝦夷地の昆布は北前船によって若狭・下関を経て、さらに上方へ送られました。現在でもその名残として、京都の鯖寿司、大阪のとろろ昆布や佃煮として名物となっています。(24・10・16)上方に送られた昆布の一部が黒砂糖と引き替えに薩摩・琉球に運ばれ、さらに中国に輸出されましたが、その過程で琉球でも昆布を食べるようになったものと考えられています。中国に運ばれた昆布と引き替えに日本にもたらされたのは、漢方薬の原材料でした。それが越中の製薬・薬販売となって今も続いているわけです。

　沖縄での昆布の利用法は、出汁を取るためのものではなく、豚肉との炊き合わせなど、昆布その物を食べる所に特徴があります。若者向きではないのか、修学旅行ではあまり提供されないのですが、もし見る機会があれば、昆布の採れない沖縄でなぜ昆布料理なのかを考えさせてみましょう。公設市場では乾燥した昆布を買うことができます。日本全国どこでも買える昆布ですが、沖縄で買うというところに教材としての価値があるので、もし見かけたらお勧めします。同じ視点から、富山県の昆布も有効な教材です。(24･10・17)

　アメリカ食文化の影響があるのは、大戦後にアメリカの占領下に置かれ、現在も多くの米軍基地が

あるからためです。大戦直後の食糧不足の頃、米国軍が放出する缶詰は貴重な食料でした。もともと豚肉をよく食べる伝統文化も相俟って、現在でもランチョンミートやコンビーフなどの肉の缶詰は、家庭料理の必需品となっています。その他に1980年代に登場したタコライス(メキシコ料理のタコスを載せたご飯)、ホットドッグ、ハンバーガーなど、アメリカ由来の食べ物がたくさんあります。

　面白いことにケンタッキーフライドチキンの売り上げは、群を抜いて全国第一位ということです。沖縄では慶事の引き出物や贈答用だけでなく、日常の食事の副食として、頻繁に利用されています。沖縄にまで行ってわざわざフライドチキンを食べなくともとは思いますが、社会的背景を理解して食べるならば、それはそれで意味がありそうです。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　(24・10・18)

　生徒が買うことには問題があるかもしれませんが、沖縄の地酒である泡盛は面白い教材です。泡盛の原料は米なのですが、今も沖縄では米はあまり採れません。それにもかかわらず米で作られた酒が名産となるのはなぜでしょうか。沖縄で水田がある場所は、バスガイドの話では一カ所だけとのことでした。常に水不足の沖縄では、たとえ気温が高くても水稲栽培には向いていないのでしょう。泡盛は米の酒を蒸留して作るのですが、この蒸留技術は１４世紀末から１５世紀にかけて、東南アジアのタイから伝えられたもので、昔も今もタイ米を輸入して作られているのです。つまり琉球王国時代の泡盛は中継貿易の所産なのです。これといって輸出すべき特産物が少ない小国が生きて行くためには、地の利を活かした中継貿易がどうしても必要だったのです。中継貿易については琉球王国についての学習で必ず触れるでしょうから、泡盛の空瓶を教材として用意しておくとよいでしょう。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　(24・10・19)

８，守礼門

　沖縄に修学旅行に行けば、必ずこの門を潜ることでしょう。そこは記念撮影に恰好の場所であり、首里城を見学する時には必ず潜ります。その門には「守禮之邦」という扁額が掲げられていますが、必ず見る額ですから、その意味を事前によく理解させておきたいものです。

　1579年(天正７)、明の万歴帝の冊封使が首里に来て、尚永王に「琉球は進貢の務めをよく果たし、『守禮之邦』と称するに足る」という勅諭をもたらしました。尚王は喜んで、早速「守禮之邦」の扁額を作り、門に掲げたのです。初めは冊封使の滞在中だけで、平時には「首里」の扁額が掲げられていたのですが、尚質王の1663年以後は、常時掲げられるようになったということです。　　　　　　　　　　　(24・10・20)

　要するに中国に対して朝貢し、皇帝に礼を尽くして臣従する健気な国である、ということなのです。しかも琉球王は冊封士をこの守礼門で迎え、三跪九叩頭(さんききゅうこうとう)の礼(３回頭を地面に着けては起立することを、３回繰り返して礼拝する。1793年、イギリスの外交官ジョージ・マカートニが乾隆帝に対して礼をするように言われたが、屈辱であるとして拒否したことはよく知られている)で迎えました。

現在、それを屈辱的であるといきり立つことはないでしょう。ただそうでもしなければ国として存続できなかった小国の悲哀に、思いを馳せてほしいと思います。よく「守禮之邦」を引用して、「沖縄は礼儀を守る平和な国」と説明されることがありますが、それは贔屓の引き倒し、我田引水で、余りにも事実を無視したものです。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　(24・10・21)

　2000年(平成12)、沖縄サミットが開催されることになりましたが、ちょうどミレニアム(千年紀)にも当たるため、小渕内閣は二千円紙幣を発行しました。その表面に守礼門が描かれていたのですが、従属のシンボルであった守礼門を国の紙幣に描くことには、いろいろ議論もあったことでしょう。私個人としては、万国津両名梁之鐘の方が琉球人の気概が表されているので相応しいと思うのですが、紙幣に小さく印刷されると銘文は読めず、視覚的面白さはありません。それなら首里城正殿の方が良かったのではとも思います。それにしてもほとんど流通しないため、見る機会はあまりありませんね。　　　　　　　　　　(24・10・22)

９，首里城

　首里城は琉球王国の王宮です。創建されたのは１４世紀末で、以来４回程被災しています。最後は米軍との沖縄戦の際で、１９９２年(平成４)に復元された現在の建物は、大戦で破壊されたものをもとにして建てられています。

　首里城の前に立ってまず目に付くのは、赤を基調とした原色の塗装と装飾でしょう。これが中国的であることは、紫禁城の写真と見比べれば一目瞭然です。もちろん守礼門も同じです。中華街の門を思い出す人もいることでしょう。また随所にこれでもかと飾り立てられている金色の龍にも注目しましょう。中国では龍は皇帝の象徴で、その力の源泉となる玉をくわえています。龍と玉の合性がよいことは、「ドラゴンボール」という漫画や、龍が玉を追いかける様を演じる長崎の蛇踊りでも合点が行くことでしょう。他には独特の曲線を描く正殿の唐破風の屋根、玉座が椅子であることなども、中国の影響です。　　　　　　(24・10・24)

　城内の売店では、清朝から「下賜」された「琉球国王之印」の複製を買うことができます。半分は角張った篆書で読みにくく、もう半分は満州文字なので全く読めません。摘みが駱駝であることも面白いですね。満州文字は清朝が漢民族国家ではなかったことを如実に示していますから、読めないなりに説得力があります。また清朝に対して冊封関係にあったことも示しています。いろいろ使い道がありますので、一つは買っておくことをお勧めします。昨今、中国で「沖縄はもともと中国の領土だったのに、日本に奪われてしまったから、取り返すべきだ」という主張があるということです。その是非はともかくとして、話のきっかけにはなるでしょう。

　ついでのことですが、首里城の地下駐車場から地上に出た辺りに、いくつも土産物店が並んでいます。その中に琉米歴史研究会ヒストリーショップという小さな店があります。ここにはアメリカ独立宣言書・米国憲法・リンカーンのあの有名な演説の草稿など、教材になりそうなものがたくさんあります。一度是非覗いてみて下さい。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　(24・10・28)

しばらく間があいてしまってすみません。一週間程風邪気味で、元気がありませんでした。また頑張って書くつもりです。

１７，桐紋と表彰状

　宇治平等院鳳凰堂で馴染みのある鳳凰ですが、もちろん空想上の瑞鳥です。四書五経などには、聖天子が出現すると、天がそれを嘉してこの世に出現させるとか、聖天子出現の予兆であると記されています。そして鳳凰は桐の木だけに止まり、六十年に一度しか成らないという竹の実を食べるものとされています。もっとも中国でいう「桐」は日本でいう「梧桐」(あおぎり)のことなのですが、日本では普通「桐」といえば、「あおぎり」ではなく「しろぎり」を指しています。まあそのようなことはともかく、桐は鳳凰が棲む神聖な樹木とされてきました。

　そのため古くから紋章の意匠として、皇室で用いられています。特に天皇の衣には、桐・竹・鳳凰を組み合わせた文様が用いられました。また家紋が出現するのは鎌倉時代になってからのことですが、桐紋は、菊花紋に次ぐ皇室専用の紋章とされていたのです。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　(24・11・8)

　この桐紋を後醍醐天皇が、恩賞の一つとして足利尊氏に下賜しました。以後足利将軍家では、代々家紋として使用しましたが、最後の将軍となる足利義昭は、それを織田信長に与えました。義昭は信長に擁立されて将軍になったので、恩賞として与えたのでしょう。信長はこの桐紋を喜んで使ったようです。図説資料集には信長の肖像が必ず載せられていますが、両肩の位置にはっきりと桐紋が見えます。信長といえども、桐紋の権威には利用価値を認めていたわけです。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　(24・11・10)

　その後、後陽成天皇が豊臣秀吉に桐紋を下賜しました。ただし秀吉の桐紋使用については、天皇から下賜される前に信長から与えられたという理解もあり、秀吉が桐紋を使い始めた時期についてははっきりわからないそうです。しかし素性に自信のない秀吉が、大いに活用したことは想像に難くありません。授業では、天正大判に桐紋が打ち出されていることに触れておきましょう。　　　　　　　　　　　(24・11・11)

　足利将軍家・織田信長・豊臣秀吉と、桐紋使用の伝統ができましたが、徳川家では葵紋を家紋としていて、桐紋を使うことはありませんでした。しかし江戸幕府も桐紋を権威の象徴として利用しています。天正大判に倣ったのか、幕府が発行した金貨には、桐紋が打ち出されています。また明治になってから、1872年(明治５)、政府は勅任官の大礼服には五七桐紋を刺繍するように定めました。　　　　　　　(24・11・12)

　現在、桐紋を民間で用いることに何の制限もありませんが、その格式は今も高く、現在でも国章に準ずる扱いを受けています。最も目に付くのは、総理大臣官邸にある演台の正面に見える五七桐紋でしょう。内閣官房長官が記者会見をするたびにテレビに映りますから、きっと見ているはずです。官房長官が着ていた作業着にも付いていました。またパスポートの意匠となっているのは、まさに国章に準じるということなのでしょう。紋章ではありませんが、五百円銀貨にも桐が描かれています。鳳凰の意匠は、かつての百円硬貨にも描かれていました。そのほかにも権威を表す意匠として、いまでもよく用いられているのです。

　一寸話が戻ってしまうのですが、書き忘れたことがあるもので････。足利義満が後小松天皇を北山山荘に御招きして歓待したことがあります。この時義満が着ていたのは、桐竹紋の法服でした。これは天皇かそれに準ずる身分にしか認められない意匠であって、義満は自分を法皇に擬したつもりだったのでしょう。後小松天皇にしてみれば、不遜なことと思われたことでしょうが、南北朝合一の事情を考えれば、言うに言えなかったことと思います。桐竹紋の権威を物語る有名な逸話でした。　　　　　　　　　　　(24・11・16)

　身近な所にある鳳凰や桐紋としては、表彰状などは如何でしょうか。百円ショップには白紙の表彰状がありますから、是非活用してみて下さい。鳳は雄、凰は雌であるため、最近は結婚式に相応しい意匠としてもよく見かけます。尊氏や信長からいきなり話がとんでしまいますが、それも訳ありで、きっと生徒は面白がってくれると思います。

１８，茶畑の地図記号

　ネタ切れというわけではないのですが、一寸小話を。毎朝の散歩道で、このごろ茶の花が咲いているのをよく見かけます。今年の花と一緒に、去年咲いた花が実っていました。この茶の実を割ってみると、中には三つの種が入っています。二つしか入っていないこともありますが、三つが普通のようです。この形が地図記号の茶畑のデザインのもとと成りました。

桑畑・針葉樹林・荒れ地・果樹園など多くの植生や農作物を表す地図記号は、みなそれぞれに合点が行く形で、誰もがすぐにその形であることを理解できそうです。しかし茶畑であることが一目でわかり、他の地図記号と区別できる記号を今自分で新たに作ってみようとしても、なかなか思い浮かびません。小さな点が正三角形を作るように並んでいる形を誰が考えたのか。全くよく思いついたものと感心してしまいます。茶の実を割ってみたことがなかったら、是非ともやってみて下さい。　　　　　　　　　　　（24・11・22）

１９，秦の始皇帝と印鑑

　紀元前４～３世紀の中国では、「戦国の七雄」に代表される諸侯が覇を競っていました。そしてこの戦乱に終止符を打ち中国を統一したのが、「七雄」の中の秦王「政」です。そして彼は自ら「皇帝」と称しました。いわゆる「秦の始皇帝」です。始皇帝は統一国家に必要な基本政策として、文字・貨幣・度量衡を統一しましたが、ここでは文字の統一について考えてみましょう。個人的なことで恐縮ですが、大学時代なぜか篆刻の教授の研究室に入り浸って、古代の漢字の書体にとても興味がありました。　　　　（24・11・26）

　戦国時代には、殷の甲骨文字や青銅器に刻まれたり鋳込まれた「金文」から変化した書体が、さらに各国ごとに独自に変化を遂げ、似てはいるものの微妙に形の異なる地方色の強い文字が使われていました。地域によって文字が異なることは、統一政策推進の妨げになります。そこで始皇帝は皇帝の権威を知らしめることも兼ねて、新たに形の整った書体を、公式の文字として制定したのです。　　　　　　　（24・11・27）

　書道の世界では、殷代の甲骨文字・殷代から周代にかけて青銅器に鋳込まれた金文・統一前の秦で用いられていた書体である大篆（籕文・ちゅうぶん）、そして始皇帝が制定した新しい書体までを総称して、「篆書」と言うことがあります。もっとも、甲骨文字や金文は篆書に含めないこともありますが････。始皇帝の制定した篆書は「小篆」と呼ばれ、形が整っていて美しいため、「篆書」といえば小篆を指すこともあります。

　その後、漢代には隷書が流行し、篆書は日常の書体ではなくなってしまいます。隷書は一画の末尾をすっぽ抜けたようにして、いちいち筆を止めない所に特徴があります。これは漢代の役人が速写体として日常の仕事に使用する書体でした。筆を止めないので早く書けるわけです。そのため権威を表したり装飾的に美しく文字を書く必要がある場合は、簡略の印象のある隷書ではなく、古風で正式な書体と考えられた篆書が用いられたのです。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（24・11・28）

　例えば印鑑がそうです。漢代の印鑑に用いられた書体は、日常に使用された隷書ではなく、わざわざ前代の古い書体である篆書でした。ただ四方形の印面に無理して文字を押し込めるため、垂直・平行の線画が目立つことになりますが、このような書体を、篆刻の世界では「印篆」「漢篆」と称して、小篆とは区別します。漢代の印というと、すぐに思い浮かぶのは「漢委奴国王」の金印ですね。繰り返しますが、隷書が盛行していた時代に篆書で刻まれているのは、篆書が信用と権威の象徴である印鑑に相応しい書体と考えられていたからなのです。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（24・11・30）

　当世通用の書体より古い書体が権威を表すということは、石碑の額にもよく現れています。色々のことを顕彰し記念して、古来より各種の石碑が立てられていますが、石碑の最上部には、銘文の題が大きく書かれるのが普通です。授業でよく見かける例を挙げれば、唐代に景教が流行したことを示す有名な石碑がありますが、石碑の上部には「大秦景教中国流行碑」と大書されています。この部分を「額」と言うのですが、本文は楷書でも、しばしば篆書で書かれるのです。それを「篆額」と称します。景教碑ではたまたま同じ楷書なので「篆額」ではないのですが････。今度石碑を見ることがあれば、注意して御覧下さい。中には篆書ではなく隷書の額もあります。漢代でこそ隷書は速写のための簡略化された書体でしたが、楷書が日常の書体となると、隷書も古い書体として、権威を表す書体と見なされるようになったからなのです。

その後も権威ある書体としての篆書は、印鑑の書体として使われ続けました。特に清代には文人が好んで小篆の印鑑を用い、それが日本の書道界にも大きな影響を与えました。そして現代の日本では、そのまま小篆が印鑑の書体として使われ続けているのです。またパスポートの表紙には、小篆で日本の国名が記されていますが、これも同じ理由によるものです。　　　　　　　　　　　　　　　　　　（24・12・6）

もっとも小篆は、現代人には判読しにくい字形が多い。そのため印文が誰にでもわかる方が良い場合、いわゆる「三文判」には楷書や隷書が使われることも多いようです。しかし社会的地位の高さを示す印鑑や、文人が好んで使う雅印などには、楷書や隷書はあまり使われませんね。すぐ読めてしまっては、何か安っぽい感じがしたり、権威がなさそうに見えるからなのでしょう。

このように、秦の始皇帝の統一政策の痕跡は、まだまだ現代の印鑑の中に生きているのです。ポケットの中から秦の始皇帝を取り出せる面白さは、生徒にもきっと通じることでしょう。

始皇帝が統一した書体を直接示す史料としては、泰山刻石と琅邪台刻石（ろうやだいこくせき）が残っています。泰山刻石とは、始皇帝がその頌徳のために山東省の泰山に建立させた石碑で、その拓本は書道の手本として、書道法帖の専門店で購入できます。学校の書道室には、資料として備えられているかもしれません。もしなくても、書道の先生なら知らないはずはない高名な石碑ですから、扱っている出版社を尋ねるとよいでしょう。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（24・12・9）

２０，太陽暦の採用

教科書では、「太陽暦が採用され、1872年12月3日が1873年１月１日となった。」とあっさり記述されています。1872年といえば、岩倉使節の外遊中です。そのため政府首脳の半分が不在となり、帰国するまでは大きな政治変革はしない約束でした。しかし西郷隆盛や大隈重信らの留守政府は、その間に実に大胆な政策を実行しています。

戸籍法と壬辰の戸籍、兵部省の廃止と陸海軍省設置、徴兵告諭と徴兵令、太陽暦の採用、地租改正条例と壬辰地券発行、国立銀行条例など、盛り沢山です。これだけ並べられれば、たとえ征韓の議論がなくとも、岩倉等と留守政府との主導権争いは避けられなかったことでしょう。　　　　　　　　　　（24・12・12）

ところで太陽暦への改暦のことですが、急いだのにはそれなりの事情がありました。当時の官吏の給与は月給制でしたが、明治６年は太陰暦では閏月があり、13カ月分の給与を支払わなければなりません。そもそも月の満ち欠けが一巡するのは約29.5日で、12倍すれば354日しかありません。つまり一太陽年に対して11日も足りないことになりますので、計算上は３年で１月ほどずれてしまいます。そこで13カ月もある閏年を設けて、調整するわけです。そういうわけで、閏月のある年には１カ月分支出が増えてしまうことになるのです。しかし太陽暦にすれば閏月がありませんから、その必要もありません。

このアイデアを思いついたのは大隈重信でした。彼は明治６年には大蔵卿になるくらいの財政通で、いかにも彼らしい発想でした。しかもこのタイミングで改暦すれば、明治５年の12月は一日・二日のわずか二日間しかなく、12月３日は明治６年の元日になります。そこで政府はわずか二日間の12月は給与を支給しないことにしてしまいました。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　(24・12・16)

つまりこの改暦で、明治５年の12月分と、本来支給するはずの太陰暦明治６年閏月の２カ月分を浮かせることができたのです。もちろん表向きの理由は、欧米を手本にする近代化には不可欠であり、また実際に

避けて通れないことでしたが、それにしても大隈重信、うまい手を考えたものです。

　太陽暦のカレンダーはあまりにも当たり前すぎて、今さら教室に持ち込む程のことはないかもしれません。しかし七曜が並んでいることは、太陽暦に因ることです。また１日が24時間、１時間が60分、１分が60秒ということも、太陽暦への改暦とともに導入されたことであり、改めて明治維新の改暦について、文明開化の名残であるとして実感させたいのです。

　なお手許に明治６年の太陽暦がありますので、コピーを御希望の方は御連絡下さい。

２１，バウムクーヘンと世界大戦

　バウムクーヘンという洋菓子があります。丸太を輪切りにしたような形状で、味も見栄えも良く、結婚式の引き出物によく利用されるそうです。｢バウム｣とはドイツ語で｢樹木｣、｢クーヘン｣とは｢菓子｣のことですから、まさに姿そのままに｢木の如き菓子｣なのです。このバウムクーヘンを製造販売しているのは、神戸に本社を置く株式会社ユーハイムで、日本の洋菓子メーカーとしては最大手の企業です。社名の｢ユーハイム｣は、日本で初めてドイツ菓子であるバウムクーヘンを製造した菓子職人カール・ユーハイムに拠っています。

(24・12・19)

　そもそもカール・ユーハイムは、1886年にドイツで生まれました。苦学しつつ菓子作りの修業を重ね、1908年、ドイツの租借地となった青島にやって来ました。そして喫茶店｢ユーハイム｣を経営していました。そして1914年(大正３)にはドイツに帰って伴侶となる女性を連れ、また青島に戻りました。しかしちょうどその頃、第一次世界大戦が始まり、彼の波乱の人生が始まることになります。

　同年11月、青島のドイツ軍は日本に降伏。3906人のドイツ兵が捕虜となりましたが、4000人の大台に乗せようと、民間人のカールも数合わせのために捕虜となってしまったのです。1915年(大正４)、妊娠していた妻を青島に残し、カールは日本に連行され、広島の検疫所に落ち着きました。

　当時は捕虜に対する扱いも人道的で、1919年(大正８)、ドイツ人捕虜の作品展示即売会が開催されることになり、カールは得意のバウムクーヘンを出品しました。その会場となったのは広島県物産陳列館で、現在は｢原爆ドーム｣として知られる建物です。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　(24・12・20)

　1920年(大正９)、休戦協定によりドイツ人捕虜が解放され、多くの捕虜が本国に戻ったにもかかわらず、カールは日本残留を選びました。即売会で日本での手応えを感じていたのでしょうか。そして横浜に本店がある食料品店の明治屋が、銀座に開店する喫茶店｢カフェー・ユーロップ｣で製菓主任として働くことになり、青島から妻子を呼び寄せました。

　その後契約期間が切れ、1922年(大正11)、彼は横浜の山下町に自分の喫茶店を構え、妻エリーゼの頭文字をとって｢E・ユーハイム｣と名付けました。店は大いに繁盛したのですが、それも束の間のこと。翌年の９月１日、関東大震災によって全てが灰燼に帰してしまったのでした。全てを失ったユーハイム一家は、知人を頼って神戸に移り、借金をして不死鳥の如く再び店を構えたのでした。　　　　　　　(24・12・22)

　しかしユーハイム一家に再び不幸が襲った。1937年(昭和12)、日中戦争が始まった頃から、彼は精神を病むようになり、一時静養のためにドイツに帰国したこともあった。そして戦時体制が強化されるに伴って、贅沢品である菓子を作ることもできなくなった。そして1945年(昭和20)、終戦前日の８月14日、カールは六甲山のホテルの一室で、妻と話をしている間に、穏やかに亡くなったということです。またドイツ人として本国に送還徴兵されていた息子が戦死していたことも、後に明らかになりました。

　カールの死後、妻エリーゼは連合軍の命令によりドイツに強制送還されていましたが、1953年(昭和28)に日本に戻りました。そしてカールに指導された日本人たちが彼女を社長に迎えて、店が再興されたのです。エリーゼはその後も日本に留まり、1971年(昭和46)に神戸で亡くなりました。ユーハイム夫妻の波瀾万丈の生涯を知るにつけ、私はいつか墓参したいと思いつつも、まだ果たせていません。夫妻の墓は芦屋市霊園にあるそうです。せめてと思い、手向けとして一首詠みました。

　　夫婦(めをと)の名　冠(かぶり)させたる木の菓子の港の街に(まち)に今も香れる　　　(24・12・23)

　以上のカール・ユーハイムの生涯については、株式会社ユーハイムが出版した『デモ私立ッテマス　ユーハイム物語』に拠っています。私はバウムクーヘンを食べながら、戦争や自然災害に翻弄されながらも、不屈の精神で立ち上がった、異国の菓子職人に思いをはせるのです。妊娠中の妻と引き離されて連行されたときのこと、漸く軌道に乗った自分の店が灰燼に帰してしまったこと、ドイツに送還されたエリーゼ未亡人が毅然として再来日し、店を再興したことなど、その時のカールやエリーゼの心中を推し量ると、バウムクーヘンはただの洋菓子ではなくなってくるのです。まあ、情緒的になりすぎることには批判もあるでしょうが･････。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　(24・12・24)

２２，日本サッカー協会の徽章

　サッカーのJリーグ人気が高まり、三本脚の烏をあしらった日本サッカー協会のエンブレムを見る機会が増えました。そのいわれをサッカー部の生徒に聞いてみたところ、何も知らないということでした。何しろ古事記・日本書紀の神話にまで遡ることですから、今時の若者が知らないのも無理はありません。なぜ三本脚なのか尋ねると、脚の数が多い方が有利だからと冗談を言います。烏なのにボールを鷲づかみしていると言ったのですが、ギャグは通じませんでした。　　　　　　　　　　　　　　　　　　(24・12・25)

　そもそも烏とサッカーは直接には何の関係もありません。それが日本サッカー協会の徽章となったことには、日本サッカー生みの親とされる、中村覚之助という人物が関わっています。彼は明治11年、和歌山県那智町(現　那智勝浦町)で生まれました。そして明治33年、23歳のときに東京高等師範学校(筑波大学の前身)に入学しました。その在学中の明治35年、坪井玄道教授が米国視察から帰国し、｢アッソシェーション・フットボール｣を伝えました。当時、まだラグビーと未分化の｢フットボール｣の同好会を同大学内で立て上げていた中村覚之助は、早速その競技方法を学び、｢ア式蹴球｣と翻訳して新しいブルーエルベ設立。そして各地に出向いて、その普及に努めました。そして卒業後も資金援助を惜しまず、後輩からも日本蹴球の創始者として尊敬を集めていました。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　(24・12・26)

　彼の没後、大正3年には同校関係者が中心となって、現在の日本サッカー協会の前身となる大日本蹴球協会が設立されました。そして昭和6年には、中村覚之助の後輩に当たる東京高等師範学校教授内野台嶺の発案が基となり、協会の徽章として制定され現在に至っています。

　三本脚の烏が選ばれた理由は、まず第一に中村覚之助の生家が三本脚の烏を神使として崇敬する熊野三所権現（渚の宮神社）の至近距離にあり、日本蹴球生みの親たる中村覚之助を偲ぶよすがになっていたこと。また発案者の内野台嶺が覚之助の後輩に当たることでしょう。第二には、神武天皇の神話に基づくものでした。ただし日本サッカー協会の公式記録には、三本脚の烏と中村覚之助を直接結びつける記述はありません。

　記紀の神話によれば、後に神武天皇となる神日本磐余彦尊（かむやまといわれひこのみこと）が熊野から大和に侵攻しようとしたときのこと、険しい熊野山中で道に迷ってしまいました。すると天照大神が八咫烏を遣わしたので、一行はそれに導かれて無事に難所を超えることができました。「咫」とは長さの単位で、親指と人差し指を広げた長さであるということです。「八」は「八百万の神」「八岐大蛇」などの例があるように、古代の日本では一種の聖なる数でしたから、「八咫烏」は「大きく神聖な烏」と理解すればよいのでしょう。ただし記紀の神話には八咫烏が三本脚であったことを示す記述はありません。　　（24・12・27）

　ただ紀元前２世紀に編纂された『淮南子』（えなんじ）には、太陽に三本脚の烏が棲んでいるという記述があります。またその意匠は高句麗の古墳壁画にも数多く残され、高句麗の古墳の影響が強いとされる奈良県明日香村のキトラ古墳壁画にも、太陽の中に烏が描かれています。ただし脚が三本であるかは確認できないそうですが。

　そういうわけで、太陽に三本脚の烏が棲むという理解は、早い段階から日本にも伝えられていた可能性は捨てきれません。少なくとも太陽に烏が棲むという理解は、確実に伝えられていたはずです。そうであればこそ、太陽が神格化された天照大神が、烏を使者として遣わすという話がうまれてくるのです。

　また天武天皇の長子である大津皇子が、父の没後、鵜野讃良皇后（持統天皇）から謀反の罪を着せられて処刑されるに当たり詠んだ辞世の詩が『懐風藻』に収められています。それには｢金烏臨西舎････此夕離家向｣という悲壮な句がありますが、この｢金烏｣は太陽のことです。ここにもはっきりと太陽と烏の関係を見ることができます。そういうわけで、記紀に、八咫烏が三本脚であるとの記述がなくとも、長い間に熊野信仰で｢三本脚の八咫烏｣という理解が生まれてくるのも、自然なことなのです。

　神話を教材にすることについては、色々な主張があることは承知しています。しかしそれを敢えて避けることは、敢えて強調することと本質的には同じではないでしょうか。神話は神話として、日本の大切な文化遺産の一つとして、私は素直に受け容れています。そして意外なところに歴史の痕跡が潜んでいることの面白さに気付かせたいと思っています。もう一言付け加えるならば、烏は太陽の象徴でもあるのですから、｢日本｣サッカー協会の徽章として、実に相応しいとも思っています。

２３，正月を迎える準備

　｢もういくつ寝るとお正月｣という時期になりましたので、あわててこのテーマでお話しすることにしました。元日には｢明けましておめでとうございます｣と日本中で挨拶をしますが、生徒に｢どうしておめでとうなの｣と尋ねると、一様に｢新年になったから｣と答えます。そもそも新年になるのがなぜそれ程お目出度いのでしょうか。わかっているようで、今一つよく理解できていません。旧暦の行われていた頃は、誰もが目出度いことと感じていたのですが、新暦ではその目出度さがわからなくなってしまったのです。これはどういうことなのでしょうか。まあ焦らずに、ゆっくり話を聞いて下さい。

　まずは｢正月｣とは何か、ということから話を始めなければなりません。正月の祭りは、各家に年神様をお迎えすることがその眼目です。｢年神｣は｢歳神｣とも書きますが、｢年・歳｣とはいったい何でしょうか。普通は１年365日の期間を指しています。もちろんそれでよいのですが、本来は稲などの｢稔り｣という意味なのです。それは｢年｣の字の篆書にもよく現れています。ですから年神とは稔りをもたらす神のことなのです。

それならなぜ365日の期間をもさすようになったのでしょうか。話は逸れるようですが、24時間で太陽（日）は一回りします。つまりそれで｢１日｣なのです。同じように月は約30日で同じ形に戻ります。つまりそれで｢１月｣なのです。同様に秋の稔りから次の秋の稔りまでが｢１稔り｣、つまり｢１年｣なのです。そういうわけで、年の始めに当たり、年神・歳神様を各家にお迎えをしてもてなし、前年の豊作を感謝し、また新しい年の豊作を願う。これが正月の祭りの本来の意義なのです。

　それならなぜそれがお目出度いのでしょうか。まだ答えは出ていませんね。年神様が各家に来る時、実はとても有り難いものを持ってきて下さる。それは｢年・歳｣なのです。つまり旧暦の頃には誕生日に一歳年をとるという発想そのものがなく、正月になると一斉に一歳加齢するということになっていました。人は生まれるとすぐに１歳と数えます。そして正月になるごとに一歳増えるわけです。極端な話ですが、大晦日に生まれた人は、その日に１歳、翌日の元日に２歳になるわけです。

　さて、まだ目出度いことの答えには至っていません。今は長寿社会であり、日本は世界的な長寿国ですから、長生きすることは当たり前になっています。長生きすることは良いことに違いはありませんが、それに伴って色々な問題も派生するので、単純に良いこととばかりは言えないのが現状です。しかしそれはともかくとして、昔は信じられないくらい寿命は短かいものでした。平安時代の貴族の長寿の賀は、何と４０歳から始まり、その後は１０年ごとに行われました。漢和辞典で｢初老｣と検索すると、４０歳のことと出ています。一寸信じられませんね。七五三では子供の成長を祈願しますが、裏を返せばそれも子供の死亡率が高かったからなのです。長生きするようにと長い｢千歳飴｣を食べる。その袋には長寿のシンボルである松や鶴亀が描かれている。要するに長生きのお呪いなのです。ですから、年神様が｢年・歳｣を持って来てくれる、つまり一歳長生きをすることは、長寿社会ではその目出度さも実感が薄いのですが、昔は実に有り難くお目出度いことだったのです。これで漸く｢おめでとう｣の答えが出ました。しかし現在では、目出度さの理由は完全に忘れられてしまっています。少々残念な気がしますね。

今日は頑張ってたくさん書いてしまいました。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（24・12・28）

さて｢新年おめでとう｣の理由はそれでいいとして、正月の祭りにはもう一つ大切な目的があります。それは稔りをもたらしてくれる年神様をもてなして、前年の豊作を感謝し、また新しい年も豊作であるようにと祈ることです。しかし年神様は何所にでもお出で下さるわけではありません。お迎えするにはそれなりの準備が必要です。

まづ最初にしなければならないのは、大掃除をして家の中を清めることです。年末の大掃除は、特に煤払いとも呼ばれました。古来より日本人は、神は清浄な存在であるから、その対極である汚濁は神の最も忌み嫌うものと考えていました。参拝する前には手を洗い口を濯いだり、葬儀から帰ると塩を撒いて清めたり、神主さんが白い装束を着ていたり、お祓いをしたりするのは、みな同じ理由ですね。年末にはどのお家でも大掃除をするでしょう。なぜするのかと尋ねれば、その年の汚れを掃き清めて、清々しい気持ちで新年を迎えたいからと答えることでしょう。もちろんそれで良いのですが、もとはと言えば、年神様をお迎えするための掃除なのです。

さて掃除が終わったら、標縄を張って、家の中が清浄になったことを表示しなければなりません。そもそも｢標める｣とは、ある場所に縄を張って区画し、占有していることや清浄であることを表示することを意味しています。よく地鎮祭で、祭壇の周囲に４本の竹を立て、縄を張っているのを見ることがあります。あれがまさに標縄で、囲まれた内側が清浄であることを表しているのです。お正月に飾る標縄は短いものですが、本来は家の廻りに張り巡らすべきものでしょう。（24・12・29）しかし実際にはそうもできませんから、家の入り口とか神棚とか床の間など重要な場所に張って、あとは省略しているのです。

標縄の他には、様々な注連飾りを飾ったりするでしょう。そのやり方や形は地方・地域で様々です。ただ多くに共通する点を取り上げてみましょう。最も重要なのは、主体を藁で作るということです。この藁で作るということに重要な意味があります。英語を教える外国人の先生から、｢なぜ枯れ草で神聖な飾りをつくるのですか｣と質問されたことがあります。確かにそう言われれば枯れ草です。しかし藁というものは、神様の祝福の結果である稲の葉でして、稲の稔りをもたらして下さる年神様に供える飾りの材料としては、最も相応しいものなのです。標縄と共に、稲の葉で作ることが大切なのです。

藁で作った注連飾りを台として、それにさらに裏白・橙・海老・昆布・ホンダワラ・藪こうじ・干柿・末広など、様々なものが付けられます。裏白には｢腹黒くない｣という意味が、昆布には｢喜ぶ｣という意味が、海老には｢年を取って腰が曲がり髭が生えるようになっても、元気でピンピンしている｣とか、末広には｢子孫が末広がりに増える｣とか、橙には｢代々途切れることなく栄える｣とか、地域によって異なることもあるでしょうが、様々に理由付けされています。

さて、門松も飾りの一つと考えて良いでしょう。松だけでなくて竹も一緒に立てたりすることもあります。この門松の風習が始まったのは極めて古く、平安時代の和歌に詠まれています。また正月に野に出て松を根ごと引き抜いてきて、庭に植えるという風習は｢子の日の遊び｣と呼ばれ、そのことを詠んだ歌も枚挙に暇がありません。それらの歌に｢千代の松｣という慣用句があることからも、松の長寿にあやかろうとしたことは疑いありません。年齢が一歳増える正月に、長寿の松を立てて長寿を祈ったのです。また松や竹が一年中緑に茂っていることにあやかり、枯れることなく栄えるようにということも祈願したことでしょう。そしてもう一つ重要なことは、年神様の依り代となるということです。つまり年神様は門松を目印にお出でになると考えられていました。ですから門松の立てられていない家には、年神様はお出でにならないというわけです。最近は門松を立てる家は極めて少なくなり、立てるとしても買ってきて立てていることが多いようです。私はいつでも自分で採ってきて立てています。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（24・12・30）

正月を迎える準備と題して始めましたが、ついに今日は大晦日になってしまいました。準備に手間がかかりすぎてご免なさい。

さて次はお供え餅についてお話します。そもそもなぜ餅を搗くのでしょうか。供え餅は年神様に差し上げるために搗くのであって、本来は人が食べるために搗くものではありません。稲の稔りをもたらして下さる神様ですから、稲の実、つまり米で作った供え物でなければなりません。神様に差し上げる飲み物は、稲の実で作った御神酒です。注連飾りも稲の葉、つまり藁で拵えましたね。稲の稔りをもたらす年神様を祀ることが正月の祭であることが、ここにもよく現れています。神様にお供えするものには、疵があってはなりません。円は欠けたところのない完全な形と考えられ、必然的に真丸の餅が供えられました。また昔の鑑は円形で、鏡は神聖なものという理解も相俟って、鏡餅とも呼ばれたわけです。

搗いた餅は神様にお供えすると共に、人も同じ餅をいただいて、共に餅を食べるわけです。しかし神様が実際に召し上がるわけではありませんから、いかにも人が食べるために搗いているようですが、気持ちの上では神様に供えることが主であり、そのお下がりを人もいただくというということなのです。

以上の他にも、お節料理を作ったりする準備があるでしょうが、もう大晦日ですし、今回のテーマでは、ここまでにしておきましょう。どうも原稿なしに思いつくまま書いていますので、うまくまとめられずに申し訳ありません。来年も、少しづつ書きますので、たまに覗いてやって下さい。　　　　（24・12・31）

２４，ヒンドゥー教の神々

誰が決めたのか知りませんが、キリスト教とイスラム教と仏教が｢世界三大宗教｣だそうです。しかし信者の数から言えば、仏教よりヒンドゥー教の方が多いのではないでしょうか。確かに信者の分布は限られていますが、何しろインドの総人口が多いので、そういうことになるのでしょう。

ヒンドゥー教には、教祖や開祖に当たるものはありません。紀元前数千年頃、アーリア人がインド北西部に侵入しました。そして自然現象を神格化した信仰と、｢ヴェーダ｣と呼ばれる宗教的文献が、次第に形成されていきました。神々を祀るのは｢バラモン｣と呼ばれた司祭者で、彼らはカースト制度の最上位の階級を占めていました。この信仰がいわゆるバラモン教です。そして紀元前５世紀頃、バラモン教に批判的な仏教やジャイナ教が成立しました。その後アレクサンダー大王の侵入やアショカ王による仏教の隆盛があり、バラモン教は内外から改革を迫られます。そして先住民族の土俗的信仰を採り入れながら、次第に最上流階級の宗教から、民衆の宗教へと変貌していきました。これがヒンドゥー教です。　　　　　　　　（25・1・1）

ヒンドゥー教は多神教で、実に数多くの神々が祀られていますが、それらの中でも、ブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァの三神が重要な神とされています。

まずブラフマー神は、宇宙の根本原理とも言うべき観念が神格化された神で、創造を司るとされています。しかし｢三神一体｣とされる割には、現在のインドではあまり信仰されていません。｢宇宙の根本原理｣や｢万物の根源｣ではあまりにも観念的で、親しみが湧かないからでしょう。四つの顔をもち、四本の腕には数珠・瓢箪を刳り抜いた水入れ・聖典のヴェーダと笏を持っています。そして白髪の老人の姿に表現されます。また早い時期に仏教に採り入れられ、護法神である｢梵天｣とも呼ばれました。そもそも｢梵｣とはバラモン教の最高原理のことで、世界創造の根源を意味しています。ヒンドゥー教であまり信仰されていないことは先程お話しましたが、日本の仏教でもあまり信仰の対象になっていません。　　　　　　　　　　（25・1・2）

それに比べてヴィシュヌ神は、現在でも最も広く崇拝されている神で、世界を維持することを司っています。また多くの化身（権化）を持つことが特徴で、多くの神々を自己の化身として取り込みつつ、成長してきたと考えられています。一般的には化身の数は１０もあり、仏陀さえもその化身とされています。四本の腕をもつ男神として表現され、手には蓮華・法螺貝・棍棒・円盤を持っています。また七つ（五つ）の頭をもつ｢アナンタ竜王｣と呼ばれる大蛇が、傘のように頭上を覆っています。そして｢ガルーダ｣という神鳥に乗って天空を飛ぶとされています。｢ガルーダ｣と言えば、インドネシアの航空会社の名前にもなっていますね。またインドネシアの国章にも採り入れられていて、ヒンドゥー教がインドネシアにも広まっていることを示しています。特にバリ島では、土着の信仰に仏教やヒンドゥー教が融合した、バリ・ヒンドゥーと呼ばれる、独特の信仰が行われています。また仏教に採り入れられて、｢毘沙門天｣とも呼ばれています。もっとも所説があるのですが、｢ヴィシュヌ｣と｢びしゃもん｣という音が似ているので覚えやすいでしょう。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（25・1・3）

シヴァ神はヴィシュヌと並ぶ重要な神で、破壊を司るとされていますが、同時に新しい世界を創造するとも言われています。その姿は独特で、筋骨隆々とした男神として描かれ、時には四本の腕をもつこともあります。上半身は裸で肌が青黒く、額には縦長に第三の目があり、白い三本の筋が描かれています。頭部には髪がうずたかく盛り上がり、頭髪に隠れたガンガーという女神が水を吹き出しています。首には蛇を巻き付け、虎の皮の腰巻きを纏っています。四本の腕に描かれる時は、雷電を表す三叉の戟、布施を求める時に用いる小太鼓、また瓢箪を刳り抜いた水入れを持っています。背後にはヒマラヤの山々が描かれ、ヒマラヤで瞑想する修行者という設定になっています。また結跏趺坐する目の前には、ヨーニという女性性器とそれを貫くリンガという男性性器が据えられ、側らには専属の乗り物である｢ナンディー｣という牛が控えています。また頭から水が噴き出しているのですが、これがガンジス川の源流ということです。シヴァ神も仏教に採り入れられ、｢大黒天｣という護法神になっています。シヴア神には｢大いなる暗黒｣を意味する｢マハーカーラ｣という異名があることに拠るのですが、日本では｢大国｣と同音のため、七福神の一つである大国と習合しているのです。

ついでのことに、菅原道真を祀ったのは天満宮。その神名は天満自在天で、｢自在天｣は漢訳仏典ではシヴァ神のことです。天満宮では牛が神様のお使いということになっていますが、もとはと言えばシヴァ神の乗り物である牛のナンディーから来ているのです。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（25・1・4）

仏教に採り入れられたヒンドゥー教の神々は、以上の他にもいくつかあります。ヴィシュヌ神の妃であるラクシュミ神は富と幸運の女神で、｢吉祥天｣と漢訳されています。ブフマー神の妃であるサラスヴァティー神は学問・技芸の神で、｢弁才天｣と漢訳されます。本来は川や水の神で、ヴィーナという弦楽器を奏で、川の畔に座る姿で描かれます。そのため日本でも必ず水に縁のある場所に弁才天が祀られています。琵琶を抱えた江ノ島弁才天、上の不忍池の弁天はそのよい例でしょう。また琵琶湖竹生島にある宝厳寺や安芸の宮島にある大願寺は、日本三大弁天の一つとして特に知られています。と言うと、初めて聞いたといわれることがあるのですが、宝厳寺は桃山期の装飾彫刻で知られる都久夫須麻神社に、大願寺は厳島神社に隣接しています。両者ともに神仏分離令で神社と寺が分離されてしまい、しかも都久夫須麻神社や厳島神社の方が一般には名前が通っているため、ついつい見過ごされがちですが、本来は一体でありました。そういうわけで改めて振り返れば、宝厳寺も大願寺も水に縁があります。また弁才天の｢才｣が｢財｣と同音であるため、｢弁財天｣と書かれて、水と富の神としての性格が強調されることもあります。鎌倉の銭洗い弁天はそのよい例です。話は脱線していますが、都久夫須麻神社や厳島神社を見学する際には、神仏分離以前の姿を思い浮かべ、両者を一緒に見なければなりません。それが歴史的な理解だと思っています。

以上の他にも、インドラ神が帝釈天、ガネーシャ神が歓喜天（聖天）、スカンダ神が韋駄天、ハーリーティー神が鬼子母神、アシュラが阿修羅など多くの例があります。ヒンドゥー教というと日本では馴染みのない宗教と思われていますが、意外な所にその断片が残っていることに気付かせたいのです。（25・1・5）

さて教科書や図説資料集に載せられるヒンドゥー教の神像は、髪を振り乱して踊るシヴァ神くらいのものです。しかしもっと強烈なインパクトのある神像があります。インドに旅行をしたことのある人ならすぐにわかることでしょう。インドでは、家庭と言わず、店舗と言わず、車の中と言わず、あらゆる所に生々しい原色の神像が氾濫しているのです。日本では、神は具象の姿を現さず、仏も年代を感じさせる渋い姿が喜ばれますから、原色の神々の姿は、強烈な印象を与えます。

それらの神像は、驚く程安く容易に入手できます。せいぜい２００円前後でしょう。最近よく見かけるアジアの雑貨を扱う店には、必ずと言ってもよいくらいに並んでいます。店ではただ単に｢神様の像｣と称していることが多いのですが、インドではそのように称して売られているのでしょう。ブロンズの｢ダンシング　シヴァ｣もありますが、原色ではありません。インドでの様子や詳しいことを知りたければ、これも最近よく見かけるインド料理店に行くとよいでしょう。どうしても入手できなければ、解説と共にカラーコピーをお送りします。

神像が原色であることは、日本人には少々抵抗があるかもしれません。しかし東南アジアの仏像は、今でも金ぴかに輝いています。日本でも本来はみな原色でした。東大寺の大仏も金メッキ仕上げでした。文化財の保存という必要もあるのでしょうが、日本では塗料が剥げて地肌が見えても、そのままで礼拝の対象になっています。わび・さびに通じる美意識がそうさせているのでしょう。つまり日本人は神像・仏像に芸術性を感じ取っているのです。しかしその分だけ、今も脈々と生きる宗教性が薄められているのではないでしょうか。

２５，ユダヤ教と安息日

　ヒンドゥー教のお話をしたところで、次はユダヤ教についてお話します。実は大学を卒業後、わずか1年余でしたが、イスラエルで勉強していたことがあります。その時の体験が少しは役立ちそうです。

　授業でイスラエルやユダヤ人について学習するのは、世界史では、出エジプト、ダビデ王やソロモン王の統治、王国の分裂とバビロニア捕囚、ローマ帝国の支配とキリスト教の成立、そして時代はずっと下ってシオニズム運動、ホロコーストとイスラエル建国、そして中東戦争などでしょう。また倫理では、十戒を資料としてユダヤ教について学習するくらいのものです。数千年の長い歴史の中で、学習するのは始めと終わりばかりで、真ん中がすっぽり抜け落ちているのです。抜けている期間は国を失って離散していた時期ですから、それもやむを得ないのですが、その期間にユダヤ人がまさに命懸けで信仰を堅持し続けたからこそ、それがシオニズム運動につながったのであって、それを可能にした要因が問われるべきではないかと考えています。私は自分の体験に基づき、安息日こそその要因の一つであると思っています。そこで、私の体験的安息日についてお話しようというわけです。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（25・1・6）

ユダヤ教につい日本人はほとんど知りません。知っていたとしても、やたらに禁忌や戒律があって、堅苦しい宗教であると思っています。ユダヤ人以外の尺度を以てすれば、確かにそのように見えるかもしれません。しかしユダヤ教に厳格な律法、わけても安息日というものがなかったら、果たしてユダヤ人は今日にも存在できたでしょうか。私はできなかったと思うのです。

ちなみに安息日のことをヘブライ語で｢シャバット｣といいます。｢サバス｣と表記された日本人の記述を見かけますが、実際に安息日を見聞したことがないことを如実に示しています。

１，安息日の根拠

　聖書には、安息日を厳格に守るべきことの根拠が二カ所記述されています。

　①『出エジプト記』第２０章

　　　　神はこのすべての言葉を語って言われた。わたしはあなたの神、主であって、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出した者である。あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない。あなたは自分のために、刻んだ像を造ってはならない。･････あなたは、あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。･････安息日を覚えてこれを聖とせよ。六日のあいだ働いてあなたのすべてのわざをせよ。七日目はあなたの神　、主の安息であるから、なんのわざをもしてはならない。あなたもあなたのむすこ、娘、しもべ、はしため、家畜、またあなたの門のうちにいる他国の人もそうである。主は六日のうちに天と地と海と、その中のすべてのものを造って、七日目に休まれたからである。それで主は安息日を祝福して聖とされた。

　　これは、六日間で天地創造を終えた神が、七日目に休んでこれを聖別したように、人もそれに倣うということです。つまり安息日を守ることによって、人も神の創造の業に与るというのです。　（25・1・7）

　②『申命記』第５章

　　　　さてモーセはイスラエルのすべての人を召し寄せて言った。｢･････安息日を守ってこれを聖とし、あなたの神、主があなたに命じられたようにせよ。六日の間働いて、あなたのすべてのわざをしなければならない。七日目はあなたの神、主の安息であるから、なんのわざをもしてはならない。･････あなたはかつてエジプトの地で奴隷であったが、あなたの神、主が強い手と、伸ばした腕とをもって、そこからあなたを導き出されたことを覚えなければならない。それゆえ、あなたの神、主は安息日を守ることを命じられるのである。｣

　これはイスラエルの人々がエジプトの奴隷から、神の手によって救い出されたことを、安息日を守ることによって記憶せよ、ということなのです。日本語では｢安息日｣と訳されたため、神様も天地を創造してお疲れになったから、人もそれに合わせて休息する日と考えられています。しかし安息日は単なる休息の日ではありません。イスラエル人（ユダヤ人）の信仰的原点を週ごとに思い起こさせる日、まさに｢聖日｣なのです。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（25・1・8）

２，安息日の禁忌

安息日には多くの禁忌があります。しかし聖書に規定されているのは、火の使用・耕作・収穫・売買・運搬の禁止などで、決して多いわけではありません。しかし拡大解釈されたり、いろいろな場合が想定され、律法学者によって議論されていました。福音書に、イエスが病人を癒したことが問題にされたことが記録されていますが、それも安息日の禁忌に触れるかどうかということでした。

私がイスラエルに滞在していた経験からすれば、宗教的に厳格な人たちは、安息日にさまざまな禁忌を忠実に守っていました。安息日には火の使用ができませんから、料理をすることはできません。電気も火の一種と理解され、これも使えません。ただタイマーをセットしておけば、スイッチを入れるという行為を人がするわけではありませんので、これは可能とされています。歩いて良い距離は約１㎞で、自動車には乗りません。所有権の譲渡は売買に相当するとして、物を贈りことはしません。ただし現代では、医療行為や国防はそれに優先することとして、問題にはされません。

３，食物の禁忌

　以上のような安息日の禁忌の他に、安息日だけとは限らないユダヤ教の日常的食物禁忌があります。聖書には、蹄（ひづめ）が割れ、反芻をする動物はこれを食べてもよいとされています。そうすると許されるのは、羊と牛と山羊ぐらいで、兎・駱駝・豚は不可。また鱗と鰭（ひれ）のない水産物もだめで、海老・蛸・鰻・貝は不可。また牛や羊でも、有資格者が規定に従って完全に血を抜いて屠殺しなければなりませんから、血の滴るようなビフテキは厳禁です。血の混ざる可能性のあるハムやソーセージも不可。また肉とアイスクリームなどの乳製品を同時に食べることは不可。それは聖書に、子山羊の肉を母の乳で煮てはいけないと書かれているからです。植物は全く問題になりません。　　　　　　　　　　　　　　　　　　（25・1・9）

　このように禁忌が多いと、ユダヤ教は何と不自由な宗教かと思われることでしょう。しかし実際には宗派や個人の信仰によっていろいろな解釈や程度があり、あくまでも厳密にすればという話なのです。最近の若い世代には、これらの掟を厳密には守らない人も多くなってはいますが、そういう人も、信仰の重要性については、一様に認めているのです。

　このような厳しい食物の規定は、食べることを高度な文化に発展させてきた日本人にとって、理解しがたいものでしょう。｢食べる｣ということは、ある意味で最も動物的・本能的行為でありますが、そこに一定の宗教的制限を設けることにより、日常生活を聖なるものに昇華してゆくことができると、ユダヤ教では考えています。聖書には、神は聖であるから、神に似るものとして創造された人も、聖でなければならないと記されています。日本人にとっては非人間的と見えることでしょうが、ユダヤ人にとっては、それが神の意志に沿って生きることなのです。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（25・1・10）

４，安息日の重要性の増大

　安息日の戒めは、十戒の第四戒で、ユダヤ教の数ある掟の中でも特に重要なものです。そしてその重要性は、ユダヤ人の長い歴史の中で、次第にその重要性を増大されて来ました。紀元前722年、北のイスラエル王国がアッシリアに滅ぼされ、587年には、南のユダ王国も新バビロニアに滅ぼされました。そしてソロモン王の建てた神殿は破壊され、ユダ王国の人々はバビロニアに捕囚として連行されてしまいました。こうしてユダヤ人の離散の歴史が始まったのです。

　その結果、イェルサレムの神殿による祭祀は不可能となりましたが、彼らは決して信仰を捨てることはありませんでした。そして神殿に詣でる代わりに、離散したそれぞれの土地において、安息日を守ることがもっとも重要な祭儀となっていったのです。そしてシナゴーグ（ユダヤ教の会堂）が建てられ、ユダヤ人の精神的支柱となりました。こういて離散の境遇にありながらも、安息日を守ることによって民族として生き残り、精神的帰属意識を維持し続けることができたのです。　　　　　　　　　　　　　　　（25・1・11）

　紀元前539年、アケメネス朝ペルシャのクロス王が新バビロニアを滅ぼすと、王は捕囚となっていたユダヤ人の故郷帰還を許しました。そして神殿再建が始まり、紀元前515年に第二神殿が完成しました。イエス・キリストの時代にあったのは、この神殿です。帰還の指導者であった律法学者エズラの宗教改革は、律法的・厳格的でありましたが、非妥協的精神によりバビロニアの異教文化の中で、宗教的純粋性を保持してきた

ことを背景とするものでした。またその精神は、ペルシャに替わるセレウコス朝によるヘレニズム化政策に抵抗する原動力となったものでもありました。

　その後、紀元後132年、第二神殿もローマ帝国に破壊され、ユダヤ人は世界各地に離散して行くことになりました。しかしいつ祖先の信仰の地に戻れるかあてのない苦悩の期間、ユダヤ人は安息日を守ることによって神と祖先とにつながり、そのアイデンティティーを維持し続けたのでありました。

　安息日や食事に関する掟をそのまま実行してゆこうとすれば、ユダヤ人が異教徒と共に生活をすることがどれ程困難であるか、想像に難くありません。世界中に離散したユダヤ人が頑ななまでに信仰による共同体を維持し続けたことが、良くも悪くも他民族との軋轢や誤解を生んだことは否定できません。しかしユダヤ人が歴史の荒波に翻弄されながらも、そのアイデンティティーを維持し続けて来られたことは、安息日を中心とした信仰的掟の存在なしにはとうてい考えられません。ユダヤ人の格言に、｢安息日がユダヤ人を守った｣という言葉があります。言い得てまさに妙と言えましょう。　　　　　　　　　　　　　（25・1・12）

５，安息日の一日

　最後に私がイスラエルで体験してきた、安息日の家庭の様子をお話しましょう。ユダヤ教では日没から

新しい一日が始まります。それで安息日は金曜日の日没から土曜日の日没までというわけです。まず金曜日の午後は、家の中を掃き清め、御馳走を用意し、身体を清めて正装します。夕方、夫や父親がシナゴーグ（ユダヤ教の会堂）で礼拝をしている間に、妻や母親は食卓を整えて待ちます。夫や父親は帰宅すると、子供たちを祝福し、安息日を迎える儀式が始まります。まず二本の蝋燭に点火し、安息日を迎える歌や、妻や主婦を讃える歌を歌います。次いで葡萄酒をグラスに注ぎ、これを祝福する祈りを唱えてから飲みます。さらに様々な祝福の祈りの後、ようやく食事が始まります。そして食事の間にも、聖書の聖句が歌詞になっている伝統的な歌を歌い、楽しい雰囲気の中で食事が進みます。そして最後に感謝の祈りを唱え、会食は終わります。翌朝になっても安息日は続いています。その日は人それぞれに休息したり、行楽を楽しんだり、聖書を読んで過ごします。そして日没前、夕べの祈りを唱えて、ようやく安息日が終わることになります。

　日本人にはなかなか理解の及ばないことですが、強いて譬えれば、毎週、お正月を迎えるようなものでしょうか。信仰的なユダヤ人の家庭では、現在でもそのくらい厳かな気持ちで、安息日を大切にしているのです。

　今回のテーマは｢身近な教材｣という視点からは外れていますが、誰でもができる体験ではないので、敢えてここでお話した次第です。さて次は何にしましょうか。これから考えます。　　　　　（25・1・13）

２６，オランダ貿易と白詰草

　さて何をお話するかすぐには思いつきませんので、取り敢えず小話を一席。

　｢四つ葉のクローバー｣と言えば、幸せのシンボルとして知られていますが、もともとはキリスト教の俗信です。ふつうなら３枚の葉ですのに、どうした弾みか４枚の葉ができることがあります。３枚の葉は、新約聖書コリント人への手紙第１３章１３節の聖句に拠って、｢希望・信仰・愛｣の三つを表しています。たまたま４枚揃うと十字架の形になり、キリスト教徒にとっては神の祝福の予兆と信じられたのでした。

さてそのクローバーは、和名がシロツメクサという豆科の多年草です。ヨーロッパ原産の帰化植物で、牧草として栽培されてもいますが、日本各地に野生化しています。どこにでも見られる普通の草で、子供の頃には白い花で冠を作り、遊んだ記憶のある人は多いことでしょう。

このシロツメクサを漢字で書くとどのように書くのでしょうか。もうタイトルでわかってしまっていますが、｢白爪草｣と思っている人がかなりいます。実際に｢爪草｣という草があるのでそうなのでしょうが、｢爪草｣とは全く関係ありません。正しくは｢白詰草｣で、よく似た｢赤詰草｣もあります。｢詰草｣という名前は、実は長崎のオランダ貿易で、｢ギヤマン｣と呼ばれたガラス器を梱包する際、緩衝材として隙間に詰め込まれたことに拠っているのです。そのため｢ギヤマン草｣とも呼ばれました。アカツメクサは明治期に牧草として導入された物です。オランダ貿易の教材というほど大げさなものではありませんが、身近にあるだけに、息抜きの小話くらいにはなることでしょう。

ものの次いでですが、｢ギヤマン｣とはオランダ語のdiamantが訛った言葉で、本来はダイヤモンドを意味しています。ガラスを切るのにダイヤモンドを使用したからとか、ダイヤモンドで研磨してカットグラスを作ったからとかいう説があります。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（25・1・14）

２７，熱帯雨林気候とラワン

木にはなぜ年輪ができるのでしょうか。春から秋にかけての温暖な季節には、木の生長が盛んとなり、その結果として幹が太くなります。しかし冬季には生長が抑制されるため、冬季に生長する部分は緻密で堅く、色も濃くなります。こうして一年に一本づつ年輪が増えるので、木の断面を見れば樹齢がわかります。

冷涼な気候が適している針葉樹には、この年輪が顕著に表れることは、日本人なら経験的にわかっていることでしょう。また同じ一本の木でも、北半球では南に面している側はよく増殖し、北側は抑制されるので、伐り倒された木の断面を見れば、方角がわかることもあります。このような年輪があることは日本の樹木では普通のことで、年輪や木目を活かした建築や工芸品に、日本人は美しさを感じています。言い換えれば、日本の気候は、四季の変化が明瞭であるということなのです。

それならば四季が明瞭でない地域の木の年輪はどうなっているのでしょうか。一年中、樹木の生長に不可欠な降水と日照が十分にある熱帯雨林気候のもとでは、年輪が不明瞭になるのでは。そういう仮説を立てて、熱帯の樹木を調べてみましょう。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（25・1・15）

材木を扱う業界では、熱帯の材木は｢南洋材｣と呼ばれ、日本は大量に輸入しています。それらの製材された木の肌を、本来ならば直接手で触れて観察しなければならないのですが、やむを得ずインターネットで調べてみると、確かに年輪の不明瞭な材木が多いようです。それらの中で最も身近にあり、直接触れることが容易なのはラワン材でしょう。ラワン材はその加工のしやすさから、日本ではベニヤ板・家具・建築材として、日常のあらゆる場面で用いられています。ただ保存性に難点があるため、屋外や地面に接する部分には適していません。

そもそもラワンとは、熱帯に生育するフタバガキ科の広葉樹の総称で、固有の一種類を指す名称ではありません。樹高は40～60ｍもあり、80ｍに達したものもあるとか。直径は、人の胸の高さで１～２ｍもあります。分布地域は、かつては東アジア一帯に広がっていました。しかし花が咲くまでになるのに60年もかかるという生長の遅さに加えて、量的限度を超えて伐採されたため、現在では伐採・輸出を禁止する国が増えてしまいました。現在日本が南洋材を輸入している主な国は、マレーシア、インドネシア、パプアニューギニアぐらいのものです。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　(25・1・16)

｢ラワン｣という名称については、次のような面白い話が伝えられています。初代フィリピン総督としてスペインから赴任してきたレガスピが、兵を率いて密林を進んでいた時のことです。行く手を阻むようにそびえる大木を指さして、従者にその名を尋ねると、従者は｢ワアン｣と答えました。｢ワアン｣とは現地の言葉で｢森｣を意味する言葉なのですが、森と見紛うほどに繁っていたのでしょう。以来、スペイン語の冠詞である

ラ(Ｌａ)を付けて｢ラワン｣と呼ばれるようになったということです。

　｢ラワン｣がスペイン語に由来することは、世界史的には意味のあることです。フィリピンがスペインの植民地になり、また｢フィリピン｣という国名その物が、スペイン王｢フェリペ｣に由来しており、その｢フェリペ｣がイエス・キリストの弟子｢ピリポ｣に由来しているからです。因みに｢レガスピ｣の名前は、ルソン島の南部にある｢レガスピ市｣として現在も残っています。　　　　　　　　　　　　　　　　　　(25・1・17)

　さてラワン材を教材として使う場合は、熱帯雨林気候や、年輪が不明瞭な南洋材について説明した後、その具体例として提示します。そうしておいて、身近なところからラワン材を探させます。中には｢ラワン｣その物を知らない生徒もいるでしょうから、板を見せてもよいでしょう。そうして改めて教室を見回すと、いろいろな所にラワン材が使われています。まず教壇がそうでした。机や椅子の天板も、表面だけはラワン材でなくとも、その下にはラワン材の合板が隠れていました。身の丈を越すラワン材のベニヤ板を見たことがない生徒はまずいないでしょう。ただしラワン材のベニヤ板は、ラワンの丸太を大根の桂むきのようにして薄く剥いだ板を、木目が直交するように接着した物ですから、もともと年輪がわかりにくくなっていることには注意が必要です。ベニヤ板の幅がそのままラワン材の直径ではないのです。　　　(25・1・18)

　そしてこの際是非とも確認しておきたいのは、日本が世界最大の木材輸入国であるということです。何と世界の丸太輸入量の約４割を占めていて、第一位。第二位の韓国が７％ですから、断トツの第一位です。年によってデータは多少変化するでしょうが、第一位であることは変わらないでしょう。政府は自給率５割を目標としていますが、実際には２割台を推移しています。南方の諸国の森林破壊について、日本は大きな責任を負っているわけです。森林資源を湯水のように消費する生活文化について、改めて考え直すきっかけにしたいものです。

２８，来迎

笑ってはいけないのですが、つい笑ってしまう歴史小話を一席。

　同居していた義母が、介護施設のデイサービスに通っていた頃のことです。朝いつものように送迎の車が来ました。義母がもたもたしていてなかなか出てこないので、私が｢お迎えが来ましたよ｣と言ったのですが、それを聞いていた介護施設のスタッフが、くすくす笑いながら、｢そんなこと言ってはいけませんよ｣と言うのです。私が怪訝な顔をしていると、そのわけを説明してくれました。｢お迎えが来る｣とは臨終になるという意味なので、高齢者の前では絶対に使ってはいけない表現だというわけです。もちろん私は一瞬でわけを呑み込みましたが、そのスタッフは｢来迎｣ということの歴史的意味まで理解しているようではありませんでした。

浄土信仰が流行した当時、信者は来迎図を見たり、また来迎をイメージしながら、ひたすら極楽往生を願ったものです。来迎図とは、紫雲に乗った阿弥陀如来が、臨終に際して往生を願う人を極楽に迎えるために、合掌する観音菩薩・蓮台を捧持する勢至菩薩のほか多くの諸菩薩等を従えて、極楽からやって来る様を描いたものです。信者にとっては｢来迎｣とはそれこそ｢天にも昇る｣喜びであったのでしょうが、本気の信仰心を失ってしまった現在では、ただ臨終だけを意味する言葉に変化してしまったわけです。

天台宗の修行に｢常行三昧｣という行があります。七日間、あるいは９０日間、来迎を念じつつ阿弥陀如来像の周囲を念仏を称えながら巡り続けるのです。そのような行をするお堂を常行三昧堂と称するのですが、お堂の中央に置かれる阿弥陀如来像の周囲には、巡り歩くための通路が設けられます。そのため、建物は平面が方形で、屋根は隅棟が中央の一点に集まり、水平の棟のない宝形造の建て方となります。阿弥陀堂独特の建て方ですね。建物の規模としては小さく、よく寺の墓地にも見られます。こういう建て方一つにも、浄土信仰の名残が見られるわけです。

話はもとに戻りますが、悪気はなくともうっかり｢お迎えに参りました｣と言ってはいけないのですね。｢縁起でもない｣と怒られることになりますから。私などは一応キリスト教徒なので、｢天国からお迎えに参りました｣とでも言われたら、大喜びでついて行きたいのですが･････。　　　　　　　　　　(25・1・22)

２９，霧を作る

根釧台地あたりの北海道東海岸や三陸地方では、よく濃霧が発生して冷害が起きました。その原因は、夏、オホーツク気団から吹いてくる冷涼で湿潤な東北の風で、｢山背｣(やませ)と呼ばれています。特に梅雨明け後に吹く事が多く、折しも稲の生育期に重なるため、冷害になります。山背が吹きつけると、ただでさえ気温が低下するだけでなく、霧によって日照時間が短くなります。北海道の東海岸地方ではもともと稲作が行われず、牧畜や畑作が中心ですから、稲の不作ということにはならないのですが、三陸地方から仙台平野や福島県浜通の稲作には、しばしば悪影響を与えるのです。　　　　　　　　　　　　　　(25・1・24)

そもそも霧とは、水蒸気を多量に含んだ空気が、何らかの理由で飽和状態を越えると、水蒸気が微細な水滴となって空気中に浮遊して発生するものです。同じような自然現象に｢靄｣(もや)がありますが、気象学的には、視程、つまり見通すことのできる水平距離が１㎞未満を霧と言い、１㎞以上で１０㎞未満のものを靄と言うそうです。遠くが霞んで見えることを｢霞が立つ｣と文学的に表現しますが、霞は気象用語ではありません。大気中の水蒸気が飽和状態を越えるために発生するという点では、雲も同じことで、空に浮かんでいれば雲。地上に漂っていれば霧なのです。もっとも山の上の方にいて、雲の中に入り込んでしまっている人にとっては、雲というより霧なのでしょう。

大気中の水蒸気が飽和状態となる段階を｢露点｣と言いますが、露点に達する原因はいろいろあります。専門的にはいろいろあるのでしょうが、学校の授業では、暖かく湿った空気が冷やされることによって起きると説明すればよいでしょう。冬に盆地や谷沿いでよく霧が発生しますが、これは放射冷却により冷えた地表に、湿った空気が流れ込んで発生するもの。川筋に発生する霧は、水面上の暖かい空気が、移動してきた冷たい空気に冷やされて発生するものです。海で発生する大規模な霧は、暖かく湿った暖流上の空気が水平に移動し、冷たい空気や寒流に冷やされて発生します。山背に伴う霧は、太平洋高気圧から吹き込む暖かく湿った大気が、寒流である親潮やその上を吹いてくる山背によって冷やされて発生するわけです。

そこで霧の発生する理屈を、生徒に身近に確認させてみたいのです。確認と言っても、大したことではありません。なぁんだと言われる程の当たり前のことなのですが。冬の寒い日には、吐息が白く見えます。また冷蔵庫を開けると、白い霧状の空気が降りてきます。湯槽から立ち上る湯気も同じこと。いずれも暖かく湿った空気と冷たい空気が接することによって発生するのです。本当に｢なぁんだ｣でしょう。実際にはもっといろいろな要素が複雑に絡んで発生するのであって、専門家に言わせればそんな単純なことではないと思います。しかし授業では単純化させた方が理解しやすいのです。

授業の中で、根釧台地での牧畜業、東北地方の冷害、冷害に伴う米価騰貴や打ち壊し、三陸地方における冷害に強い雑穀栽培(例、盛岡の椀子蕎麦)などについて触れることがあれば、霧が発生するメカニズムについても言及してみたいものです。もちろん霧や雲その物についての学習にも使えるネタです。(25・１・29)

３０，紡績

実感が伴わずに生徒がよく理解できない事の一つに、｢紡績｣ということがありました。｢製糸｣も糸をつくることなのに、どこが違うんだろう。そんな質問をよく受けたものです。紡績とは原料となる綿・羊毛・麻などの繊維に撚りを掛けて糸にすることで、製糸とは、一般に蚕の繭を煮てほぐし、糸を引き出すことです。蚕の吐く糸は始めから終わりまで繋がった一本の糸ですが、紡績用の綿などの繊維は短いため、寄り合わせなければ長い糸にはなりません。それで短い繊維の端が糸のあちこちにはみ出ることになりますから、紡績による糸は毛羽立ち、その糸で織った布も滑りがよくありません。それに対して、製糸による糸には繊維の端が糸の途中からはみ出しませんから、絹織物はすべすべした肌触りになるわけです。

そこで糸を紡ぐということを、生徒の前で見せてやってほしいのです。弥生時代には紡錘車を用いて糸を紡いでいたのですが、紡錘車を使いこなすには少々器用さが必要で、誰でもがすぐにできるわけではありません。しかし引っ張っても切れない丈夫な糸にはなりませんが、綿を紡いで糸にするという原理だけを示すなら、何の道具も要らずに誰でもすぐにできます。

まず綿の実から繊維の部分だけをむしり、手のひらにのるくらい集めましょう。綿花がなければ脱脂綿でも良いし、麻糸をほぐしても良いし、羊毛でもかまいません。とにかく綿状の物を用意します。それを左手に持ち、右手の親指と人差し指で綿の一端を摘み、撚りを掛けながら引き出すようにします。1回にせいぜい数センチしか引き出せないでしょう。無理して引きすぎると切れてしまいますし、回転が少なければ糸は太いままになってしまいます。少しずつ一定の量で綿を引き出せれば、むらのない糸になります。そして引き出した糸は綿の先にぶら下がるような恰好になるでしょうから、それを何かに巻き取れば良いのです。さっきも書きましたが、あくまでも原理の提示であって、丈夫な糸にはなりません。しかし綿に撚りをかけて糸を紡ぐということを理解させることができるでしょう。始めはうまくいかないでしょうが、慣れればすぐに上達します。是非挑戦して下さい。そして木綿やウールの肌触りと、絹の肌触りの違いを改めて確認させ、これが紡績と製糸の違いだよと、気が付かせたいのです。　　　　　　　　　　　　　　(25・1・30)

一寸書き忘れたことがありました。それは｢紬｣のことです。紬は絹織物の一種ですが、生糸ではなく、紡いだ糸を素材にしています。変形して生糸を採れない繭をほぐして真綿に加工し、それを紡いで糸を採り、それを織るわけです。｢紬｣という名称自体が、生糸による絹織物と異なることを示しています。指先で糸を紡ぎますから大変に手間がかかり、糸の太さも均一ではありません。そのため織り上がった布には、糸の太さの不均一による独特の風合いがあり、絹織物に比べると光沢が鈍く、木綿のようにも見えます。それで正装には向かない布とされてきましたが、絹よりも丈夫で、代々譲って大切にされるものです。歴史の授業では、結城紬に一瞬触れることもあるでしょうから、もし端布でも手に入るなら、確保しておくとよいでしょう。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　(25・2・1)

３１，節分

もうすぐ節分ですので、一寸節分の小話を。そもそも節分は季節を分けるという意味ですから、立春・立夏・立秋・立冬の前日はみな節分でした。ただ昔は立春から新しい年が始まると考えられていましたから、立春の前日の節分が最も重視され、節分と言えば立春の前日を意味するようになりました。それどころか、最近の生徒は、節分の翌日が立春であることすら知りません。中には立春ということすら知らない生徒もいて、愕然とします。

話は逸れますが、立春から1年が始まるということは、｢八十八夜｣や｢二百十日｣が立春から起算されていることでも明かです。また年賀状に今でも｢賀春｣｢新春｣｢頌春｣というような、春を喜ぶ賀詞が使われていることもその名残です。

立春から新年が始まるということは、節分は1年の最後の日に当たるわけですから、節分には新年を迎えるための準備が行われる日でもありました。この日に家の中から邪気を追い払う追儺の行事は、平安時代から行われていましたが、それは煤払いと同じ意味を持っています。新年を迎えるに相応しく、家の中を清浄にする意味があったわけです。豆で邪鬼を追い出すことは室町時代から行われていたようですが、それに関連して、年の数だけ豆を食べるという風習が広く行われています。そのことを生徒に話すと、年の数だけという生徒と、年の数より一つ多く食べるという生徒に分かれました。

さてどちらが正しいのでしょうか。正解は｢一つ余計に食べる｣です。満年齢による年齢の数え方が一般化していなかった頃は、新しい年が始まると一斉に一歳年齢が増えるのです。ですから年の最後の日の夜中に豆を撒いて家の中を清め、立春と共に一歳加齢することを一つ豆を余計に食べて長生きを祝うわけです。現在は数え年という習慣が廃れてしまったので、一つ余計に食べることの意味が不明となり、いつのまにか年の数だけ食べるというようになってしまったわけです。もっとも私は六十数個も食べる気にはなりません。若返りたいわけではありませんが、とてもとてもそんなに食べる気になりません。　　　　(25・2・2)

３２，ジャガイモの原産地

私の家の隣に竹藪や荒れ地があったのですが、子供が火遊びをしたことがあり、枯れ草に燃え移ったら危ないと、草を刈り、竹の根を抜いて管理をしていました。地主が誰かもわからないのですが、草刈りにも来ないので勝手に開墾し、もし何か言われたら返せばいいやと、｢墾田勝手に私財令｣を発して野菜などを植えるようになりました。

２月になると、園芸店にはジャガイモの種芋が並びます。今年は何という品種を植えようかと、いろいろ調べてみました。以前は男爵とメークインぐらいしかなかったのですが、最近は聞いたこともない新品種が多く、色も形も様々で驚きました。その中で教材として面白いと思ったのは、｢インカ｣とか｢アンデス｣という名前を含んだ品種です。調べてみると、｢インカのめざめ｣｢インカパープル｣｢インカのひとみ｣｢アンデス赤｣など、いずれもジャガイモの原産地がペルーであることに因んだものであることは明白です。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　(25・2・5)

　私の住んでいる埼玉では、に種芋を植え付け、梅雨の間に収穫が終わってしまいます。梅雨が明けて暑くなると、地上部分は枯れてしまい、何所に植えていたかわからなくなってしまうのです。ジャガイモは冷涼な気候に向いていますが、暑さには耐えられないのです。そういえば、日本のジャガイモの８割は北海道で生産されています。世界第二位のジャガイモ生産国はインドですが、デカン高原のような高地で栽培されています。日本人はインドの気候というと、すぐに気候を思い浮かべますが、インドと言っても広いのです。そういえばアンデス地方も緯度だけは低く、赤道に近いですね。しかし原産地は富士山より標高が高い地域ですから、気候は冷涼なのです。

　話はただこれだけなのですが、ジャガイモの品種名から、授業では、その原産地がペルーであること、またインカ帝国を滅ぼしたスペインによってヨーロッパに伝えられたこと、また冷涼な気候に適していることなどに発展させられると思ったわけです。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　(25・2・7)

３３，律令官制と名前

律令官制と様々な官職名は、生徒にとって覚えるのが厄介な代物です。ただ現在もその痕跡はあちこちに残っているので、改めて確認したいものです。

最も身近にあるのは人名でしょう。各官司の幹部は四等官制によって、上から統括者の長官(かみ)、補佐役の次官(すけ)、文書を審査する判官(じょう)、文書を作成する主典(さかん)の４段階に分かれています。官司によって字は異なっていても、太政官を除いて読み方や役割は同じです。中でも注目したいのは省と国司の四等官です。省の長官は｢卿｣、次官は｢輔｣、判官は｢丞｣、主典は｢録｣、国司の長官は｢守｣、次官は｢介｣、判官は｢掾｣、主典は｢目｣です。これらの８文字の中では、輔・掾・介は男性の名前に好んで用いられています。｢おい、浩輔君よ、君の名前は律令時代なら副大臣格の名前だぞ。大介よ、お前は副知事クラスだな｣なんていうジョークも飛び出します。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　(25・2・8)

さすがに現代では珍しくなりましたが、武士の通称として用いられていた兵衛・衛門・右衛門・左衛門・など五衛府の官職名は、江戸時代まではごくありふれた庶民の名前でした。酒井田柿右衛門・近松門左衛門・高田屋嘉兵衛・磔茂左衛門・石川五右衛門・山本権兵衛などは、授業でも触れることがあるでしょう。漫画の主人公｢ドラえもん｣も同じこと。ついでに義父の名前は次郎兵衛という強そうな名前です。

人物名ではありませんが、現在の行政機構にも律令官制の名残があります。太政官の中央官庁を｢省｣、太政官の長官を｢大臣｣と称しましたが、現在も内閣の中央官庁を｢省｣、その長官を｢大臣｣と称しています。現在は財務省に改称されてしまいましたが、かつては律令官制そのままの｢大蔵省｣がありました。地方区画では｢郡｣の呼称も残っています。行政区画ではありませんが、七道の名称は日常生活で普通に使われています。

これらの名称を使うたびに律令官制を思い浮かべるわけではありませんが、そう言われてみればそうであったと、改めて律令官制の名残に気付かせたいものです。　　　　　　　　　　　　　　　(25・2・10)

３４，土師器と須恵器の色

大和時代の文化で必ず学習する土師器と須恵器ですが、土師器は赤褐色、須恵器は灰色と説明されます。しかしその違いがなぜ生ずるのかについては、ほとんど説明されません。

粘土の中には必ず鉄分が含まれていますが、粘土で形を作った土器を焼くと、粘土の中の鉄が酸化されて酸化第二鉄となります。酸化第二鉄とはいわゆる赤錆のことですから、よく焼き上がった土器は赤褐色になるのが普通です。土師器は弥生土器と基本的には同じ作り方で露天で焼きますから、酸素が十分に供給され、赤褐色になるのです。これを酸化焼成と言います。また露天で焼成しますから、熱はどんどん逃げてしまい、どれ程長時間焼成しても、温度はある一定以上は上がりません。

しかし半島から伝えられた新しい技術による須恵器は、露天ではなく穴窯で焼きます。簡単に言えば、半地下の巨大な煙突の中で焼くと思えばよいでしょう。閉鎖された窯の中で焼きますから、何日も継続して焼成すれば、窯の中の温度も千度以上になります。そして須恵器を焼く場合、最後の最後に焚き口に大量の薪を投入し、煙の出口と焚き口を密閉してしまう。そして冷却されるのを何日も待つわけです。すると酸素が十分に供給されませんから、粘土の中に含まれている酸素さえ奪い取られ、粘土の中の鉄分は還元されて酸化第一鉄になります。これはいわゆる黒錆で黒色ですから、鉄を含んだ粘土は灰色に焼き上がるわけです。これを還元焼成と言います。

酸素が不十分なのに燃焼するという現象は、実は身近にも見られます。枯れきっていない草を火種の上に覆い被せると、炎は上がらずに煙だけがもくもくと立ち上ることがあります。この場合は一酸化炭素が発生しているのですが、屋外ですから危険ではありません。いわゆる不完全燃焼です。ガスや木炭の不完全燃焼も同じことですが、こちらは命に関わります。そういう状態の所に団扇などで空気、つまり十分な酸素を供給してやれば、真っ赤な炎を上げて盛んに燃え始め、煙も出なくなります。この時は酸素が十分ありますから、二酸化炭素が発生しているのです。要するに須恵器というのは、最後に不完全燃焼させて鉄分が黒く発色しているわけなのです。

身近なところに土師器や須恵器があれば実物で色を見せられるのですが、どうしてもなければ素焼きの植木鉢と屋根瓦で説明します。植木鉢は酸化焼成されていますから、赤褐色をしています。それに対して屋根瓦は、まあ地方によっては色々な色があるでしょうが、一般的には黒っぽい色をしています。これは還元焼成されたからです。

こういう話をすると、縄文土器は黒褐色が多いということだったのでは、と思う人もいると思います。これは決して還元焼成ではなく、ただ焼成が不十分なためです。炎がよく当たらなければ赤褐色になりません。実際に土器を焼いてみれば、経験的にわかることです。

私の住んでいる吉見の近くに、鳩山町があります。ここには奈良時代に須恵器を焼いた窯跡がたくさんあり、須恵器片を拾うことができます。窯は丘陵の末端部に作られていて、割れた製品などの破片が、丘陵末端に接する平地に灰と一緒に大量に捨てられました。そこが現在水田になっていたりすると、耕作の邪魔になるからと、破片が道路や畦に放り出されているのです。小さい物ばかりですが、それを少々拾っても盗掘だと怒られることはないでしょう。もし吉見に来られることがあれば、御案内します。　　　(25・2・11)

３５，紙の発明と竹簡

私が高校生の時は、後漢の宦官であった蔡倫が製紙法を発明したと習いました。紀元後１０５年のことです。『後漢書』によれば、蔡倫が樹皮・漁網・麻の屑繊維で紙を作り、皇帝に献上したとされていました。しかし１９９６年に前漢時代の地図が書かれた紙が西安で発見され、紀元前１５０年頃のものと推定されたため、現在では、蔡倫は製紙法を改良したと考えられています。

さて、ある友人から、古い紙は手に入らないものかと相談されたことがあります。そんな物があるわけがありません。｢古い｣と言ってもどの程度の古さなのか、江戸時代の紙ならいくらでも手に入りますが、それ以前になったら、そう簡単にはできません。まして古代中国の紙があるはずがない。しかしその会話がヒントになって、ふと面白いアイデアが浮かびました。　　　　　　　　　　　　　　　　　(25・2・12)

紙が発明される前は、竹簡や木簡に書いていました。大学時代に書道部に入っていて、木簡を臨書したことがあり、ふと思いついたわけです。紙は無理としても、竹簡の複製を作り、｢紙が発明される前は、このような物に書いていた｣と示すことができれば、紙の発明がいかに画期的なことかを理解させられるのではと思いました。もちろん本物の竹簡を見たことはありません。せいぜい写真で見た程度です。しかし博物館に展示する精巧な複製である必要はありませんから、厳密な考証はできなくても許されるでしょう。

そこで近所の竹林から竹をもらってきて、節のない部分を長さ３０㎝に切りました。直径は太い方が良いようです。またできれば切ってから時間がたった物の方がよい。これは結果的にわかったことなのですが、青竹だと後で黴が生えてくるからです。完全に乾ききったものでなければ、うまくいかないことがわかりました。そして３０㎝の長さに切った物を、幅１５㎜に縦に割ります。さらにそれを２㎜～３㎜の厚さに整えます。包丁などをあてがい、上から金槌で叩いて薄く割りました。さらに鉋や紙やすりをかけて表面をなめらかにします。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　(25・2・13)

さて次はいよいよ字を書くわけですが、前漢の時代にはまだ楷書がありませんから、楷書で書くわけにはいきません。漢代以前の書体としては、秦の始皇帝が制定した篆書(小篆)があったこと、また漢代には速写体として隷書が行われていたことはすでにお話しました。そこで隷書で書かなければなりません。書く内容は迷わず『論語』にしました。これなら生徒でも読める部分もあり、漢代には既に儒学が尊重されていたからです。

予め糸で編む位置に目印を付け、そこを避けて文字を書きます。隷書になれていない人は、横画の末尾をすっぽ抜けるような感じで書けば、それらしくなることでしょう。ただ書き終わってから順番がわからなくなるので、予め鉛筆で順を書いておくとよいでしょう。もし書き損じたら、ナイフで削ればよい。

編み方は、巻き寿司をつくる簀の子を買ってきて、それを丁寧に分解し、同じように太めの凧糸で編めばよいのです。全体としては筆巻をイメージすればよいと思います。

こうして出来上がった竹簡の巻物ですが、あらためて書物は｢巻｣を単位として数えることがよくわかります。また｢冊｣という漢字ですが、竹簡の象形であることも納得できるでしょう。また｢典｣という漢字は、机の上に書物を載せている象形であることも理解できます。また資料をまとめて書物にすることを｢編む｣と言いますが、それも体験的に理解できました。たった一巻だけでこれほど大変なのですから、全巻揃えるにはどれ程大変なことか。あらためて紙の発明が文化や政治の発展にどれ程大きく貢献したかがよくわかります。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　(25・2・14)

３６，椅子に座るということ

何を書いてよいのか思い浮かばないので、またまた小話を。

｢清明上河図｣を細かいところまでじっくりと観察していて気が付いたことなのですが、床に直に座っている人が見当たらないのです。座っているとしたら、すべて椅子を用いています。日本人が椅子を普通に使うようになったのは明治以後のこと。それまでに椅子が全くなかったわけではありません。床机のような簡易な折りたたみ椅子は、戦でもよく使われていました。しかし日常的にはほとんど使われていません。それがなぜなのか、私にはよくわかりませんが、椅子に座るという文化は宋ではごく普通のことでありました。そうすると一つ思い当たることがあります。鎌倉時代に宋から禅宗が伝えられますが、｢頂相｣と呼ばれた高僧の肖像画のことです。坐禅をするのだから床に座っていてもよいのではとも思うのですが、例外無しにみな椅子に腰掛けているのです。蘭溪道隆・無学祖元・一山一寧らの宋から渡来した禅僧たちは、禅の法話をする時には、きっと頂相に描かれたように椅子に座っていたのでしょう。話はただのこれだけなのですが、禅宗が宋から伝えられたということを、｢椅子に座る｣ということを通して納得したのでした。

｢歴史実物教材｣の表に、最近一点しかない物をたくさん載せておきました。御覧になって、もし御希望の物がありましたら、急いで御連絡下さい。一点しかない物については、品切れになってしまったら御容赦下さい。　　　　　　　　　(25・2・17)

３７，黄土と黄砂

｢黄土｣と書いて、何と読めばよいのでしょうか。｢黄土高原｣｢黄河文明｣と言いますから、｢こうど｣でしょうか。｢黄土色｣と言いますから、｢おうど｣でしょうか。どうも歴史や地理に関連しては｢こうど｣、色の名前に関しては｢おうど｣と読んで区別しているようですね。さらに建築や陶芸の資材としては、｢きづち｣という読み方さえあると聞きました。社会科の授業では｢こうど｣でよいのでしょう。　　　(25・2・18)

黄土は、沙漠や氷河の微細な砂塵が風で巻き上げられ、長い間に堆積した物で、黄河の上流・中流域に著しく発達しています。その堆積した黄土の厚さは、５０ｍから２００ｍに及ぶそうです。粒子は０．００４㎜から０．００６㎜といいますから、土というよりは粉と言った方がよいのでしょう。黄土層は乾燥すると大変に固いが、水の浸食には弱く、黄土高原では土壌流出が著しい。そのため、黄河の水は黄土によって黄濁し、その川の名前の所以にもなっています。もっとも今日のニュースでみると、中国の河川は、工場排水などの汚染により、もっと毒々しい色になっていました。いずれ近いうちに取り返しのつかない問題になることでしょう。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　(25・2・19)

さてその黄河や黄土を実感させたいのですが、現地まで行くわけにはいきません。しかし陶芸材料としての黄土は、陶芸材料を扱う店で簡単に入手できます。問い合わせてみると、原料は確かに中国から輸入しているそうです。しかし黄土高原の土をそのまま掘って持ってくるわけではなく、鉱山で採掘した黄土を精製しているそうです。ただし日本産の黄土もあるので、購入する場合は確認した方がよいでしょう。

そういうわけで黄土高原の黄土その物ではないのですが、そういう説明をした上ならば、教材として活用することはできそうです。ペットボトルに黄土を小さじ一つ程入れて、水を満たしてよく振ると、即座に｢黄土色｣の水になります。また黄土をつまんでノートに擦り付け、その上にセロハンテープを貼ると面白い。ノートに実物を直接貼らせることは、私はよくやっていました。話は少し脱線しますが、これまでに貼らせたことのあるものは、サハラの砂、金箔、シラス、オリーブの葉、パピルス、江戸時代の和紙、藍染めの布、生糸、紅花染めの糸、原油などです。

このところ期末考査問題作りなどで忙しく、書いている暇がありませんでした。ご免なさい。私は要領が悪い方で、人の何倍も時間がかかってしまいます。忙しい時間の合間をぬって少しずつ書きますので、また御覧になって下さい。２月１７日に｢歴史実物教材｣の表に新聞などの資料を載せておきました。まだ余り反応はないのですが、一度是非御覧になって下さい。　　　　　　　　　　　　　　　(25・3・1)

黄土とよく似た物質に黄砂という物があります。タクラマカン沙漠・ゴビ沙漠・黄土高原などの微細な砂塵が強風に巻き上げられ、偏西風に乗って東アジア一帯に飛来します。発生する季節は春が最も多いそうで、昨日もニュースで報道していました。冬は大陸内部では降水量が少ないので乾燥しているのですが、安定したシベリア高気圧が支配していて、風はそれほど強くはありません。また雪が降る地域では、砂塵が舞い上がることもありません。しかし春になると、高気圧が弱まるにつれて、上昇気流である低気圧が発生し、また偏西風の影響が大きくなり、その上雪も溶けて砂塵が舞い上がりやすい条件が整うからということです。

黄砂の総量は年間で２～３億トン、日本に到達して降下する量は、１年間に１平方㎞当たり１～1.5トンと推定されています。当然のことながら発生源に近いほど降下量は多いはずですから、万年単位の地学的尺度で見るならば、黄土高原が約250万年前から始まった黄砂の堆積によって形成されたことも納得できるというものです。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　(25・3・2)

これだけ大量の黄砂が飛来すると、その影響も無視できません。特に今年は中国の大気汚染が注目されていることもあって、関心も高くなっています。日本では発生源から離れていることもあって、視界が悪くなる程のことは今のところありませんが、因みに、日本気象用語としての｢黄砂｣は、大陸性の土壌粒子により視程が１０㎞以下になる現象と定義されています。北京では大気汚染も相俟って、数百ｍも視程がなく、航空機の発着にも影響があるということですから、日本人の感覚では、もう人が普通に生活できるところではありませんね。

日本での｢黄砂｣観測日数は５０日前後ということですから、地天気予報やニュースに注意をしていれば、身近に見聞することはあるでしょう。九州地方では、自動車のフロントガラスをうっすらと覆う砂塵も見ることができます。日本では黄砂そのものが学習の主題となることはありませんが、黄土高原の形成・偏西風・大陸気候などを学習する補助的教材にはなることでしょう。

３８，西洋の暦

２月が２８日で終わり、３月になりました。普段は２月が３０日に満たないことに何も疑問を持ちませんが、ふとこれは教材になりそうだと思って、以前に太陽暦のお話しをしましたが、それとは一寸違う視点から、もう一度太陽暦についてお話します。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　(25・3・3)

現在使われている太陽暦が制定されたのは意外に古く、1582年にローマ教皇グレゴリウス１３世が、ユリウス暦を改良したものです。しかしそれにしても、なぜローマ教皇が改暦を考えたのでしょうか。それはキリスト教で最も重要な祝日である復活祭(イースター)の日を、いつにするかということがきっかけでした。

当時の復活祭は、春分後の最初の満月の後の日曜日と決められていましたが、紀元前46年に導入されたユリウス暦では、実際の天体の運行と暦の誤差が1600年も積もり積もって、春分の日が１０日もずれてしまっていたのです。そこで1582年の次の日を１０月１５日とし、これまでの１０日の誤差を修正しました。またユリウス暦では西暦年が４で割り切れる年を閏年としていたものを、１００では割り切れても４００では割り切れない年は閏年としないこととし、以後の誤差が生じないようにしました。つまりユリウス暦では閏年とされる年を、400年に３回は閏年としないことにしたのです。これによって１年の平均日数は、ユリウス暦の365.25日から365.2425日になりました。もっともこれでも3300年に１日の誤差が生じるそうですが、その解消は未来の世代に委ねるしかありません。　　　　　　　　　　　　　　　　(25・3・4)

それはともかく、現在の日本で当たり前のように使われている西暦は、ローマ教皇によって制定されたキリスト教暦であることを、改めて確認しておきましょう。

さてそれならグレゴリオ暦の叩き台となったユリウス暦は、どのように制定されたのでしょうか。御存知のように、｢ユリウス｣とは古代ローマの英雄カエサルのことです。ラテン語風に発音すれば｢ユリウス・カエサル｣、英語風に発音すれば｢ジュリアス・シーザー｣となります。因みに｢カエサル｣はローマ帝政時代には皇帝の称号の一つとなり、後にドイツ語の｢カイザー｣、ロシア語の｢ツァーリ｣の語源となります。

古代ローマでは、初代の王とされるロムルスが最初に暦を定めたとされていました。それによれば、１年は春分の頃のＭartiusの月に始まり、冬至の頃のDecemberの月に至るまでの10カ月と、暦に組み入れられない残りの60日余から成っていたといいます。随分いい加減な暦もあったものです。それを第２代の王ヌマが改め、空白の60日余を11番目の月であるJanuarius、12番目の月をFebruariusとして年末に付け足しました。そしてさらに紀元前153年、Januariusを年始とするように改められました。(25・3・8)

このあたりの事情は、授業で触れなくともよいでしょうが、年始が３月であったことには触れておきたいものです。２月だけが３０日に満たないのは、古代ローマ暦では２月が年末の月であつたことに因っています。月の名称を表にしてみましょう。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| 日本の新暦 | ヌマ暦 | ユリウス暦 | アウグストゥス暦 | グレゴリオ暦 |
| １月 | Martius | Januarius | Januarius | January |
| ２月 | Aprilis | Februarius | Februarius | February |
| ３月 | Maius | Martius | Martius | March |
| ４月 | Junius | Aprilis | Aprilis | April |
| ５月 | Quintilis | Maius | Maius | May |
| ６月 | Sextilis | Junius | Junius | June |
| ７月 | September | Julius | Julius | July |
| ８月 | October | Sextilis | Augustus | August |
| ９月 | November | September | September | September |
| １０月 | December | October | October | October |
| １１月 | Januarius | November | November | November |
| １２月 | Februarius | December | December | December |

 　　　　 (25・3・9)

月の名称を比較してみると、英語の月名の語源がヌマ暦まで遡ることがわかります。また｢第６番目の月｣を意味する｢Sextilis｣、｢第７番目の月｣を意味する｢September｣、｢第８番目の月｣を意味する｢October｣、｢第９番目の月｣を意味する｢November｣、｢第１０番目の月｣を意味する｢December｣などの名称が、英語の数詞の発音に関係あることも面白いと思います。ただし後に３月が年始になってしまったために、結果として２カ月ずれてしまってはいますが。

話をもとに戻しましょうか。紀元前４７年、カエサルはエジプトに遠征しました。クレオパトラとの出会いはその時のことです。カエサルは軍事・学問にも優れた才能を持っていましたから、当時エジプトで行われていた太陽暦が合理的であることに着目し、ローマに持ち帰りました。そして誤差が大きくなっていたローマ暦を改訂し、紀元前４５年から実施させました。その要点は次の如くです。　　　　　　(25・3・10)

①Januariusを年始とする。(ただしMartiusを年始とする従来の暦は、日本の旧暦のように習慣として残りました。)

②大の月を３１日、小の月を３０日とする。

③Januariusを大の月とし、以後交互に大小の月を並べる。

④１年を365日とする。

⑤４年に１度、366日の閏年を設け、Februariusの月で調整する。

⑥Februariusは平年は２９日、閏年は３０日とする。

またこの時ローマの元老院は、カエサルの功績を顕彰し、Quintilisの名称を廃して、カエサルの名を採ってJuliusと名付けました。また後に初代皇帝となったオクタヴィアヌスの称号アウグストゥスにより、Sextilisを Augustusと改称。Augustusを大の月とし、それ以後の月の大小を変更しました。その結果、Februariusは平年は２８日、閏年は２９日となったのです。ローマの暦では１月から４月までの名称は神の名から採られていています。例えば、Martiusは軍神ﾏﾙｽに拠っています。皇帝の名を採って月の名にすることは、神に列せられることでもあったのです。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　(25・3・11)

　その後多少の改訂はあるものの、基本的にはそのまま前述のグレゴリオ暦まで続くことになりました。グレゴリオ暦の改定点は、それまでに積み重なった誤差の修正と、閏年の設け方の修正だけですから、いかにユリウス暦が優れていたかがわかります。

　授業ではカエサルがエジプトから太陽暦を持ち帰り、ユリウス暦を公布したこと、元老院がカエサルとその後継者であるアウグストゥスの名を月の名とし、それが現在もなおのこっていることに触れておきたいものです。カレンダーの中にカエサルやアウグストゥスが潜んでいるとは、生徒はよもや思わなかったことでしょう。

３９，陶器と磁器

歴史の授業の中で陶磁器について触れるのは、加藤景正が宋から伝えた製陶技術による瀬戸焼、日明貿易で輸入された青磁・白磁、文禄・慶長の役で連れてこられた朝鮮陶工による西日本各地の御国焼き、李参平に始まる日本の磁器、柿右衛門に始まる赤絵の有田焼、野々村仁清や尾形乾山らの京焼、江戸時代各地の御国焼などがあります。これらの実物はいずれも高価な工芸品・骨董品で、物によっては手に触れることさえできません。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　(25・3・12)

　しかしここで問題にしているのは、国宝・重文クラスの陶磁器を理解させることではありません。陶器や磁器は日常生活の中で普通に使っているにもかかわらず、陶器と磁器の区別を知らない生徒が余りにも多く、一般的な陶器と磁器について理解させたいのです。磁器という言葉すら知らない生徒も少なくありません。本来なら親が家庭で教えるべき事なのでしょうが、そういう機会すらないのでしょう。

　私の経験では、磁器を先に説明した方が理解しやすいと思いました。磁器の原料になるのは、石英や長石を多量に含む石を、微細な粒子になるまで粉砕して精製された粘土です。本焼きには1300度ほどの高温が

必要で、ガラス質化するために吸水性がありません。また薄い部分では光を透すこともあり、軽く弾くと澄んだ金属音がします。

　磁器の製造技術が確立したのは、北宋の時代で、中国発祥の器です。英和辞書でｃhinaを引いてみると、｢磁器｣と訳されていることを確認させましょう。磁器については、授業ではまず青磁について話をします。

特に透明感のある青緑色の釉薬を施した青磁が有名で、東アジアを中心として世界各地に輸出されました。その独特の色は、釉薬に含まれる酸化第二鉄が、還元焼成によって酸化第一鉄に変化することによって生まれます。日本にも日宋貿易・日明貿易によってもたらされ、日本各地の中世の遺跡から発掘されています。特に冊封関係にあった琉球王国には大量の青磁がもたらされ、沖縄各地の城跡から発掘されています。私もかつて沖縄修学旅行に行った時、那覇の骨董店で破片を沢山買ったことがありました。

　また鎌倉の海岸では鎌倉時代の青磁片を現在でも拾うことができます。ただし青磁ハンターがいて、目の利く人が一通り探してしまった後は、なかなか見付かりません。満ち潮の時も無理でしょう。しかしハンターが拾った後でも、海が荒れた後ならまた砂浜に洗い出されていることがあります。これまでに２０回以上も拾いに行きましたが、手ぶらで帰ったことはありません。ただし拾えるのは１～３センチくらいの小片ばかりになってしまいました。

　海岸には中世の青磁だけでなく、現代までの幅広い陶磁器の破片が落ちています。青磁の色をしていても現代の物もありますから、注意が必要です。中世の青磁は断面が灰色です。青磁は断面が白いと思い込んでいると、現代の青磁片を拾ってしまうことになります。ただし捨てるのはいつでもできますから、念のため怪しい物は全て持って帰った方がよいでしょう。送っていただければいつでも鑑定いたします。もう退職して手許には沢山の青磁片があります。どうしても入手したい方は一度ご相談下さい。また青磁は拾えなくとも、常滑焼きの破片ならいくらでも拾えます。中世の交通・物資輸送の資料として、拾っておくとよいでしょう。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　(25・3・13)

破片ならばともかく、完形の当時の青磁など小遣い程度の金額で入手することは不可能です。それで現代の物でもよいですから、一つくらいは用意しておきたいものです。教材としてではなく、普段使いの器として買っておくなら、小遣いの範囲で何とかなるでしょう。

　染付けは、素焼きされた白磁に酸化コバルトを主成分とする呉須で下絵を付け、その上に透明の釉薬をかけて、1300度程の高温で還元焼成したものです。呉須が藍色に発色するため、｢青花｣とも呼ばれます。呉須は元の時代に、西アジアから顔料として中国に伝えられました。この染めつけの磁器は、青色を好むイスラム文化圏でもてはやされただけでなく、後にはヨーロッパ王侯貴族たちから宝石並の扱いを受け、羨望の的となりました。

日本の染めつけは、文禄慶長の役の際に連行された朝鮮人陶工の一人である李参平に始まります。彼は肥前の大名である鍋島直茂によって連れてこられ、日本名を｢金ヶ江三兵衛｣と呼ばれました。日本で｢李参平｣と呼ばれていたわけではありません。1616年、彼は有田の泉山で白磁に適した良質の石を発見し、そこで日本で初めて白磁を焼きました。これが有田焼の起源で、後に酒井田柿右衛門の色絵や伊万里焼の輸出に発展することになります。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　(25・3・15)

青磁の実物を生徒の身の回りから探すことは難しいでしょうが、染付けなら簡単です。もちろん中国産の骨董品である必要は全くありません。日本の染付けでも江戸時代の伊万里焼、いわゆる古伊万里は高価ですが、ひびが入っていたり疵のある物なら、一桁安く千円単位で買うことができます。明治以降の物なら百円単位まで安くなります。もちろん現代の物でも教材になります。日常生活の中に歴史の痕跡があるということに気付かせたいからです。現代の染付けならば、ほとんどの家庭にあることでしょう。太陽にかざして見ると光が透ることや、軽く弾くと金属音がすること、断面が白く緻密であることなどを確認させましょう。｢なあんだ、これなら家にもあるよ｣と言わせてみたいものです。

色絵については、少々説明が必要でしょう。呉須で絵付けをする場合は、施釉前に行うため、二次焼成の必要はありません。しかし顔料によって色絵付けをする場合は、一回目の本焼き、つまり一次焼成後に絵付けを施し、800度程で二次焼成をします。磁器とするためには1300度以上の高温で焼く必要がありますが、顔料はそんな高には堪えられず、思い通りの色に発色しないので、2回に分けて焼成することになるのです。一般に磁器が高価なのは、２回も焼成しているからでもあるのでしょう。それで呉須による絵付けを｢下絵付け｣と言うのに対して、これを｢上絵付け｣と称します。

色絵・上絵付けの骨董品はとても高価です。現代の物でも、いわゆる作家物や色鍋島は、小遣い程度ではとても手が出せません。しかし現代の雑器ならば買うことができます。器の表面をよく観察すると、青い染めつけは透明な釉薬の下に、色絵は釉薬の上になっているのがわかるので、｢上絵付け｣であることを理解させることができます。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　(25・3・16)

陶器の素地は多孔性、つまり水を吸い込みます。それで水を吸い込まないように表面に釉薬を施すわけです。一口に陶器と言っても、陶土の組成や焼成方法によって、焼き上がりには大きな違いができます。長石の含有量が多ければ、磁器に近い硬質の仕上がりになり、鉄分の多い土で酸化焼成すれば赤褐色になり、還元焼成すれば灰色になります。要するに見かけや感触だけで陶器を定義することは難しい。陶器と言っても、その幅は大変に広いのです。しかし日常的に土器を食器として使用することはないでしょうから、かなり乱暴な表現ではありますが、家庭で使う焼き物については、磁器以外はみな陶器と思って問題はないでしょう。

陶器は磁器に比べて厚手であり、弾いても金属音はせず、また素地は真っ白ではありません。色も手触りも、磁器に比べれば素樸な暖かみがあり、それが陶器の魅力の一つでもあるわけです。

蛇足になりますが、磁器は薄手で熱伝導がよく素地が白いので、お客様にお茶を出す際には、ぬるめのお茶に適しています。お茶の色もよく見えるので、上品な印象です。それに対して陶器は熱伝導が磁器ほどではなく、お茶の色が見えるとは限らないので、熱めのお茶や普段使いの茶碗として使われます。趣味の問題ですので個人の好みでよいのですが、生徒には磁器の特徴をよく理解して、薄い磁器の茶碗に熱湯のようなお茶を注いでお客様にお出しすることだけはないようにと、教えています。　　　　　　（25・3・24）

５月１８日（土）に、上尾市市民の歴史好きなグループを引率して、東京駅・江戸城趾の歴史散歩に行きます。大変に中身の濃い見学会になりそうですので、参加を希望する方は、どうぞ御連絡下さい。電話0493-54-8863　阿部泉

４０，イスラム教と偶像

　イスラム教では偶像礼拝が厳しく禁止されているため、礼拝所であるモスクはもちろんのこと、振興に関係ある装飾や美術品についても、偶像につながる可能性のある表現は、厳格に排除されている。コーラン自体には造形や芸術を規制する記述はないが、コーランに準じて尊重されるムハンマドの勤行録『ハディース』には厳しい制限が記されていて、偶像の排除はイスラム文化の大きな特色となっている。

偶像厳禁を理解させる恰好の教材は、ムハンマドの伝記漫画である。漫画の中では、主人公の姿を描かないわけにはいきません。しかしムハンマドの伝記には、後ろ姿はあっても、正面からムハンマドを描いた場面は、絶対にないのです。もし描くとしたら、顔の輪郭だけで、目も鼻も口もない、無表情な姿で描かれています。また当然のことながら、アッラーの姿も描かれません。神は光か声（言葉）によってのみ表現されます。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（25・3・23）

イスラム教の淵源でもあるユダヤ教でも、十戒で偶像崇拝が厳格に禁止されているため、神像は絶対に作りません。しかし同じくユダヤ教を淵源とするキリスト教では、偶像を聖像として崇拝したり、崇拝はしなくとも聖書の物語を普通に描いたり彫刻に表現しています。このあたりの違いについて、一言触れておいてもよいでしょう。千手観音や十一面観音像を見慣れている日本人は、仏像に顔や手がいくつあっても、それをおかしいとは感じません。仏像を拝んでも、あくまでその背後にある霊的存在を拝んでいるのであって、物質としての仏像その物を拝んでいるわけではないからです。しかしイスラム教徒から見れば、それは紛れもない偶像礼拝なのです。

さて、図書館にはきっとムハンマドの伝記漫画があると思います。しかしそれをコピーしてプリント教材にする際には、面白半分に目鼻を描いたりすることのないように、十分指導しなければなりません。日常の生活における宗教・信仰の重要性をあまり感じていない日本人、わけても現代の若者にとっては、そのような行為の持つ重大な問題点を持っているか、理解することができません。『悪魔の詩』翻訳者殺人事件とまでいかなくても、事によっては重大な結果をもたらす可能性があるからです。この際、自分の信仰心の有無に関係なく、他人の信仰を尊重することの大切さを理解させたいものです。　　　　　　（25・3・24）

４１，アラベスク模様

イスラム教の偶像禁止と密接な関係があるのが、アラビア語の文字装飾とアラベスク模様です。固有の文字を美しく書くことは、漢字や仮名の例を待つまでもなく、世界の言語にいくらでも見られることですが、聖典の書写ということに関する限り、アラビア文字の装飾性は際だっています。イスラム文化独特の模様は｢アラベスク模様｣と呼ばれていますが、｢アラベスク｣とは｢アラブ風の｣を意味するイタリア語の｢アラベスコ｣に由来する言葉で、１５～１６世紀に、ヨーロッパ人が近隣の異文化を差別化するために創り出した言葉です。しかし今日では幾何学模様や植物模様などを複雑に組み合わせた、イスラム的装飾模様の総称と理解してよいでしょう。

イスラム文化に特徴的な模様とはいうものの、その基本的要素はイスラム教以前に見出せます。葡萄・アカンサスの葉・石榴・棕櫚・唐草などの植物紋様は、古代エジプト・ギリシァ・ペルシァなど、古代地中海世界・オリエント世界で発達していました。植物模様が好まれたことは、乾燥が著しく植生に乏しい自然環境と無縁ではないでしょう。幾何学模様もアッシリア以後に多くの例があり、アラベスク模様がイスラムの独創と言い切ることはできません。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（25・3・25）

７世紀にイスラム教が勃興すると、それ以前の伝統的模様を受け継ぎ、葡萄唐草・パルメット模様・菊花のようなロゼット模様が発達しました。それに幾何学的模様が組み合わされると、植物としての写実性は失われ、葉・蔓・花などの植物の各部分が無機的に結合されて模様化されます。そしてさらに唐草やパルメット模様が、本来は植物模様であることがわからなくなるほどに抽象化・幾何学化されてゆきます。幾何学的模様が発達した背景としては、ギリシァ数学を継承してさらに幾何学が発達したことも見逃せないでしょう。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（25・3・27）

アラベスク模様には、これらの植物紋様や幾何学的紋様の他に、アラビア文字の紋様に特徴があります。それは、偶像に代わるものとして、コーランの文字が神の言葉として神聖視されたためでしょう。またアラビア文字は、曲線にも直線にも自由自在に変形が可能で、紋様その物になりきって装飾的表現の中に一体化させることができるという特性を持っているからでもあります。

アラベスク模様の意匠的特徴は平面的であり、基本パターンを反転させると対称になります。そして基本パターンを連続させたり反転させたりしながら、無限の広がりを創り出すことができます。古代オリエント地方では伝統的にタイルによる装飾が発達していましたが、アラベスク模様は、このタイルという表現手段によって、無間に建築物などの表面全体を覆うことができたのです。

色彩的特徴としては、｢ペルシアンブルー｣と呼ばれる鮮やかな青色、コバルトブルーを基調として、赤・黄・緑などの原色が好まれています。乾燥が著しく、水と植物が乏しい褐色の世界に於いては、日本人好みの中間色を多用した配色は退けられ、原色が好まれたのでしょう。実際、褐色の市街の中に｢青いモスク｣を見る感動は、現地でなければ味わえないものでした。

今日でも、アラベスク模様はコーランやモスクなどの宗教関係のものばかりでなく、食器や敷物やあらゆる装飾品・日用雑器の装飾に用いられています。日本の伝統的美術では、水墨画の例をみるまでもなく何も描かれていない空白部分に積極的意味があるのですが、物の表面を余すところなく埋めつくすアラベスク模様と見比べると、その美しさに感動すると同時に、日本人の美意識との差異を改めて実感します。

さてこのアラベスク模様を教材化するには、図説資料集の写真でもよいのですが、万華鏡を覗いたような美しさを理解させるために、できることならタイルを見せたいのです。しかし壁一面のタイルを直接みせることはできません。第一、タイルその物が手に入りません。かつて神戸のトルコ人の経営する土産物店で沢山買ったことがありましたが、今は連絡も取れなくなってしまいました。そこで図書館や博物館でイスラムタイルのカラー写真を何とかして入手し、それを何回もカラーコピーして貼り合わせます。基本パターンさえ入手できれば、あとはそれを無限大に繰り返していけばよいのです。１ｍ四方くらいの大きさになるまで連結すると、図説資料集では味わえない感動を伝えることができるでしょう。どうしてもカラーの基本パターンが入手できなければ、こちらからお送りすることもできます。

ここまで書いて、念のためにインターネットで｢イスラムタイル販売｣で検索すると、私がコピーを提供するまでもなく、いまは容易に通販で買えるようになっているので驚きました。通販での買い物をしたことのない私には手が出せない世界なのですが、若い方ならかんたんにできそうです。それでも私の提供するカラーコピーの砲がはるかに安価ですので、御希望の方は御連絡下さい。　　　　　　　　　　（25・3・28）

４２，焼畑農業とタピオカ

熱帯の土壌は、落葉が高温により分解する速度が速すぎることや、多量の香水で養分が流出してしまうため、酸性で痩せた土壌となってしまう。落ち葉の層は僅か１～３㎝、腐植土層も１０㎝以下しかありません。そのため傾斜地では地肌がむき出しになってしまいます。当然のことながら、農業には適していません。また酸化鉄・酸化アルミニウムを多量に含むため、鉄錆の色をしています。このような土をラテライト、あるいはラトソルといいます。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（25・3・30）

このような土壌が広がる地域では、伝統的に焼畑農業が行われてきました。それはまず一定の土地の樹木や草を伐採して放置し、火を放って燃やします。すると灰は肥料となり、土壌が改良されます。そこで２～３年間、作物を栽培し、地力が失われるとそれが回復するまで１０～２０年間も放置しておきます。こういう事を繰り返す粗放的農業を焼畑農業といいます。

粗放的とは言うものの、焼畑農業は熱帯雨林気候の地域ではまだ日常的に行われていて、環境問題を引き起こしています。焼畑や森林火災のもうもうたる煙が、シンガポールやインドネシアの大都市にも及び、視界不良や住民の健康にまで悪影響を及ぼします。人工衛星から撮影された写真を見ると、地球規模で煙が流れているのがわかる程の規模です。燃やされた樹木は、それだけ大量の二酸化炭素を放出します。たとえそこに農作物が栽培されたとしても、放出された二酸化炭素を帳消しする程にはとうてい及びません。

焼畑で栽培される農作物は、荒廃地でもよく収穫できるキャッサバ、ヤムイモ、タロイモなどの根菜類が中心です。ヤムイモやタロイモは、日本の里芋に近い仲間ですが、キャッサバは身近なものでは例えようもなく、日本人には馴染みのない作物です。見かけはダリアの球根のようで、葉は麻の葉に似ています。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（25・4・1）

そのキャッサバの主な生産国は、ナイジェリア、ブラジル、タイ、インドネシア、コンゴ、ガーナ、インドなどで、サバナ気候や熱帯雨林気候の地域です。日本ではあまり馴染みはないのですが、食用の澱粉を採る作物としては、穀物類を除けば馬鈴薯に次いで重要な作物です。芋状の形ではなく、澱粉やその加工品として、日本にも輸入されています。身近なところでは、タピオカがキャッサバの澱粉で作られていますね。その他には発酵させてバイオマスエタノールを生産したり、チューブ糊の原料になるなど、工業原料にもなっています。

私はタピオカと言うものを全く知りませんでしたが、生徒が文化祭で販売したいというので初めて知りました。タピオカを材料にして、焼畑農業やそれに伴う環境問題について話を発展させてみては如何でしょうか。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（25・4・2）

４３，卑弥呼とブリキ

卑弥呼とブリキに一体どのような関係があるのか、想像もできないでしょう。わざとちんぷんかんぷんな題を付けたので、無理もありません。もちろん直接の関係はありません。なーんだと、がっかりされそうですが、何かなと思っていただければ、それで私の目的は達成されたのです。そう腹を立てずに、最後まで読んで下さい。

　ブリキは青銅鏡の代用なのです。と言えばもうおわかりですね。教科書や図説資料集には、古代の鏡についていろいろ写真や記述があります。卑弥呼が魏の皇帝から百枚の鏡をもらったこと、前期の古墳には副葬品として呪術的な宝器として、鏡がよく副葬されたこと、鏡と剣と玉が三種の神器として重視されたことなどが思い当たります。

　図説資料集にはそれらの古鏡の写真が載っているのですが、鏡の写真は例外無しに装飾の施された裏面しか見かけません。小学生の頃は、なぜ表面が載らないのだろうかと思ったりもしましたが、よくよく考えれば、表面はもともと何の模様もないつるつるの平面ですから、錆びてしまった表面を写真に撮っても、少しも面白くない。しかし鏡の用途から考えれば、表面が重要なのであって、金属の鏡がどのようなものであったのか、誰もが疑問に思うでしょう。

　そこで錫と銅の合金である青銅製の鏡を作ってみました。作り方についてはここで解説しませんが、インターネットで検索すれば、きっと作り方が紹介されているはずです。私は庭先で七輪を使って作りましたから、その気になればできないことはありません。それでも仕掛けが大ごとになりますので、手っ取り早くブリキの鏡を使ってみようというわけなのです。

　ブリキとは、スチールの表面を錫メッキしたものです。最近は少なくなりましたが、液体を入れる一斗缶はまずほとんどがブリキ製です。その他食品や薬品を入れる容器として、またまだ身近なところにたくさんあります。これを円形に切り抜き、真鍮磨きなどで時間をかけて研磨します。自作の青銅鏡よりは映りが劣りましたが、鏡としての機能は十分持っています。ただし現代のガラスの鏡と比較してはいけません。そこまで鮮明には映りません。それでもこの際、ブリキという物を理解させておきたいものですし、トタンとの相異も教えておきたいのです。ブリキでは物足りない場合は、神棚の御神体として鏡をお祀りすることがありますから、仏具・神具を扱っている店に行って、現代の神鏡を入手することもできます。

　鏡が化粧道具の一つに過ぎなくなっている生徒に見せる時には、｢いいかい、君達はまだ鏡というものを１回も見たことがないと仮定しよう。君達は自分がどのような顔をしているか、知らないのです。そしていきなり鏡を覗いてみた時の驚きを想像してご覧なさい。魂を抜かれるとか、鏡には嘘が見抜かれてしまうとか、神秘性を感じるのも尤もと思うことでしょう。鏡が御神体となったり、宝器として扱われたりしたことも、納得ができると思います｣と話すのです。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（25・4・3）

４４、穢れと清め

　上代日本人の信仰や習俗について、日本史では、古墳時代の人々の生活として学習します。その内容は、豊作を祈る祈年祭、収穫を感謝する新嘗祭のほか、山・樹木・巨石・絶海の孤島・川の淵などを神の宿る所と信じて、これらを祭祀の対象としたこと、またこれらに起源をもつ古社、さらには、汚れを払い災いを免れるための禊ぎや祓え、鹿の骨などを焼いて吉凶を占う太占、熱湯に手を入れて真偽を神判する盟神探湯などです。また現代社会や倫理では、日本人の伝統的思想として、罪・汚れや、その対極にある清浄の概念について、さらに詳しく学習します。

　これらの信仰習俗は、ものによっては現代でも普通に行われていて、違和感が全くありません。それだけ生活に溶け込んでいるのでしょうが、逆にその習俗に歴史を実感しにくいとも言えますね。さすがに盟神探湯は現在はありませんが、いわゆる「お払い」や「お神籤」は、これらの延長上に理解されるものです。

　どのようなことを罪・穢れと考えるかは、民族や宗教によって全く異なります。『延喜式』巻八祝詞には「六月晦大祓」が記されていて、古代に於ける罪穢れが具体的に示されています。しかしその内容は、現代人の感覚では差別にあたる病気であったり、言葉に表すこと自体おぞましい近親相姦や獣姦であったり、田の溝を埋めるというように、今となっては罪穢れの範疇には入らないものであったり、不明なものであったりと、なかなか取り扱いが難しい。そのため神社本庁が定めている大祓祝詞では、この部分が削除されているほどです。そう言えば、國學院の学生時代に暗記した大祓の祝詞には、そのような言葉はありませんでした。

　現代人の誰にでも理解できるのは、『記紀』の神話の中で、伊弉諾尊が黄泉の国に死んだ伊弉冉尊を訪ね、腐乱している姿を見て逃げ帰り、禊ぎをする場面です。つまり死は穢れであり、それは禊ぎによって浄められるという理解がありました。

　死を穢れとして忌み嫌うことは、現代でも普通に見られることです。葬儀は専ら仏事として営まれています。神式の墓がないではありませんが、神社の境内で葬儀が行われることは、一般ではまず見られません。葬儀に行くと、喪主の挨拶状と共に、必ず一封の塩が添えられていますが、葬儀に参列した穢れを塩で浄めるようにとの心遣いでありまいす。

　そもそも塩に穢れを浄める霊力があるという理解は、これまたよく見られる習俗です。このことに関連して最も理解しやすいことは、相撲の各取り組みの前に、土俵に撒かれる塩でしょう。土俵は神聖な場所です。しかし一つ前の取り組みで、どちらかが土俵に手を着いてしまい、土俵には「負け」という穢れが着いてしまいます。それで次に土俵に上がる力士は、塩を撒いて穢れを浄めるのです。塩に穢れを浄める霊力があるという理解は、塩漬けにするといつまでも腐らないという経験や、純白の色からの連想でしょう。

　水で洗って穢れを浄めるとこもしばしば行われます。生徒が最も理解しやすいのは、寺社に参拝する際に、御手洗の水で手と口を濯ぐことでしょう。「御手洗」と書くと、生徒は「おてあらい」、つまり便所のことと勘違いをしてしまいますが、この際、本来の意味を説明しておきましょう。「御手洗団子」は、京都の下鴨神社前の茶屋が売り出したことに起源があるそうで、これも便所とは全く関係がありません。「水に流す」という慣用表現も、わだかまりを清算することを穢れを浄めることに譬えた、日本人独特のものと言うことができましょう。

　さすがに本当に水に浸かって禊ぎをすることはほとんどなくなりましたが、信心深い人は今でも、正月や何か重大なことを祈誓するに当たり、滝を浴びたり水をかぶったり、海や川に浸かって祈ったりします。これらはみな古来の禊ぎに由来する信仰的行為です。祓えは、いわゆる「お祓い」として、生活の様々な場面に見られます。神前結婚式、地鎮祭、交通安全や合格などを祈願をする際に、神主が御幣を下げた榊を振って、神前に頭を垂れる参拝者を浄めています。

　日本古来の信仰で、最も理想的な心の在り方は、「清き明き心」「清明心」とされてきました。「穢」の対極が「清浄」であり、それを色で表せば「暗黒」の対極が「明白」です。清く明るいことを尊ぶことは、何も日本古来の信仰に限りませんが、現代の生活の中に古来の信仰的習俗や価値観が生きていることを、改めて実感させたいものです。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（25・４・８）

４５、トルコ行進曲

｢トルコ行進曲｣という曲があります。作曲者はハイドン、モーツァルト、ベートーベンら何人かいて、正式にはそれなりの曲名もあるのでしょうが、｢トルコ行進曲｣で通用しています。なかでもモーツァルトとベートーベンの曲は、ある程度高度なピアノの技量が身についた少年少女の練習曲として、よく耳にします。聞けば、｢ああこの曲なら聞いたことがある｣と思い当たる人も多いことでしょう。

しかし改めて考えてみると、なぜ西洋音楽家によってトルコの行進曲が作曲されたのでしょうか。この場合の｢トルコ｣とはオスマン・トルコ帝国のことで、この曲の背景には、西洋諸国とオスマン帝国とのたたかいがありました。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（25・4・16）

軍隊には軍楽隊が不可欠ですが、オスマン帝国は世界で初めて軍楽隊をもった国とされています。その軍楽は｢メフテル｣、軍楽隊は｢メフテルハーネ｣と呼ばれました。メフテルのことを｢イェニチェリ｣と呼ぶことがありますが、イェニチェリとは正しくはオスマン帝国で新しく編成された常備歩兵隊のことで、メフテルハーネはその中に置かれた軍楽隊を指しています。

軍楽隊は、現在でも兵の歩調を整えたり、士気を鼓舞したり、儀式を荘重なものにする役目を果たしていますが、メフテルハーネは、戦いに於いて敵を威嚇するためにも用いられました。大人数による打楽器や管楽器の大音響は、遠くまで響き渡ったことでしょう。またメフテルに合わせて整然と行進してくる大軍を目にすると、襲来を待ちかまえる側にしてみれば、底知れない恐怖を覚えたことでしょう。現代の戦争に於いてはそのような威嚇的役目はありませんが、双方が近距離で相まみえて戦った時代に於いては、その効果は絶大であったに違いありません。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（25・4・17）

メフテルの音楽の特徴は、四拍子のリズムで、３回大きく敲いては１拍休む。それに合わせて３歩進んでは１回体を右か左に傾けて調子を整えるものです。如何にも見てきたようなことを書いていますが、まだ見たことはありません。

この恐ろしいトルコの軍楽を西洋人が聞いたのは、1529年と1683年のウィーン包囲戦の時でしょう。結果的にはオスマン軍は退却するのですが、その音楽の印象は後世に語り伝えられたものと思われます。それはその生年からして、メフテルを直接に聞く機会のなかったと思われるハイドン、モーツァルト、ベートーベンらが、メフテルに取材した｢トルコ行進曲｣を作曲しているからです。彼らにとって、メフテルは西洋音楽とは異なるエキゾチックな音楽であったに違いありません。そう思って改めてトルコ行進曲を聴き直してみると、何かわかるような気がしてきました。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（25・4・27）

４６、東京駅・江戸城歴史散歩

連休中は何も書けなくてすみませんでした。どこにも出かけてはいないのですが、何かと忙しく、すっかりご無沙汰してしまいました。実は５月１８日（土）に、上尾市民約５０人のグループをガイドして、東京駅と江戸城趾の歴史散歩に行くのですが、その下調べなどで忙しくしていたわけです。今回からしばらくの間、このテーマでお話しします。説明すべきことは頭の中に入っているつもりではありますが、文字にすることによってより整理ができると思います。そんなわけで、予行演習のようなつもりで、あたかも現地をガイドしているようにお話ししたいと思います。しばらくの間お付き合い下さい。

集合は、１８日午前９時、東京駅丸の内南口のホールです。復原された東京駅は、もう御覧になった方も多いとは思いますが、見るべき所をしっかり御覧になったでしょうか。けっこう見過ごしていることが多いものです。

①東京駅

明治も中頃、東海道線の起点は新橋駅、東北線の起点は上野駅で、起点が分断されていました。そのため早くから両者の中間地点に新駅を設け、両駅を結ぶ必要に迫られていました。そして明治21年（1888）には、中央停車場、つまり現在の東京駅を建てるべき位置も決定し、明治29年には、帝国議会で｢中央停車場｣の建設が可決されたわけです。　　　　　　　　　　　　　　　（25・5・９）

初めは逓信省工務顧問のドイツ人バルツァーの案によって、煉瓦造りの上に瓦葺きの唐破風屋根を載せる

和洋折衷案でしたが、明治天皇の｢ステーションは外国式がよい｣との意向によって、この案は立ち消えになってしまいました。そして辰野金吾が鉄骨煉瓦造りによって設計することになり、明治39年には設計が始まりました。よくオランダのアムステルダム駅を参考にしたと言われましたが、比べてみると、それ程似ているわけでもなく、最近は疑問視されているそうです。また初代鉄道院総裁後藤新平の意向により、計画は大規模なものに変更され、費用も当初予算の７倍にもなったそうです。後藤新平と言えば、関東大震災後、桁外れに大きな東京復興計画を立て、｢大風呂敷｣と言われた人物です。板垣退助が岐阜で遭難した時に診察したことでも知られているように、本来は医者でした。いろいろ批判もされる人ではありますが、彼が壮大な計画を後押ししてくれたからこそ、現在でも少しも見劣りしない東京駅なのだなと思うのです。

辰野金吾は御雇い外国人の建築家コンドルの弟子で、ロンドンに留学したこともあります。イギリスでは、特にヴィクトリアン・ゴシック様式を学び、その影響をうけた辰野の建築は｢辰野様式｣とも呼ばれます。非常に堅固なため、｢辰野堅固｣とも称されました。赤い煉瓦に白い花崗岩を帯状に重ねた水平の縞模様やアーチ窓に特色があり、重厚感がありながらも華やかさがあります。代表作は、日本銀行本店、東京駅、万世橋（かつての交通博物館）などがあります。先日横浜開港記念館を見て来ましたが、東京駅とよく似ていますね。東京駅竣工の２年後の大正５年頃の竣工だったと記憶しているのですが、当時の流行だったのでしょう。すぐそばにある旧横浜正金銀行は、赤白の色はありませんが、建物の雰囲気はよく似ていました。それもそのはず、設計者の妻木頼黄（よりなか）はコンドルのでしで、辰野の後輩に当たります。（25・5・10）

着工は明治41年（1908）、地盤沈下を防ぐため、青森産の長さ７～８ｍの松杭を11050本も打ち込みました 。これらの杭は、今回の復原工事で撤去されましたが、まだ十分に強度を保っていたそうです。新丸ビルの三連アーチのあるところに、松杭が展示されているので、是非御覧になって下さい。積み上げた煉瓦は920万個。そのほとんどが埼玉県深谷産でした。

実は、東京駅再建計画はかなり早い時期にあったそうですが、復原ではなく、高層ビルの駅舎が考えられていたそうです。そして深谷駅でも新駅舎の構想が練られたのですが、煉瓦造りの東京駅がなくなりそうなので、せめてその煉瓦を供給した深谷の新駅舎は、煉瓦造りの東京駅の雰囲気が残るようなものにしようと、ミニ東京駅のような駅舎が計画されました。そして平成８年（1996）、新深谷駅舎が完成しました。ただ耐震性の問題から、煉瓦造りではなく、表面に化粧煉瓦を貼り付けたものですが、外観はまさに｢ミニ東京駅｣なのです。そして結果的には本家の東京駅も高層ビルではなく、復原という形で煉瓦造りが残されました。私は埼玉県人なので、ついつい埼玉の地元ネタになってしまいましたが、もし深谷駅を見ることがあれば、公共駅と似ていることにそれなりの意味があることを実感して下さい。　　　　　　　　　　（25・5・11）

　東京駅が竣工したのは大正３年（1914）のこと。着工以来６年９カ月を要する大工事でした。長さは335ｍ、ドームの高さは35ｍもありました。現在でこそ駅舎の長さは適正な長さですが、当時としてはあまりの長さにみな驚いたことでしょう。開業の日、駅前に作られた仮設の凱旋門を、青島攻城軍が凱旋しました。つまり東京駅は凱旋門としての役割を果たしたわけです。手許にそのときの石版画がありますので、ご希望の方は御連絡下さい。図説資料集には、よく帝都東京駅の図が載っていますね。駅前には人力車、オートバイ、明治45年から営業を始めたタクシー、空には飛行船や飛行機が描かれ、新時代の雰囲気がよく表されています。手前に見える南口は乗車専用改札口、北口は降車専用でした。皇居を正面に望む中央口は、現在に至るまで皇室・ＶＩＰ専用です。

さて関東大震災でもびくともしなかった東京駅ですが、昭和20年（1945）５月25日、Ｂ29の焼夷弾によって被災し、ドームや３階部分が損傷を受けました。その後、昭和22年（1947）、丸かったドームは中央と同じ寄棟形に、焼けてむき出しとなった鉄骨は木造に、三階部分は取り壊され、2階建てとなって応急復興されました。あくまでも応急工事でしたから、これまで40年もよくもってきたと言えるでしょう。新設再建・復原の議論が起きるのは、時間の問題だったというわけです。復原される以前の東京駅は、下半分が第一次世界大戦戦勝記念碑、上半分が太平洋戦争敗戦の記念碑としての性格を持っているという理解も成り立つのです。事実、そのような根拠によって、復原計画に反対する人達もいました。

東京駅再建計画は、これまでに３回盛り上がりました。１回目は昭和33年（1958）、国鉄が24階建ての構想を発表しましたが、資金難で立ち消えになりました。2回目は昭和56年（1981）、国鉄が35階建ての構想を発表しましたが、国鉄民営化の議論により、これも立ち消えになりました。そして昭和62年（1987）、高層化計画が再び浮上すると、｢赤れんがの東京駅を愛する市民の会｣が作られ、署名活動や国会請願など、保存運動が市民レベルまで広がってきました。その後、技術・美観・機能・資金的な観点から議論が重ねられ、結局、平成11年に本来の形に復原されることが決定されたのでした。　　　　（25・5・12）

復原のなった東京駅がオープンしたのは、ヘシ性２４年１０月1日のことでした。総工費５００億円は、ＪＲ東日本が容積率による空中権を周辺の高層建築に売却して調達したものです。東京駅は３階の建築のため、上空にまだ建築が可能な空間があったのですが、周辺の高層建築にその権利を買い取ってもらったわけです。東京駅が高層建築に埋没してしまったということも聞きますが、だからこそ復原できたわけで、東京駅に行ったら、その｢埋没｣の様子も、とくと観察して下さい。

さて東京駅を見に来る観光客はひきも切らないのですが、見るべきものを見逃さずに見ているとは限りません。｢きれいになったなあ｣では、せっかく見に行ったのに、勿体ないことです。まずは３階建てになったドームですが、復原前の屋根より２ｍ高い３５ｍの高さになりました。初めは宮城県気仙沼の雄勝産の粘板岩（スレート）を使用する予定で、気仙沼に保管されていましたが、東日本大震災の津波で流出してしまい、結局、4500枚しか回収できませんでした。全体では４５万枚が必要で、被災を免れたものやスペイン産も使用されています。被災したスレートは、南ドーム皇居側下部に葺かれているそうです。

屋根を葺く銅板は厚さが0.4㎜もあり、釘を全く使われていません。現在は赤がね色ですが、いずれ緑青色に経年変化することでしょう。これだけの厚さがあると百年はもつそうです。

煉瓦は深谷産ではなく、常滑で焼いたそうです。二階以下は大正期の煉瓦、３階は新しい煉瓦ですが、離れて見ても、両者に違和感はありません。創建当時と同じ色合いを出すには、試行錯誤を重ねたことでしょうね。見逃されそうですが、積み重ねた煉瓦の隙間である目地には、技術者の腕とプライドが現れています。目地が蒲鉾形に膨らみ、目地が交差する部分も丁寧に作られています。このような目地を｢覆輪目地｣（ふくわめじ）と言い、高度な技術を要する職人技なのです。

煉瓦の赤と花崗岩などの白い水平の帯が辰野様式の特徴なのですが、その白い石もよく観察してみましょう。イオニア式の柱頭飾は花崗岩製で、創建当時は３階にありましたが、戦後復興工事では２階部分に移されていました。それが再び３階に戻されています。その下部の柱形や帯状の白い石のような部分は、花崗岩の粉に石灰とセメントを混ぜて調合したものを塗り、後に水で表面を洗い出して仕上げた擬石です。

ドームを下から見上げると、いろいろな装飾が見えます。最上部中央のそのまた中心はクレマチスの花ということになっているのですが、私にはそうは見えませんでした。鷲は幅2.４ｍもあるのですが、小さく見えますね。それだけ高いということなのでしょう。他には秀吉の兜の形をしたキーストーン、方角を示す干支の動物（東北の丑虎、南東の辰巳、南西の未申、北西の戌亥）、剣と鏡、鳳凰、動輪、矢束、などが見られます。南ドームでは白いアーチの一部が灰色になっていますが、この部分は創建以来残ったものだそうです。またドーリア式の柱の上部に、ラテン数字でＭＭＸⅡと刻まれています。これは完成した西暦2012年を表しています。

復原に当たり、打ち込まれていた１万本を越す松杭は抜かれてしまいましたが、同じ目的で丸ビル創建時に打ち込まれた松杭が、保存処理をされて丸ビルに展示されています。東京駅の地下にあったものもこれと同じようなものです。丸ビルの１階の北寄りに、三連アーチがあるのですが、そこに2本展示されています。あまり人がいないところで、知られていないのですが、これは是非見ておきましょう。わかりにくい場所なので、丸ビルの案内嬢に尋ねるとすぐに教えてくれます。

全体像を上から見るには、丸ビルの隣の新丸ビルがよいでしょう。７階のテラスから見下ろす景色は絶景です。もちろん無料で入れるのですが、コーヒーでも飲みながら一息入れるのもよいでしょう。

②東京中央郵便局

東京駅丸の内南口に近く、地上３８階の商業施設ＫＩＴＴＥが今年３月２１日にオープンしました。その下の方には、旧中央郵便局の建物が、高層ビルに取り付くように一部保存されています。実はこの保存を巡って、いろいろ悶着があったことは、記憶に新しいと思います。東京中央郵便局が竣工したのは、昭和６年のことでした。｢豆腐のよう｣｢白い箱｣と皮肉られ、高く評価されないこともあったのですが、日本近代建築２０選に選ばれています。またブルーノ・タウトは｢モダニズム（近代主義）建築の傑作｣と評しました。そもそもモダニズム建築の特徴とはどのようなことなのでしょうか。まず合理的・機能的であること。その結果として装飾があまりありません。そして新技術である鉄筋コンクリート造りであることです。そのため、直線的な構成をもった立方体のようになり、確かに豆腐のように見えるのです。装飾性のなさは、装飾過剰気味の東京駅とは対照的ですね。しかしそのような東京駅の真ん前に、敢えてその正反対の建築をぶち建てた勇気には、私は感心するのです。装飾を大胆に排除するということは、造形その物で勝負するということです。と言っても、ただの白い箱ではないかと言われそうですが、よくよく観察して下さい。

柱と梁と壁や窓だけで構成されています。まるで障子のようだとは思いませんか。建築を構成する最小限の要素だけです。虚飾を剥ぎ取り、最小限に必要なものだけで表現しようとする感性は、日本文化の特徴の一つですね。水墨画然り。俳句然り。書院造り然り。実に日本的なのです。それでいて細かいところまで配慮が為されている。例えば、窓の大きさを見てみましょう。１階から３階までは窓はほぼ同じ大きさですが、４階の窓は小さくなっています。そして4階と5階の間に水平の帯があり、5階はすこしセットバックして建てられています。そのため、下から見上げると、上部ほど小さく見える。ギリシア神殿のエンタシスと同じような効果をもたらしています。なかなかの優れものとは思うのですが、如何でしょう。

大学生の頃、ここで小包の仕分け作業のアルバイトをしていました。完全に徹夜でやるので、時間の割にはよい収入になり、貧乏学生にとっては大いに役立ったものです。その頃は何の自覚も知識もなく、見過ごしていましたが、知らないと言うことはこういうことなのかと、改めて思い知った次第です。（25・5・14）

　平成20年、このような価値ある建築を日本郵政株式会社が、一部を保存しつつも再開発するという計画を発表しました。しかし建築の専門家などから反対運動が起こり、翌年２月26日、衆議院総務委員会で鳩山邦夫総務相が、再開発計画見直しを明言する事態となりました。その時の総務相の言葉が実にユニークで、話題になりました。曰わく｢朱鷺を焼き鳥にして食べるようなもの｣。そして３月４日には解体作業中に抜き打ち視察し、ニュースにもなりました。結局日本郵政は数日後に、保存部分を二倍に拡大した計画を発表し、総務相は｢焼き鳥ではなく、剥製にして残るような計画変更をお願いしたい｣と言ったのでした。鳩山総務相の抜き打ち視察は、少しは効き目があったのでしょうか。

平成２４年７月には、地上３８階、地下４階の商業施設ＫＩＴＴＥがオープンし、私達はその｢剥製｣をこうして見ることができるわけです。ＫＩＴＴＥには全国各地の食の名品や名店が並び、居ながらにして各地の土産物を買うことができます。私などはただ眺めるだけで何も買えませんでしたが、行ってみるだけのことはありそうです。また本業の郵便局は1階で業務をしていて、東京駅の記念切手などを買うことができます。

③丸ビル

　東京中央郵便局からすぐに、丸ビルに行ってみましょう。現在は平成１４年に立て替えられていますが、旧丸ビルが竣工したのは大正１２年。地下1階、地上８階の鉄筋コンクリート造りで、施工したのはアメリカの建築会社です。高さは旧建築基準法に許された100フィート（３１ｍ）で、後に次々に丸の内に建てられる建築の高さがみな揃うことになりました。その結果、今日のような高層建築ができる前は、３１ｍのス

カイラインが独特の都市景観を作っていました。経済的合理主義を追求する、米国式オフィス建築の代表作で、その後丸の内一帯に同様の建築が立ち並び、｢一丁紐育｣（いっちょうニューヨーク）と称されたオフィス街のシンボル的存在でした。昭和戦前までは日本最大のビルで、｢丸ビル何杯分｣という容積を・堆積を比較する基準として、よく引き合いに出されたものです。１・２階に日本で初めてショッピングモール形式を導入し、オープン時のキャッチコピーは｢日曜日なのに東京駅に降りていた｣というものでした。

　現在の丸ビルは、地下４階・地上３７階、高さ179ｍの高層建築で、下層に旧丸ビルの面影が残されています。しかしこれとても新築で、旧丸ビルが一部保存されているわけではありません。丸ビルには旧丸ビルが目に見えて保存されているわけではありませんが、東京駅についてお話しした時に触れた、地下に打ち込まれた松杭が1階の最北部の三連アーチの側に保存展示されていますから、必ず見ておきましょう。ここは何時いっても誰もいません。余り知られていない穴場の一つです。

④日本工業倶楽部会館

　新丸ビルを通り過ぎて一すじ目から鱗が落ちる左折すると、黄土色の平面的な壁面が特色の日本工業倶楽部会館があります。平成１５年に新館が竣工し、三菱信託銀行本社ビルとなっていますが、旧館の一部がよく保存されていて、往時の様子を伺うことができます。旧館は、大正９年に実業家の社交クラブとして建てられました。正面屋上には、当時の工業を象徴する炭坑夫と紡績女工の像が立っています。また国賓を迎えることも考慮して、正面玄関にはドーリア式のエントランスポーチがあり、なかなか重厚感があります。

⑤東京銀行協会ビル

　道をそのままお堀の方に進むと、左手に東京海上日動ビルがありますが、東京海上は三菱系の企業です。丸の内一帯には三菱系の企業が多いのですが、そのことについて一寸触れておかなければなりません。明治初年、丸の内一帯は大名屋敷が取り壊され、一面の草原になっていました。それを陸軍が練兵場として使っていたのですが、明治23年、三菱の2代目、岩崎弥之助が128万円で払い下げを受け、三菱が原と呼ばれていました。この金額は当時の東京市の予算の三倍にあたる巨額でしたが、当時はすでに中央停車場、つまり後の東京駅の位置も確定し、駅前のオフィス街となることを見越しての投資でした。そういうわけで丸の内一帯は三菱の所有地となり、現在に至るまで三菱系企業の本社が集中しているのです。

　日比谷通りに出た所で右に曲がると、東京銀行協会ビルがあります。道を挟んで和田倉交番の当たりからの方が、全体がよく見えるでしょう。これも平成５年に新館が竣工しましたが、旧館の一部が保存されています。旧館は大正５年に竣工し、煉瓦造り３階建てでした。明治２７年に三菱一号館が建てられて以後、丸の内一帯は赤煉瓦館が立ち並び、明治末から大正初期にかけて、丸の内一帯は｢一丁倫敦｣と呼ばれたものです。この東京銀行協会ビル旧館は、その面影を残しているというわけです。

⑥江戸城趾大手門

　ここでは城の防衛の工夫についてよく観察しましょう。大手門は門の形式としては｢高麗門｣と呼ばれます。２本の本柱の上に切妻屋根を載せ、本柱の手前内側に控え柱を立て、その上にも小さな切妻屋根を載せていて、城門や寺門によく用いられました。大手門は江戸城の正門に当たり、かつては橋が架かっていました。門を入ると、高麗門と櫓門に囲まれた四角い区画があります。これを枡形といい、門の外側にあるものを外枡形、内側にあるものを内枡形と言います。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（25・5・16）

この枡形は、敵が一気に城内に進入できないように、その動線を直角に曲げさせ、城門と渡櫓で囲まれた狭い一画に封じ込めて、周囲から一斉に攻撃するための防御施設です。

枡形の広場の南西隅に鯱（しゃちほこ）が保存されています。これはかつて渡櫓の上にあった実物で、｢明暦｣の元号が刻まれているのが見えます。つまり明暦の大火後の再建時のものでしょう。そもそも城郭建築の屋根には鯱がつきものですが、鯱は空想上の神魚で、火災に際しては水を吹き出して火を消すとさたため、火事除けの呪いとして飾られています。

櫓は｢矢倉｣でして、本来は武器庫でした。城門や城壁の上に一段高く作られた建造物のことで、射撃のための孔である狭間（さま）や石落としが設けられることもありました。石垣と石垣の間を門のように渡している櫓を、特に渡櫓と言います。高麗門を入り、すぐ右手の門がそれですので、よく観察して下さい。江戸城には多くの櫓があったのですが、その多くが取り壊されてしまいました。現存する櫓では、三層の富士見櫓や二層の桜田櫓が有名です。いずれもすぐ側までは行けませんが、離れたところからでも城郭建築らしい雰囲気がよくわかります。

ついでのことですが、櫓によく似たものに｢多聞｣（たもん）があります。長屋造りの櫓と言えばよいでしょうか。本丸にはかつては１５の多聞がありましたが、現在は富士見多聞だけが残っています。松の廊下跡の近くにありますから、これもよく観察して下さい。その際は、濠の水面からどのくらい高いかもよく確認しましょう。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（25・5・17）

⑦番所

　さて大手門の渡り櫓を潜って左に曲がると、皇宮警察が出入りをチェックするところがあります。ここで札を受け取ったら、なくさないようにしましょう。すぐ右には尚蔵館があり、代々皇室に受け継がれてきた書画・工芸品が展示されています。無料ですので、時間があれば見学しましょう。その隣に売店・休憩所とトイレがあります。その休憩所のすぐそばに、カナダの国旗にデザインされているベニカエデの木があるので、これも探してみましょう。これはかつて昭和天皇の御病気平癒を祈って、カナダ政府から贈られたものです。わからなければ売店の方に尋ねれば、すぐに教えてくれます。

カエデの目の前が、最初の番所である同心番所です。同心とは庶務・警備を担当する下級役人の総称です。同心番所があるところも、周囲を見回すと枡形になっているのがわかることでしょう。この枡形の入り口に当たるところが下乗門で、大名の供をしてきた者たちは、ここで主君が帰ってくるのを待っていました。ですから、同心番所の目的の一つは、彼らを監視することでもありました。ここでは多くの従者たちが色々情報を交換したり、噂話をしていたことでしょう。｢下馬評｣という言葉は、第三者の興味本位の批評のことですが、その語源はこのような下乗門前の噂話なのです。ここを駕籠に乗ったまま通過できたのは、紀伊・尾張・水戸の御三家だけでした。同心番所の建物では、妻瓦の葵紋を確認しましょう。　　　（25・5・23）

同心番所のある枡形を直角に左折すると、百人番所があります。ここは根来組・伊賀組・甲賀組・二十五騎組の４組が交替で警備をしていた検問所で、それぞれの組には100人の同心が配属されていました。根来・伊賀・甲賀と言えば、忍者を連想しますね。伊賀組の首領服部半蔵の名をとった半蔵門でもわかるように、忍者の子孫が幕府に警護役として仕えていたわけです。

百人番所を背にすると、中の門跡が見えます。このあたりの石垣は、加工して隙間なく積み上げた切込接（きりこみはぎ）という積み方で、威圧感があります。このような積み方は手間がかかるために、人目につく場所に用いられていることを確認しておきましょう。門扉のあった位置には、柱のあった孔が残っていますので探してみましょう。門の跡のすぐ右前が大番書です。ここにはより格の高い与力・同心が警備に当たっていたところで、建物その物も同心番所より立派な造りです。

⑧本丸跡

ここから急な坂を上り、右に曲がったところが中雀門跡で、本丸の入り口に当たります。この辺りの石垣は文久３年（1863）の火災で損傷し、ひびが入ったり焼けただれています。

本丸跡は現在は一面の芝生の広場ですが、かつては表・中奥・大奥の建物がびっしりと隙間なく建ち並んでいました。しかし文久３年の火災で灰燼に帰し、幕末には何もなかったのです。この広場のあちこちには、珍しい草木が植えられているのですが、それらの説明はここでは省略します。また赤穂事件のきっかけとなった松の廊下の跡もありますが、そこの説明を読んで下さい。

芝生の中央には、午砲台の跡を示す石が置かれています。ここはかつて気象台が置かれていたところで、明治４年から昭和４年まで、ここで近衛兵が正午を知らせる時報の大砲を撃ち、その午砲は｢ドン｣と呼ばれて東京府民に親しまれていました。それ以後はサイレンに替わりましたが、それすらもう知らない世代が増えています。

⑨天守台

　天守閣は、家康の慶長年間、秀忠の元和年間、家光の寛永年間の３回建造されました。元和の天守閣を改造した寛永の天守閣は外観５層、内部は６層で、石垣も含めて地上から58ｍの高さがありました。国会議事党は65ｍありますから、それより少し低いと言えば見当がつくでしょう。

　寛永の天守閣は、19年後の明暦の大火（1657年）で焼失。翌年、前田綱紀によって天守台（天守閣の石垣）が築かれました。天守台は高さ11ｍ、東西41ｍ、南北45ｍもあります。江戸城の石垣には初めは伊豆の真鶴石という黒っぽい安山岩が多用されましたが、材質は花崗岩であることからも、後の再建であることがわかります。明暦の大火にかかった天守台の石は、中雀門あたりの石垣に転用し、旧天守台の石を総取り替えしたわけです。その後、天守閣が再建されなかったのは、家光の叔父に当たる保科正行が家光に助言したことに拠っています。

　天守台の東面の石には火災による損傷が残っていますが、これは文久年間に本丸が焼失したさいのものです。天守台を上ると、南面の内側が低くなっていますが、これが本来の天守台の床面です。つまり地階があったわけです。天守台頂上の現在の地面は、後で盛り土されたものです。ここには明治15年に気象台が設けられました。｢台｣とは天文台の｢台｣と同じで、四方を観望できる高い土壇のことです。天守台から北を望むと、武道館の屋根が見えます。武道館のあるところは北の丸と呼ばれる地域で、ここには御三卿の屋敷がありました。天守台の南東隅には三等三角点がありますが、近付くことは出来はません。天守台の南面には金明水と呼ばれる井戸があり、水面が見えます。ただし本来ここに立ち入ることは禁止されていて、巡回の皇宮警察官に叱られるかもしれません。さらに南面する石垣の最下部には、排水溝も見られます。

⑩大嘗祭跡

　４万坪もある本丸広場は、平成２年に大嘗祭が行われたところですので、ここで少し脱線しますが、天皇の即位についてお話しをしておきましょう。

　天皇が正式に位に就くためには、３つの儀式を経る必要があります。まずは先帝が崩御されると、皇太子がその日の内に｢践祚｣（せんそ）します。｢践｣とは位に就くこと、｢祚｣とは天皇の位を意味します。具体的には皇位のシンボルである三種の神器を受け継ぐことなのですが、鏡は天照大神を祭った宮中三殿の賢所に御神体として祀られていますので、これは動かすことができません。残りの剣と璽（勾玉）、及び国璽と天皇御璽を侍従長が新天皇の机の上に置くのです。これを｢剣璽渡御の儀｣と称します。剣と璽は、日常的には天皇の寝室に隣接する剣璽の間に安置されています。戦前は天皇が１泊以上の旅行をする場合は、侍従が捧持して随行したものです。これを｢剣璽動座｣と称しました。今上陛下が践祚されたのは、昭和64年１月７日ですから、一日たりとも空白は有り得ないのです。　　　　　　　　　　　　　　　　　（25・5・29）

　践祚に続いて｢即位｣式が行われます。今上陛下の即位式で｢････即位を内外に宣明いたします｣と述べられたように、即位とは、皇位についたことを天下に布告することなのです。奈良時代以前は践祚と即位が未分化でしたが、平安時代以後に分離され、今日に至っています。践祚後、１年以上たってから行われますので、今上陛下の場合は、平成２年11月２日に行われました。

　そして践祚に続いて｢大嘗祭｣が行われます。これは即位後、最初に行われる新嘗祭のことで、天皇一代に一回限りの、最重要な祭儀なのです。新嘗祭は、その年の新穀を天皇が神に捧げ、御自身もこれを召し上がる、いわば豊作感謝の祭儀で、国民の祝日としては、現在は勤労感謝の日として行われています。今上陛下の大嘗祭が行われたのがこの本丸広場でした。ここでようやく江戸城趾の話に戻りましたね。かなり寄り道をしてしまいましたが、こういうことでもないと触れる機会もありませんので、寄り道は承知で長々とお話ししました。大嘗祭を執り行うためには様々な社殿が建てられるのですが、これらの建物は、祭儀の終了後に跡形もなく取り壊されてしまうのです。そのため、本丸広場中程の東寄りにある売店に、それらの模型が展示されているので、是非見学しておきましょう。

⑪桃華楽堂

　本丸広場の最北端東寄りに、独特の曲線の屋根をした建物があります。これは｢桃華楽堂｣と称して、昭和41年に昭和天皇の皇后であった香淳皇后の還暦記念として建てられた音楽堂です。香淳皇后の誕生日が３月であることから、お印は｢桃｣と定められていました。また｢華｣という文字は｢十｣が六つと｢一｣が一つで構成されていることから、数えで61歳に当たる還暦の意味も込められたということです。ここでは主に洋楽が演奏されますが、隣接する楽部の建物では、雅楽が演奏されます。

⑫二の丸庭園

　さて楽部の前を右に曲がって下ると、｢汐見坂｣の急坂にさしかかります。ここで転ぶと、一気に下まで転げ落ちそうな急勾配です。その名の如く、江戸時代にはここから海が見えました。なにしろ東京駅のすぐ側まで海だったのですから。坂を下りて左手の石垣の石には、すだれと呼ばれる筋が刻まれています。一種の装飾なのでしょう。

　坂を下りたら、右斜め前方に進み、雑木林の中の小道を進んで行きます。この雑木林は、昭和天皇の御発意で、失われつつある武蔵野の雑木林を皇居に再現したものです。ここが都心であることを忘れさせてくれる癒しの空間ですね。

　林を潜り抜けると、二の丸庭園が広がっています。ここには二の丸御殿が建っていたのですが、幕末に焼失してしまいました。そして東御苑の整備・公開に当たり、９代将軍家重の頃の庭絵図をもとに回遊式の庭園として復原されたものです。ですから新しいのですが古い形を残しているわけです。ここには四季折々の花が咲きますが、梅雨時に咲く花菖蒲は見事なものです。池には今上陛下の御発意により、インドネシアのヒレナガゴイと日本の錦鯉を交配して作られたヒレナガニシキゴイが優雅に泳いでいます。また珍しい水生植物も見られますから、解説に従って御覧になって下さい。先日５月に行った時には、カイツブリが見られました。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（25・6・1）

⑬平川門

　暫くご無沙汰してすみません。また再開します。二の丸庭園から、都道府県の木を右手に見ながら進むと、突き当たります。それを左折すると道なりに平川門に至ります。ここは外枡形を備え、濠の中をコの字形に屈折する通路などがあり、複雑な構造をしています。ここは高麗門・櫓門・枡形・木橋が揃って残っていて、城門の防御の様子をよく見られるところです。城を守るという視点から、それらをセットにして確認してみましょう。この門は奥女中の通用門であり、｢お局門｣とも称されました。いわば江戸城の勝手口にあたります。また北の丸に済む御三卿の登城門でもありました。

　門を出るとすぐに橋を渡りますが、欄干の擬宝珠は当時の物で、慶長・寛永・元禄の銘が残っているので探してみましょう。

⑭太田道灌公追慕之碑

　橋を渡ると正面が毎日新聞社の本社です。渡って左折すると、すぐに太田道灌の石碑があります。それはそもそも江戸城は太田道灌が創建した事に始まる事に因っています。それで石碑の石材も、城壁の石を転用したものとなっているのです。碑文は読みやすいのですが、長くなるので、最初の部分だけでもなぞって読んでみましょう。道灌が上洛した時のこと、後花園上皇に江戸の景色を問われ、｢我が庵は松原つづき海近く富士の高嶺を軒端にぞ見る｣と歌を以て奉答しました。この有名な逸話が最初に刻まれています。それに対して、上皇も歌でお応えになりました。曰わく｢武蔵野は高萱のみと思ひしにかかる言葉の花や咲くらむ｣と。この上皇のお歌は刻まれていませんので、少々補っておきましょう。歌としては特別に秀歌ではありませんが、歌をもってやりとりするなど、古の日本人の心の余裕と文化的水準には感心します。現代短歌とは大違いです。

　さて東京駅・江戸城趾歴史散歩もそろそろ終わりです。道灌の碑を過ぎてもう少し進めば、地下鉄の竹橋駅がありますから、ここから一駅乗って大手町で降ります。そしてＢ１の出口から地上に出ましょう。朝には開いていなかった新丸ビルも、この時間になれば入れますから、７階までエレベーターで上がり、東京駅全体を見下ろすことができます。また午前中には逆光で写真に撮れなかったでしょうが、午後になればそういうこともありません。改めて東京駅を見下ろし、美味しいものでも食べて終わりにしましょうか。

⑮幻のレリーフ

　一旦終わりにしたはずなのですが、余力と時間のある人のために、もう一つ穴場を御紹介します。京葉線八重洲地下改札口のすぐ側に、不思議なレリーフが壁面に展示されています。これは終戦直後、駅の構内にＧＨＱの鉄道事務所が設けられることになり、高さ3.2ｍ　延べ54ｍの壁面に、復興に向けての日本人の心意気を示すために作られたものです。内容は、全国各地の名所・特産を描いた日本地図、江戸から京都までの名所を織り込んだ東海道の旅などで、多くの芸術家が参加しました。アルファベットで地名が表記されているのは、ＧＨＱを意識してのことです。そして1970年代にそこが駅事務室に作り替えられた際、新たに作られて壁面の背後に隠されてしまっていました。それが今回の駅復原工事に伴って、現在の位置に移されて展示されているのです。敗戦のどん底にありながらも、希望をもって立ち上がった父祖たちの心意気に触れてみましょう。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（25・6・13）

４７、池坊と立花

　花を挿して楽しむということが、一つの文化として確立されるのは東山文化でしょう。東山文化の学習では、現代の和風文化の源流になったものが多いことを学習しますが、その中の一つが後に華道に発展する立花です。

　京都の頂法寺、通称｢六角堂｣の寺伝によれば、聖徳太子が四天王寺建立のための資材を探してこの地まで来て、そこにあった池（井戸）で水浴をしました。その時、持仏の観音像を納めた箱を側らの木に掛けたところ、夢告によって観音様がそこに留まって衆生を救済することを願ったので、一堂を建立して観音像を安置したことが寺の縁起であるということです。その後、頂法寺は西国三十三観音札所の第１８番に数えられ、江戸時代にかけて多くの巡礼者で賑わうことになります。寺の周辺には、そのような巡礼者のための宿泊施設がたくさん設けられていましたが、現在、それらは修学旅行生専用の宿泊施設となって、その伝統を今に伝えています。もし京都の新京極の繁華街近くに修学旅行で宿泊することがあれば、本題とは離れてしまいますが、少し触れておいてもよいでしょう。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（25・6・21）

話は元にもどりますが、この太子水浴の池の畔に、小野妹子を祖とすると伝えられる僧坊があり、｢池坊｣と呼ばれていました。この池坊の僧は日頃から仏前に花を供えていましたが、その中でも池坊専慶という僧は、その巧者として洛中の評判となりました。大極という禅僧が著した『碧山日録』という書物には、寛正３年（1462）、佐々木高秀という武士が専慶を招き、｢草花を金瓶に挿す数十枚、洛中の好事者来りて競ひてこれを観る｣｢専慶来りて菊を折り瓶に挿す。皆其の妙に嘆ず｣と記されています。

その後16世紀の前半、池坊専応が現れ、立花の理論や様式を完成させた。彼はしばしば宮中に招かれて花を挿し、晩年には『池坊専応口伝』を残しています。　　　　　　　　　　　　　　　　　（25・6・27）

暫くご無沙汰して済みませんでした。学期末考査の準備と成績処理で、手一杯でした。

その中で彼は次のように言います。｢瓶に花さす事いにしへよりあるとはきゝ侍れど、それはうつくしき花をのみ賞して、草木の風興をもわきまへず、只さし生たる計なり。この一流は野山水をおのづからなる姿を居上にあらはし、花葉を飾り、よろしき面かげをもとゝし････｣と、また｢ただ小水尺樹をもつて江山数程の勝概をあらはし、暫時頃刻の間に千変万化の佳興をもよほす、宛仙家の妙術ともいひつべし｣と述べている。ようするに、ただ美しい花を生けて観賞するのではなく、草木の風情を大切にして花を生けること、自然を縮めて瓶にうつし、自然を象徴的に表すこと、そしてそれによってついには悟りの境地に到ることさえ説いたのである。立花は彼によって｢華道｣へと昇華したと言えよう。象徴的に自然を縮地して表現することは、枯山水の庭にも共通している。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（25・7・18）

さて教材としての生花であるが、その心得があれば教室で生けてもよい。できなければ、なるべく大きな写真を見せる。定規やコンパスで描けるような、幾何学的なものを意図して避け、自然を凝縮したような非対称的なものに美を感じる、日本人独特の美意識にも話を発展できる。しかし歴史の痕跡が身近なところにあることを発見させるためには、何とかして｢池坊｣のに文字のある資料を用意したい。用意できなくとも、｢池坊｣という言葉を聞いたことのある生徒は少なくないはずである。

４８、万葉仮名の生徒の名前

『万葉集』は現存最古の和歌集であり、天皇から葉庶民に到るまでの約４５００首を集めた、壮大な古代文化遺産である。歴史の授業では、小学校では必ずその名称は学び、中学校や高校では、有名な歌人の名前とその歌を、平仮名交じりの資料で鑑賞することであろう。しかし漢字ばかりで平仮名が全くない『万葉集』そのものを見せる授業は少ないのではなかろうか。　　　　　　　　　　　　　　（25・7・26）

｢そのもの｣と言っても、古い和本を見せるわけではない。平仮名・片仮名の使用は平安時代になってからのことであるから、当然のことながら『万葉集』は漢字だけで表記されている。このことは生徒も知識としては理解している。しかし漢字だけの『万葉集』を体験として見ることは少ない。漢字はその名の如く中国の文字、つまり日本にとっては外国の文字である。その外国の文字を用いて日本語を表記するという古人の努力と工夫を、是非とも体験的に理解させたいのである。

試みに、｢平仮名や片仮名を全く使わずに、文や詩を漢字だけで書いてごらん｣と指示してみるがいい。多くの生徒はたちまち混乱することであろう。そしてさらに｢それなら古の日本人は、いったいどのようにして日本語を漢字だけで書き表したのだろう｣と畳みかける。

日本語を初めて漢字で表記したのは、実は日本人ではなく、中国人であった。生徒がすぐにわかる例としては、｢邪馬台国｣がよいであろう。｢邪な馬の台の国｣とはいったいどのような意味なのか考えさせてみよう。｢邪｣は有り難くない字で、国名としては意味不明である。　　　　　　　　　　　　　（25・8・５）